



複合動詞の日中対照研究 ― 学習者の習得状況および両言語の対応する表現に基づいて ―

金, 蘭

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6151号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006151>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

複合動詞の日中対照研究

—学習者の習得状況および両言語の対応する表現に基づいて—

平成26年1月

神戸大学大学院国際文化学研究科

金 蘭

博士論文

複合動詞の日中対照研究

—学習者の習得状況および両言語の対応する表現に基づいて—

審査委員：田中順子 教授

中西泰洋 流通科学大学客員研究員

齊藤美穂 准教授

林 博司 教授

平成 26 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

金 蘭

要 旨

日本語には「動詞＋動詞」の複合形態が特に豊富で、単純動詞と比べ、豊かな表現ができると言われている。ところがそのような複合動詞は日本語学習者にとって習得困難である。語彙習得において学習者の母語の影響が根強く残ると言われている。中国語にも複合動詞はあるが日本語と一対一に対応するわけではない。従って、学習者の誤用の原因を考える上でも両言語の相違点を示す必要があると考える。そこで、本研究では次のようなことを考察の目的とした（第1章）。

1. 複合動詞の従来分類、予備調査で明らかになったことを踏まえ、日本語教育の観点から複合動詞に関する新たな分類を提案する。
2. 日本語の複合動詞に対応する中国語にはどのような表現があるかを考察し、対応関係をまとめる。
3. 学習者にとって習得しにくい、習得困難な複合動詞はどのようなものかを考察し、具体的な習得状況を調べる。
4. 両言語の対応する表現と学習者の習得困難点を踏まえ、対照分析する。
5. 日本語教育において、複合動詞の習得をどのように支援していけば良いのかを示す。

本研究ではまず、日本語の複合動詞の結合条件や意味分類に関する先行研究、中国語の複合動詞に関する先行研究、日本語学習者の習得に関する先行研究を整理し、問題点を示した（第2章）。森田(1994)、姫野(1999)の複合動詞の分類および予備調査の結果を踏まえ、日本語教育の観点から以下のような複合動詞の新しい分類を提案した（第3章）。

- 【タイプ①】前項動詞あるいは後項動詞が単純動詞として使われる際の意味と変化がない複合動詞（飛び立つ、持ち歩く、押し出す、読み始めるなど）
- 【タイプ②】後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から文法的な意味に変化した複合動詞（降り出す、読み切るなど）
- 【タイプ③】前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から抽象的な意味に変化した複合動詞（踏み切る、結びつくなど）
- 【タイプ④】後項動詞が単純動詞として使われないもので、接辞化している複合動詞（眠り込む、乗り込むなど）
- 【タイプ⑤】単純動詞として使われる際の意味から変化し、前項、後項ともに元の意味の手がかりがなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞（落ち着く、取り

成すなど)

次に、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現について構成要素の面と意味関係の面から考察を行った。村上春樹の小説『風の歌を聴け』とその中国語訳版（林少華訳）を取り上げ、取り出した複合動詞 336 語に対応する中国語表現について考察を行った。考察では、日本語の複合動詞に対応する中国語表現を大きく、語あるいは複合語レベルで対応するものと語レベル以上で対応するものと 2 つに大別した。語あるいは複合語レベルで対応する表現を（四字熟語を除いて）構成要素の品詞の面からみると、主に「動詞＋動詞」、「動詞」、「動詞＋形容詞」、「形容詞」、「動詞＋助詞」、「動詞＋名詞」という品詞の組み合わせになっていた。語レベル以上で対応する表現は、フレーズ表現になるものと「副詞的修飾語＋動詞」になるものがあった（第 4 章）。

そして、「複合動詞の前項と後項について各々の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得はそれに応じて難しくなる」と仮説を立て、上級レベルの学習者 30 名を対象に複合動詞に関する意識調査、文産出テスト、日中翻訳テストを実施した。その結果、複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得困難度が増し、仮説が検証できた。テストにより、タイプごとの習得状況が明らかになった他、学習者の産出、理解に差があることも分かった（第 5 章）。

学習者が産出した文をもとに誤用分析を行った結果、以下のような誤用が見られた（第 6 章）。

- i. 前項動詞あるいは後項動詞のみの意味で捉える
- ii. 同じ前項動詞あるいは後項動詞を含む他の複合動詞と混同する
- iii. 前項動詞、後項動詞の漢字のみを組み合わせる
- iv. その他（「取り巻く」、「仕付ける」など）

更に、日本語教育現場への応用を目指し、日本語教師 15 名を対象に複合動詞教育の現状調査を行った。教師の複合動詞観、複合動詞指導観および学習者の習得状況を踏まえ、日本語教育への提言を行った（第 7 章）。最後に、本研究の成果をまとめ、今回行った調査、考察について改善点および今後の課題を示した（第 8 章）。

目 次

第 1 章 序論	1
1.1 研究背景	1
1.2 研究課題と意義	4
1.3 研究方法	5
1.4 本論文の構成	6
第 2 章 先行研究および問題点	8
2.1 日本語の複合動詞に関する研究	8
2.1.1 結合条件および分類に関する研究	8
2.1.2 意味関係に関する研究	14
2.2 中国語の複合動詞に関する研究	20
2.2.1 中国語の語の複合について	20
2.2.2 中国語の複合動詞について	23
2.2.3 中国語の補語について	24
2.3 複合動詞の習得に関する研究	26
第 3 章 理論的枠組みと本研究の立場	30
3.1 本研究での理論的枠組み	30
3.2 予備調査	37
3.2.1 予備調査の概要	37
3.2.2 予備調査の結果および問題点	38
3.3 本研究における複合動詞の分類	43
第 4 章 日本語の複合動詞に対応する中国語の表現	47

4.1	比較の対象および方法	48
4.2	対応する表現の考察	48
4.2.1	構成要素に関する考察	49
4.2.2	意味関係に関する考察	55
第5章	学習者における複合動詞の習得状況	58
5.1	調査内容および手順	58
5.1.1	調査目的および枠組み	58
5.1.2	調査内容および手順	61
5.2	調査結果の分析と考察	66
5.2.1	文産出テストの結果と分析	68
5.2.2	翻訳テストの結果と分析	69
5.3	テスト終了後の質問紙の考察	73
5.3.1	複合動詞の使用について	73
5.3.2	複合動詞の学習の必要性について	77
5.3.3	テスト終了後の質問紙のまとめ	80
5.4	習得状況のまとめ	81
第6章	習得状況・対応表現に基づいた対照分析	83
6.1	習得状況・対応表現に基づいた分析と考察	83
6.2	まとめ	100
第7章	日本語教育現場への応用	102
7.1	日本語教師の意識調査	102
7.1.1	複合動詞の指導観	103
7.1.2	教師の複合動詞観	106

7.2 日本語教育への示唆	110
第8章 結論	113
8.1 まとめ	113
8.2 今後の課題	114
注	116
参考文献	118
付録 1	122
付録 2	125
付録 3	133
付録 4	134

第1章 序論

1.1 研究背景

多くの言語において、語彙の中で大きい比率を占めているのは動詞である。日本語でも基本文型と言われるものの中で、述語が動詞などからなる文（いわゆる動詞文）の比重は大きく、動詞はまた修飾語として、複文の従属句に用いられる場合も多い。語彙的にも文法的にも重要なカテゴリーの一つである。これら形の上ではそれ以上分解することができない単純動詞が多く用いられる。

ところが、日本語の動詞はすべてがこのような単純動詞ではない。次の例を見てみよう。

- (1) 当初は東北新幹線の北上から走り始め、横手か大曲まで走って1泊、翌朝から田沢湖経由で乳頭を目指す計画だった。だが、酷暑の昼下がりから乗り始めるのも気が重いので、前泊すべく一気に大曲まで新幹線で来てしまった。

(朝日新聞・ライフ 2011年9月22日)

- (2) 日中韓で独自に発展してきた「漢方薬」の規格統一を目指し、置き薬最大手の「広貫堂」（富山市）の主導で、まずは日韓が手を組もうとしている。「産官学」も巻き込み、両国で販売できる一般薬の開発に乗り出す。

(朝日新聞・ライフ 2011年9月29日)

(1)の「走り始める」、「乗り始める」や(2)の「巻き込む」、「乗り出す」は「走る」、「始める」、「乗る」、「巻く」、「込む」、「出す」といった単純動詞が二つ結合され、新しい動詞となっている。

日本語ではこのような「動詞+動詞」の組み合わせの複合動詞がかなり豊富であると言われている(森田 1978)。日本語教育においては、話し言葉中心の初級段階から書き言葉が多くなる中級以降へ進むにつれて、読解文、新聞、作文などで触れる複合動詞は多くなる。筆者の経験からも、複合動詞は習得が難しく、実際には適切に使うことができないこともあった。例えば、「名前を聞き忘れる」を「名前を一度聞いたが忘れてしまった」と理解してしまう学習者は多い。特に、作文や論文を書く場合には述べたい内容を十分に表現できず、「朝日に映し出される富士山」と表現したいところを「朝日に映される富士山」

としか表現できないこともあった。そこで、日本語学習者の語彙習得において複合動詞の習得に焦点を置き、複合動詞について研究しようという思いが芽生えてきた。

それでは複合動詞とは何か。まず複合動詞についての広辞苑での定義を見ておく。広辞苑では複合動詞を以下のように定義している。

二語の動詞の複合によってできた一語の動詞。「思い出す」、「歩き始める」の類

『広辞苑』（第六版）

日本語の語彙はどのように結合しているかという観点から分類すると大きく単純語と合成語に分けられる。新美他(1987)では複合動詞について次のように定義している。

合成語に属している複合語は最少二つの実質的形態素が結合して、新しい文法的機能と意味を持つ大きな単位を形成する時のまとまりのことである。その実質的形態素二つともが動詞であるか、あるいは後部形態素が動詞であって、形成された複合語自体が一つの動詞としての文法的性質を持つもの。

具体的に例を挙げて説明すると

(3) 動詞＋動詞

- a. 動詞（テ形）＋動詞：見て回る、疑ってかかる
- b. 動詞（連用形）＋動詞：読み始める、立ち働く

(4) 名詞＋動詞

巣立つ、目覚める、役立つ

(5) 擬態語／副詞、形容詞＋動詞

べとつく、ぶらつく、近寄る、若返る

日本語の複合動詞には以上のような「動詞＋動詞」、「名詞＋動詞」、「擬態語／副詞＋動詞」、「形容詞＋動詞」などの複合形態があるが、(3)のbのような「動詞の連用形＋動詞」の種類の複合形態が特に豊富であると言われている。複合動詞の総数を特定するのは極めて難しい。なぜなら「動詞（連用形）＋動詞」の組み合わせは生産性が高く、新たな複合動詞は活発に作られる可能性があるからである。

従って、本研究では、前項と後項ともに動詞の結びつきによってできた複合動詞で、「動

詞の連用形+動詞」のタイプの複合動詞を研究対象として取り上げることにする。

これらの複合動詞は単純動詞と比べてどのような特徴を持っているのか。

森田(1978)の調査によると、『例解国語辞典』に収録されている見出し語の 40,393 語のうち、動詞は 4,622 語(11.4%)で、更にその動詞の中で単純動詞は 2,083 語(45.07%)、「動詞+動詞」の複合動詞は 1,817 語(39.29%)であるという(サ変動詞「相對する」や名詞・形容詞語幹に伴うもの「青ざめる」、「秋めく」などを含むと 2,390 語(51.69%)を示している)。実際には、「～始める」、「～すぎる」のように複合動詞の後項として多く用いられ、生産性が高いものは、ほとんどの辞書には収録されていないため、複合動詞の数はそれよりもっと多いと考えられる。

動詞と動詞を組み合わせた複合動詞による表現は、具体的な動作や状態を表すことによって、動作そのものだけでなく手段、様態といった動作に関連する生き生きとした描写を可能にしている。例えば「逃げた」と「逃げ出した」などの複合動詞を使いこなせれば、場面に相応する表現ができることなど、複合動詞を身につけることによって、一層豊かな日本語の表現ができるようになる。姫野(1999)でも、「動詞+動詞」型の複合動詞には、日常よく使われる語を組み合わせることによって、単純動詞では表し得ないさまざまな用法や表現を作り出す効果があると指摘されている。

ところが、前述(例文(1)、(2))のように新聞でもよく出現する複合動詞は、前項動詞と後項動詞が何の制約もなく無制限な組み合わせではないものも数多く、日本語学習者にとって、誤用が多く、難しい学習項目の一つであると言われている。森田(1978)では「学習者が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞の殆んどは単純動詞である。学習者は個々の単純動詞の意味・用法には習熟するが、それらの動詞の組み合わせた複合動詞については学習の機会があまりない。従って、複合動詞に関する知識が不十分なまま上級段階にすすんでしまい、夥しい複合動詞の波にぶつかって困惑することになる。すなわち、個々の単純動詞が既習語であっても、それらが合成する意味が理解できるとは限らない。」(森田 1978 : 73)と述べ、複合動詞の習得の難しさを指摘している。実際に中上級レベルの中国人日本語学習者を対象に行った金(2011)の調査では、複合動詞の難易度について「複合動詞は難しい」と回答した学習者が全体の 80%を超えていることが明らかになった。また、自由記述では、「意味を推測する時は、その難しさを感じます」、「意味は前の動詞と後ろの動詞の意味を合わせて推測する」、「意味を覚えにくい」、「複合動詞をもっと勉強する必要がある」などの回答があった。

近年、日本語教育において語彙習得の視点から、学習者の複合動詞の習得を考察する研究がなされてきた。金(2011)の調査では、「～出す」、「～切る」などの後項動詞を持つ複合動詞が中上級レベルから学習者の教科書に提示され学習する機会があるのにもかかわらず、依然として複合動詞の誤用が多く現れ、習得が進んでいないことが立証された。

学習者である筆者の経験からも、同じ「動詞+動詞」の形の複合動詞でも習得しやすいものとそうでないものがある。例えば、前述の例文(1)と(2)の「乗り始める」と「乗り出す」を比べると「乗り始める」のほうが「乗り出す」より易しい。それぞれ同じ前項動詞「乗る」と結合した複合動詞であっても、「乗り始める」の方が比較的間違いが少なく、「乗り出す」の場合前項動詞と後項動詞の原義が保たれておらず、複合動詞全体の意味も理解しにくく間違いやすい。

なお、松田(2000)では、複合動詞を含む語彙習得においては、学習者の母語の影響が根強く残ると指摘されている。更に中国語と日本語の複合動詞は必ずしも一対一に対応しているわけではない。日本語学習者の複合動詞における誤用の原因を考える上でも、学習者の母語と日本語の対照分析を行い、両言語の相違点を示すことは重要なことであると思われる。また、日本語学習者に効果的な複合動詞の指導を行うためには、学習者の母語との比較対照は不可欠なものである。

1. 2 研究課題と意義

以上のことを踏まえ、本研究では、日本語教育の観点から学習者の習得¹状況および両言語の対応する表現に基づき考察を行うことにする。本研究の研究課題は次の通りである。

- ① これまでの複合動詞の分類と問題点、学習者における複合動詞習得の問題点を踏まえ、日本語教育の観点から複合動詞に関する新たな分類を提案する。
- ② 日本語の複合動詞に対応する中国語にはどのような表現が見られるのかを考察し、両言語の対応関係をまとめる。
- ③ 学習者の複合動詞の習得状況は具体的にどのようなものか。学習者にとって習得しにくい、習得困難な複合動詞はどのようなものなのかを明らかにする。
- ④ 両言語の対応表現と学習者の習得困難点を踏まえ、日中両言語の複合動詞にはどのような相違点が見られるかを考察する。
- ⑤ 最後に日本語教育において、複合動詞の習得をどのように支援していけば良いのかを

示す。

本研究では、日中両言語の複合動詞の対照分析を行い、最終的には、日本語教育において教授者、学習者の双方にとって複合動詞の指導、複合動詞の学習について役立つ情報を提供することを目指す。本研究は日本語と中国語における複合動詞の体系を具体的に掘り下げて整理するというよりもむしろ、日本語教育の立場から、両言語の対応関係と学習者の習得困難点に基づいて、日本語と中国語の複合動詞の相違点を明らかにして、日本語教育に役立てることを目標とする。

1. 3 研究方法

まず、課題①については、これまでの複合動詞の分類をまとめ、問題点を示す。学習者の複合動詞習得に関する問題点をも踏まえ、複合動詞の新しい分類を行う。そして、本研究の課題②日本語の複合動詞に対応する中国語にはどのような表現があるのかを考察し、両言語の対応関係を考察するために、村上春樹の小説『風の歌を聴け』を取り上げ、原作における複合動詞を取り出し、中国語訳版でそれに対応する中国語表現を抽出し、対応関係について考察を行う。

村上春樹の小説を選んだのは、短文単位の用例とは違い、ある複合動詞の複数の意味に対応する自然なコンテキストが確認できるのに加え、日本語学習者にとって極めてなじみのある作品であることが理由である。なお、村上春樹の小説は中国でも愛読者が多く、台湾語や中国語で続々と翻訳されている。それは学習者にとっても手に入りやすく、読む機会が高いと思われる。そこで本研究では村上春樹の小説を取り上げることにする。

本研究の課題③に関しては、複合動詞の前項動詞と後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から変化しているかどうか注目し、次のような仮説を立て、学習者の習得状況を調べる実態調査を通して仮説を検討する。

仮説: 複合動詞の前項と後項について各々の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得はそれに応じて難しくなる。

実態調査は、中国の大学で日本語を専攻している学習者 30 人に実際の運用能力を調べる文産出テスト、文脈における複合動詞の理解能力を調べる翻訳テスト、意識調査を実施

することにより、総合的に検証を行う。調査の内容および手順などは第 5 章で詳しく述べる。

課題④については、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現と学習者の習得困難点を踏まえ、日中両言語の複合動詞にはどのような相違点が見られるかを考察する。

最後に、課題⑤に関しては、学習者の習得状況および日本語教師 15 名を対象に実施した意識調査を踏まえ、日本語教育において、複合動詞の習得をどのように支援していけば良いのかについて提言を行う。

以上をまとめると研究の流れは図 1 の通りである。

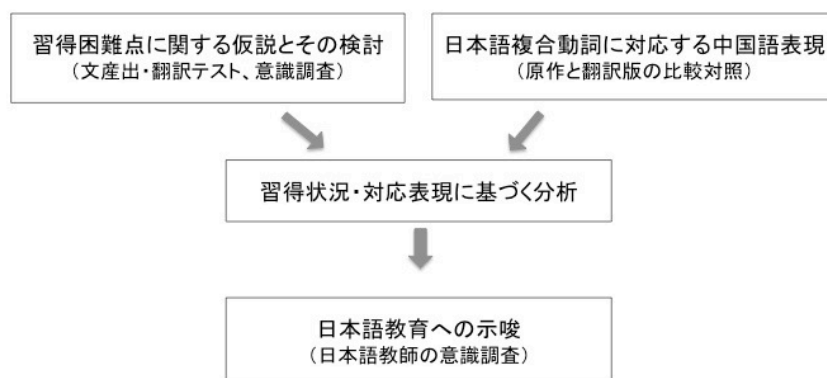


図 1. 本研究の流れ

1. 4 本論文の構成

本論文は第 1 章から第 8 章まで 8 つの章に分けて考察を展開する。

第 1 章では、まず研究の背景、研究課題、研究方法について述べる。

第 2 章では、日本語の複合動詞の結合条件や意味分類に関する先行研究、中国語の複合動詞に関する先行研究、日本語学習者の習得に関する先行研究を整理し、問題点を示す。

第 3 章では、森田(1994)、姫野(1999)の複合動詞の分類および予備調査の結果を踏まえて、日本語教育の観点から複合動詞の新しい分類を試みる。

第 4 章では、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現について構成要素の面と意味関係の面から考察を行う。分析対象として、村上春樹の小説『風の歌を聴け』とその中国語訳版(林少華訳)を取り上げ、取り出した複合動詞 336 語(異なり語数 242 語)に対応する中国語表現について考察を行う。

第 5 章では、「複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の

習得が更に難しい」という仮説を立て、上級レベルの学習者 30 名を対象に複合動詞に関する意識調査、文産出テスト、日中翻訳テスト、産出した文の意味確認作業を実施し仮説を検討する。また、学習者の産出した文、翻訳、産出した文の意味確認をもとに誤用分析を行うことにより、学習者にとって習得しにくい複合動詞はどのようなものなのか、具体的な習得状況はどのようなものかを明らかにする。

第 6 章では、習得状況・対応する表現に基づいた具体的な分析を行う。主に、学習者の産出した文をもとに個々の複合動詞について誤用分析をする。誤用分析の際、翻訳テスト、学習者が産出した文の意味確認、更に第 4 章で行った日本語複合動詞に対応する中国語表現の考察結果も取り入れ、総合的に分析する。

第 7 章では、日本語教師の意識調査の分析結果、および第 4 章、第 5 章、第 6 章の考察を踏まえ、日本語教育において学習者の複合動詞の習得をどのように支援していけばよいのかについて考察し、日本語教育への提言を行う。

第 8 章では、本研究の成果をまとめ、今回行った調査、考察について改善点および今後の課題を示す。

第2章 先行研究および問題点

2.1 日本語の複合動詞に関する研究

従来、日本語の複合動詞は様々な理論的枠組みにおいて分析がなされてきた。本節ではその中でも、結合条件および分類に関する研究と意味関係に関する先行研究を概観し、それらの問題点について述べる。

2.1.1 結合条件および分類に関する研究

ここでは、複合動詞に関する結合条件および分類に関する先行研究について、主に格支配の観点から分類した山本(1984)、統語的複合動詞と語彙的複合動詞の二つに大別した影山(1993)、前項動詞と後項動詞の結合可能性を「主語一致原則」を用いて論じた松本(1998)について検討する。

山本(1984)

山本(1984)は複合動詞を分析する際には、語レベルだけではその本質を把握することはできなく、文レベルから探求する必要があると指摘した。文レベルから分析する方法として「格支配」という概念を導入した。「格支配」とは、動詞の統語的機能に関わる動詞の名詞句との共起制限のことである。そして、ある動詞がどれだけの数の名詞句を格支配するかを「結合価」と呼んだ。支配されるのは格助詞を伴った名詞句であり、そのような名詞句を「格成分」と呼び、この名詞句の格はいわゆる「表層格」と称している。

ここで、山本(1984)の格成分について述べておく。「格成分」は義務的な格に限るとし、ガ格、ヲ格、カラ格、ニ格を認め、場所・手段・時のデ格や時のニ格あるいは移動の場所のヲ格などは除いている。ただし、動詞によってはそれらも義務的と認める場合もある。

例えば、

(6) 横浜デ暮ラス。(場所)

(7) 峠ヲ越エル。(移動の場所)

下記の例の場合は、

(8) 子供がテレビヲ見ル。

(9) 先生ガ生徒ニ歴史ヲ教エル。

(山本1984 : 34、例文番号は筆者による)

(8)の動詞「見ル」は格成分の「子供ガ」と「テレビヲ」を格支配するため、結合価が2であるという。また(9)の「教エル」は格成分「先生ガ」、「生徒ニ」、「歴史ヲ」という3項を支配するため結合価は3である。

山本の具体的な分析方法は、複合動詞を一種の「分子化合物」に捉え、いわゆる結合価(Valence)理論を応用し分析を行った。山本(1984)の研究では、本来各々固有の結合価を有している動詞が複数個結合したのが複合動詞であれば、その結合価はどのように変化しているのか、逆に複合動詞の結合価や格成分は、構成要素たる前項動詞および後項動詞とどのような関係にあるかという観点に立脚し、「動詞+動詞」型複合動詞を、その結合価や格成分が前項動詞および後項動詞の本来的な結合価や格成分とどう結びつき得るのかを分析した。

そして、格支配のあり方により、複合動詞を以下の4類型に分類した。

I類：複合動詞の格成分が、前項動詞と後項動詞のそれぞれに対応関係にあるもの。

(例：泣き叫ぶ、抱きかかえるなど)

II類：複合動詞の格成分が前項動詞とは対応を示すが、後項動詞とは対応しないもの。

(例：静まり返る、走り通すなど)

III類：複合動詞の格成分が後項動詞とは対応するが、前項動詞とは対応しないもの。

(例：打ち重なる、差し迫るなど)

IV類：複合動詞の格成分が前項動詞とも後項動詞とも対応しないもの。

(例：取り乱す、引き立つなど)

山本によるとI類の場合は、複合動詞の格成分²が、前項動詞と後項動詞のそれぞれと対応関係にあり、両項動詞が必ずしも同一の対応をみせなくてもいい。つまり、複合動詞文の格成分の範囲内で前項動詞と後項動詞のいずれもが適格文を作り出せることになる。実質的な分類そのものは寺村(1984)の分類(2.1.2で詳しく述べる)とほぼ変わらないが、その判断が格支配でテストを行った点で異なる。なお、寺村の言う「付属」語化あるいは従来からよく言われてきた動詞の接頭・接尾辞化という現象について、山本は格支配能力の欠落であると指摘している。寺村が「意味的な観点」から分類したのに対して、山本は「前項動詞と後項動詞の格支配がどのような形で関わり合っているのか」という「統語的な観点」から分類されたものである。

しかし、この格支配観点からの分類によっても処理できない複合動詞の例が未だいくつかあると山本自身も認めている。例えば、I類においてガ格やヲ格が両項動詞に同時に対応する場合、その名詞句は同一のものであることが原則だが、下記の例は対応できない。

(10)a. 男が（一晩中）飲ミ明カス。

b. 男ガ（酒ヲ）飲ム。

c. 男ガ（夜ヲ）明カス。

(11)d. 男がウイスキー／北海道ノ夜ヲ飲ミ明カス。

（山本1984：47、例文番号は筆者による）

多くの国語辞書が「飲ミ明カス」は自動詞としているように、この二つヲ格は相殺されるとみることもできるが、山本(1984)では(11)のようにヲ格を言い表わすことも可能であると指摘している。

影山（1993）

ここでは、日本語の複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞二つに大別した影山(1993)の研究について述べる。影山(1993)はまず、前項動詞と後項動詞の間に補文関係が成立するか否かに注目し、語彙的複合動詞は語彙部門において形成される複合動詞であり、統語的複合動詞は統語部門において形成される統語的複合動詞であるとして、複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分類している。まず、下記A類、B類の複合動詞を見てみよう。

A類：

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放す、飛び込む、話しかける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒らす、褒め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ

B類：

払い終える、話し終わる、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見慣れる、登り切る、やりつける

以上のように、A類とB類はともに複合動詞を構成し、両者は形態的に区別することはできない。影山(1993)では、このような複合動詞について形態を離れて、意味や生産性、

あるいはさまざまな統語的な側面にまで考察を広げると両者は差異が明瞭であると指摘している。

まず、複合動詞を構成するV1とV2の意味関係に目を向けると、A類では「押し開ける」動作の様態・手段、「飲み歩く」付帯状況、「泣き叫ぶ」並行動作、「泣き止む」アスペクトなど多様な意味関係が見られ、多くの場合、様々な程度に意味の不透明化や語彙化が進んでいるという。例えば、「飲み歩く」は慣習的に酒類に限定されていて、水やジュースなどを飲み歩くというのは普通ではないが、他方、B類の複合動詞にはそのような意味の慣習化は見られない。例えば、「飲み始める」において飲む対象は酒類に限らずどのような液体でもいい点であるという。

また、両グループの意味的透明性の違いは概ね生産性の違いであると指摘している。A類の複合動詞の生産性はV2に大きく依存し、「掻きむしる、*こすりむしる、*ちぎりむしる」のようにV1の可能性がごく少数の動詞に限定されるものから「買い取る、吸い取る、ぬぐい取る」のようにかなり多数のV1と結合するものまで、様々な度合いが見られる。他方、B類のほうは、ちょうど文や句が自由に作られるように、語彙的な制限を受けずに形成され、生産性が高いとしている。

従って、A類複合動詞は典型的な「語」の特徴（意味の慣習化と語彙的な結合制限）を備えているから、語彙部門で派生され、そのほとんどが辞書に登録されるのに対し、B類の複合動詞は意味の透明性と生産性において、典型的な語よりむしろ普通の文や句に近い性質を備えているという。統語的側面では、B類の複合動詞は例えば、「歌手がアリアを歌い終える」→「歌手が（自分が）アリアを歌うことを終える」という統語的な補文構造形式から由来すると想定している。

影山(1993)はA類とB類は派生する部門が異なるため文法的振る舞いも異なるとし、以下のような判別テストで分けている。

①代用形「そうする」:

A類：遊び暮らす→*そうし暮らす、押し開ける→*そうし開ける

B類：調べ終える→そうし終える、秘密をしゃべりまくる→そうしまくる

これは「そうし」を前項動詞の代用として組み込むテストである。影山が提案した「語（複合語を含む）の一部だけが文中の照応に参加することができない」という「語彙照応の制約」を当てはめ、A類は語彙部門で形成され、複合動詞全体が一つの動詞としてD構造³で挿入されるため、照応関係が成立する統語構造において内部は見通せないという。

他方、B類複合動詞はその内部に照応表現を含むことができ、前項だけを「そうし」と入れ替えることができるとする

②主語尊敬語「お～になる」:

A類: ノートに書き込む→*お書きになりこむ、手紙を受け取る→*お受けになり取る

B類: 歌い始める→お歌いになり始める、しゃべり続ける→おしゃべりになり続ける

上のテストでA類が主語尊敬語「お～になる」に成り立たないことは、語というまとまりの内部を「お～になる」で分断できない語の形態的緊密性によるもの、B類の場合は前項動詞にのみ尊敬表現を付加することが可能であると指摘している。

③受身形:

A類: *書かれ込む、*押され開く

B類: 名前が呼ばれ始めた、愛され続ける、殺されかけた

受身は、統語構造で形成されるため、語彙的な合成語内部には現れないとしている。B類では補文⁴において前項動詞に受身が適用し、その後に受身形動詞が編入することができるとしている。

④サ変動詞:

A類: 貼り付ける→*接着し付ける、跳び越す→*ジャンプし越す

B類: 見続ける→見物し続ける、弱りきる→衰弱しきる

サ変動詞はD構造では例えば「雑談をする」のような句を構成し、そこから「雑談」を「する」に編入することによって派生されるとし、もともと句であるからA類複合動詞の内部には生じないという。

⑤重複形:

A類: *行方不明の子供を探しに探し歩いた。

B類: 大臣はそれをひた隠しに隠し続けた。

前項動詞を重複構文「～に～」にする。重複規則は統語部門で作用するため、語彙的複合語には組み込めないということである。

影山(1993)では以上の5つのテストの他、語彙的と統語的を区別するときの注意点として、例えば、「押し込む」、「流し込む」の「込む」は本来自動詞であるが、複合動詞全体では他動詞となり、本来の意味を失っている。だが、上述のテストによれば語彙的複合動詞になり、形態的自立性(本来の意味を保持)と語彙的・統語的の区別は必ずしも対応しないという例外⁵もあることを認めている。

そして、影山(1993)では、日本語の動詞を他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の三つに分類し、次のように複合動詞のV1とV2の結合には「他動性調和の原則」が働いていると主張している。影山(1993)では以下のように述べられている。

- (12) a. 他動詞 : (x <y>)
- b. 非能格自動詞 : (x <>)
- c. 非対格自動詞 : <y>

V-V 型の複合動詞においては、この項構造が決定的な意義を持っている(中略)他動詞(12a)と非能格自動詞(12b)の項構造は同じタイプと見なすことができるから、他動詞+他動詞、非能格自動詞+非能格自動詞だけでなく、他動詞と非能格自動詞が混在した複合動詞も可能である。他方、非対格自動詞の項構造(12c)はこれら二者とは形式が異なるから、基本的に非対格自動詞は非対格自動詞としか結合しない。これを他動性調和の原則と呼んでおこう。

(影山 1993 : 117、例文番号は筆者による、影山の(75)に相当する)

影山(1993)では、複合動詞は外項を取る動詞(他動詞と非能格動詞)同士か、外項を取らない動詞(非対格動詞)同士によって作られる他動性調和の原則を主張した。例えば、他動詞の「落とす」は「打ち落とす」、「泣き落とす」のように他動詞、非能格動詞とは複合動詞を作れるが、「*こぼれ落とす」のような非対格動詞とは複合動詞を作れないということである。

松本 (1998)

松本(1998)は影山(1993)の非対格動詞と非能格動詞の認定方法の妥当性を検討し、他動性調和の原則の真の反例として(松本 1998 : 50)、次のような例を挙げている。

(a) 非能格+非対格

歩き疲れる、遊び疲れる、泳ぎ疲れる、立ち疲れる、座り疲れる、しゃべり疲れる、鳴きくたびれる、走りくたびれる、泣きぬれる、泣き沈む

(b) 他動詞+非対格

読み疲れる、待ちくたびれる、飲みつぶれる、食いつぶれる、聞きほれる、見ほれる

(松本 1998 : 49、例文番号は筆者による、松本の(15b)、(15c)に相当する)

松本(1998)は他動性調和の原則で説明できない例外を主語一致の原則によって解釈できるとし、日本語の語彙的複合動詞の組み合わせを主語一致の原則と語彙の意味構造に関する条件から説明している。松本(1998)によると、主語一致の原則とは二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者（通例⁶、主語として実現する意味的項）同士が同一物を指さなければならないという原則である。意味構造においても主語として実現する項を認定することができるということである。「主語」一致の原則に関して一つ注意すべきことは、この原則は、直接の複合によって作られると考えられる複合動詞のみに当てはまるデフォルト原則であると指摘している。

直接の複合によって生成され、この原則の例外となるものは次に例文で挙げる3つの複合動詞である。

(13)a. 彼女の頬は泣きぬれていた。

b. 彼の髪は寝乱れていた。

c. 彼の家は寝静まっていた。

（松本1998：74、例文番号は筆者による、松本の(52)に相当する）

しかし、これらにおいても、前項の主語と後項の主語との間に空間的な近接性がなければならないとしている。例えば、「寝静まる」において「静まる」の主語は「寝る」の主語の指示物が存在する空間等を指さなければならない。この意味で「一致」を同一性のみならず近接性も含め理解できれば、これらは主語一致の原則の例外ではなくなる。このような「一致」の概念は意味的なものであり、意味構造における同一性の扱いを支持するものと言える⁷と指摘している。

このように、日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせは、意味構造において述べられる主語一致の原則というデフォルト原則と、動詞の意味構造に課せられる意味的諸条件により制約されていると論じている。

2. 1. 2 意味関係に関する研究

複合動詞の意味関係に関する研究は主に複合動詞後項の意味的側面に関する研究が主流であった。ここでは、主に寺村(1984)、森田(1994)、由本(2005)、姫野(1999)についてまとめる。

寺村（1984）

複合動詞は一般的に前項動詞と後項動詞と意味や機能の関係から幾つかに分類されて

きた。複合動詞の分類の仕方には諸説がある。その中で、寺村(1984)では、「動詞連用形 + 動詞」という複合形態素つまり複合動詞をそれを構成する前項、後項の独立性、前項と後項の意味に着目し、それぞれが単独で使われる時の意味、文法的特徴が複合体の中でも保持されているものを V、単独の場合とは全く、或いはかなり違っているものを v として次のような四つのタイプに分類している。

(イ) 自立語 V + 自立語 V : 例 : 呼び入れる、握りつぶす、殴り殺す

(ロ) 自立語 V + 付属語 v : 例 : 降り始める、呼びかける、思い切る

(ハ) 付属語 v + 自立語 V : 例 : 差し出す、振り向く、引き返す

(ニ) 付属語 v + 付属語 v : 例 : (話を) 切り上げる、(仲を) 取り持つ、払い下げる

このうち、(ニ)のタイプのもは、全体で一つの意味を表すもの、つまり一語化したもので、(イ)と(ロ)の2つのタイプの間にははっきり線を引くことは難しいと指摘している。両項 (V1、V2) のうちで、どちらが主でどちらが従、もしくは補助形式的であるかがかなり直観にたよるところがあると指摘している。

自立語 V というのは、複合動詞になっても元の意味が保持されているものを指し、付属語 v というのは保持されていないものを指している。4種類のうち、(イ)と(ロ)は様々な語と組み合わせが可能で、多くの複合動詞を生産することができるのに対し、(ハ)と(ニ)は限られた動詞に限定されるため、生産性が低いとされている。

寺村(1984)の構成要素である前項動詞、後項動詞の本来の意味が複合動詞の中で保持されているかどうかのこの分類方法は評価できるが、すべての複合動詞をこれら4つにはっきり分類するのは難しいと思われる。例えば、(ロ)の「降り始める」で「雨が降り始める」の場合、後項動詞「始める」の「～することを始める」の統語形式であるが、単純動詞「始める」が「開始」の意味を保っているため、「降り始める」を「自立語 V + 付属語 v」に分類するより、「自立語 V + 自立語 V」に分類したほうが妥当であると思われる。

森田 (1994)

森田(1994)では、語義結合の度合いから複合動詞を次の5つの段階に区分している。

第1段階：並列関係

二つの動詞が結び付いて生ずる意味関係として最も単純なものは、両動詞が対等の関係で並列する「……して……する」形式である。

(言い聞かせる、書き示すなど)

第2段階：主述、補足の関係

上下の動詞がそれぞれ独立した意味を持ち、それが並列関係でなく、一步進んで「主語—述語」の「が」格の関係を構成することがある。他動詞が下接すれば「を」格の補足関係「…を…する」の意となる。

(思い余る←思うことが余る、書き誤る←書くことを誤るなど)

第3段階：具体的意味から抽象的意味へ

主述関係や補足関係を取る複合動詞の中で、複合する一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられる。接辞化への第一歩といえりとされる。

(書き上げる、やりかけるなど)

第4段階：造語成分への移行

下接部分が、それ自体独立した動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質的意味をまだ残している場合がある。動詞的造語成分と考えられる。

(考えあぐねる、言いそびれるなど)

第5段階：実質的意味から形式的意味へ

抽象化が更に進めば、実質的意味を失い、形式化されてしまう。

(倒れた墓石を引き起こす←第1段階の並列関係、
戦争をひき起こす←第5段階の抽象化)

森田(1994)の分類によると、ある語が他の語と連結することによって新たな意味が加わったり、原義から著しく意味が遠くなる(例えば、「墓石を引き起こす【第1段階】」→「戦争をひき起こす【第5段階】」)場合などがあり、そして、そのような複合動詞は語彙的に複合前の二つの単純動詞から複合動詞の意味を推測しにくくなるので、学習者にとってはそのような複合動詞の習得は大きな問題になると思われる。

由本(2005)

由本(2005)では、影山(1993)が語彙的複合動詞の構成要素の組み合わせ規則を項構造レベルで捉えているのに対して、語彙的複合動詞における動詞の組み合わせの制限は、二つの動詞の語彙概念構造 LCS のレベルで捉えるべきであるとしている。そして、語彙概念構造レベルで語彙的複合動詞を5つのタイプに分けている。それぞれ次の並列関係、付帯状況・様態、手段関係、因果関係、補文関係である。LCS は語彙概念構造の略であり、AND、WHILE、BY、FROM は語彙概念構造を結びつける意味述語である。

(a)並列関係（前項と後項は内容的に対等な二つの要素である）

泣き叫ぶ、恋い慕う、忌み嫌うなど

[[LCS 1] AND [LCS 2]]

並列関係の場合、変項の同定が二つの LCS 内で同じ意味役割を持つものの間でのみ可能であり、また、最終的に単純な事象構造に再分析されるため、変項はすべて同定されなければならない、同じ関数で表される LCS をもつ動詞、更にはアスペクト素性も同一である類義語の合成以外は容認されにくいとしている。

(b)付帯状況・様態（前項が後項の付帯状況を表す）

持ち寄る、遊び暮らす、すすり泣くなど

[[LCS 2] WHILE [LCS 1]]

この場合は、前項動詞は継続相として解釈できるものに限られると指摘している。また、変項の同定は二つの LCS 内で同じ意味役割を持つものの間でのみ可能だが、同定されずに残された前項動詞の項が複合語の項として受け継がれることもあり得るが、それぞれの第一項（主語）は必ず同定されるとしている。

(c)手段（前項が後項の手段を表す）

切り倒す、吸い取る、言い負かすなど

[[LCS 2] BY [LCS 1]]

手段関係の場合は、意図的行為を表す動詞（CONTROL 関数で表される LCS を持つもの）の組み合わせに限られ、それぞれの第一項（動作主）が必ず同定され、また他の項についても、異なる意味役割を持つもの同士でも、使役の連鎖が成立しやすいように、同定される必要があるとしている。

(d)因果関係（前項が後項の原因を表す）

泣きぬれる、溺れ死ぬ、流れ着くなど

[[LCS 2] FROM [LCS 1]]

因果関係の場合は、後項動詞は非意図的事象を表す非対格動詞に限られるとし、それぞれの第一項は意味役割の違いに関わらず同定されるとしている。

(e)補文関係（後項が前項に対し、補足的な説明の役割を果たす）

響き渡る、見逃す、書き落とすなど

[LCS 2… [LCS 1] …]

補文関係の場合は、後項動詞は事象（Event）を項としてとる他動詞または非対格自動

詞に限られるという。なお、項の同定は後項動詞の項として前項動詞の LCS をまるごと埋め込むことで自動的に起こるとしている。

なお、由本(2005)では、基本的には語彙的複合動詞の構成要素の組み合わせは上記の a~e の概念意味論的制約に基づいて行われるが、これと「主語の義務的同定」⁸や、「Burzio の一般化に従った格素性の浸透」⁹といった形態統語的制約とが関係しているとも主張している。

ところが、由本の分類では「勝ち誇る」、「辿り着く」など手段関係であるかそれとも因果関係であるかがはっきり分かれていないものもある。つまり、構成要素間の関連性を表す「手段」、「原因」といった枠組みにきれいに分類するのは難しいと思われる。

姫野 (1999)

更に、姫野(1999)では影山(1993)と同様に複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二類に分けて分類し、前項・後項動詞の意味構成の観点から複合動詞の分類の試案を提起した。

姫野 (1999)の分類をまとめると、語彙的複合動詞のほとんど(補文関係、比喩関係以外)は二つの動詞を使ってそのまま「て形」などほかの表現に言い換えられるが、統語的複合動詞はすべて「て形」への言い換えが不可能であるということができると指摘している。

まず、語彙的複合動詞の分類方法として、以下のような試案を提示している。

①二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる

(a)並列関係：「～して～する」、「～したり～する」、「～して、その結果すなわち～することになる」

継起：「流れ着く」→流れて（流れてから）着く

手段・原因：「縫いつける」→縫って（縫うことにより）つける

「焼け死ぬ」→焼けて（焼けることにより）死ぬ

付帯状況：「遊び暮らす」→遊んで（遊びながら）暮らす

並起：「泣き叫ぶ」→泣いたり叫んだりする

類似：「書き記す」→書いてその結果、すなわち記す（ことになる）

(b)比喩的關係：「～するようにして、～する」

「書き殴る」→まるで殴るように乱暴に書く

「盗み見る」→他人の視線を盗むようにしてこっそり見る

(c)主述、補足の関係：「することが～する」、「することを～する」

主述：「あり余る」→あることが余る

「飲み足りる」→飲むことが足りる（＝十分だ）

補足：「出し惜しむ」→出すことを惜しむ

「鳴き交わす」→鳴くことを交わす

②後項動詞を他の言い方にしなければならない

「投げ込む」→投げて、中に入れる

「投げつける」→投げて、対象物に強く当てる

「震え上がる」→すっかり震える

③前項動詞を他の言い方にしなければならない

「打ち切る」→継続状況を途中で切る（＝終了する）

「引き継ぐ」→あとを続いて継ぐ

「さしつける」→押してつける（ママ）

④二つの動詞とも他の言い方にしなければならない

「落ち着く」、「取り成す」、「躰る（しつける）」

(姫野 1999 : 21)

統語的複合動詞においては、姫野(1999)は影山(1993)が挙げた統語的複合動詞に 3 語を加え、以下 30 語を挙げている（下線は筆者）。

始動：～かける、～だす、～始める、～かかる

継続：～まくる、～続ける

完了：～終わる、～終る、～尽くす、～きる、～通す、～抜く、～果てる

未遂：～そこなう、～損じる、～そびれる、～かねる、～遅れる、～忘れる、～残す、
～誤る、～あぐねる、～損ねる

過剰行為：～過ぎる

再試行：～直す

習慣：～つける、～慣れる、～飽きる

相互行為：～合う

可能：～得る

始動の「～かかる」、未遂の「～損ねる」、完了の「～果てる」3つをそれぞれ、影山(1993)の二類の複合動詞の判別テストの①代用形「そう」との置き換え、②サ変動詞の使用を用

いて統語的複合動詞に加えている。

	①代用形	②サ変動詞
始動：～かかる	彼はそうしかかった	落下しかかった
未遂：～損ねる	彼もそうし損ねた	獲得し損ねた
完了：～果てる	彼もそうなり果てた（ママ）	退屈し果てた

(姫野 1999 : 19)

姫野(1999)では、単独で使われる場合の意味（本義）がどのような形で複合動詞の中に生かされているのかという面から考察を行った。単純動詞を既に習得した学習者の場合、動詞単独で扱われる場合の意味と複合動詞の意味とを関連づけて考察を行い、学習者の複合動詞習得に関しては評価できる分類方法と言えよう。しかし、姫野では単独で使われる場合の意味が複合動詞の中でどのような形で生かされているかは考察しているが、単純動詞がどのように変化しているか、変化の度合い、変化の中身については考察に及ばなかった。従って本研究は、姫野の基本的な立場「単独で使われる場合の意味の変化」と同様の立場に立ちつつも、単純動詞の意味が複合動詞の中での変化する度合いに注目し、新たな複合動詞の分類を行うことにする。

2. 2 中国語の複合動詞に関する研究

2. 2. 1 中国語の語の複合について

中国語の語の複合について朱(1999)では、二つ或いは二つ以上の語根成分から合成語になる形式のことであると指摘している。また、そのような複合形式で構成された合成語を複合語としている。なお、中国語の複合語において、構成成分の間の結合関係は一般的に構文結合関係¹⁰と一致すると指摘している。

中国語の構文結合関係には主謂(zhu wei)、述賓(shu bin)、述補(shu bu)、偏正(pian zheng)、聯合(lian he)などがある。「主謂関係」とはいわゆる「主述関係」のことであり、「述賓関係」での「賓」は「賓語」のことであり、「賓語」は日本語文法において目的語に相当し、全体で「述語+目的語」の関係を表す。

そして、「述補関係」における「補」は中国語文法における「補語」を指し、「述語+補語」の関係を表す（「補語」に関しては2. 2. 2で詳しく述べる）。なお、「偏正関係」とはいわゆる「修飾・被修飾関係」のことであり、「聯合関係」は「並列関係」のことである。

朱(1999)では、中国語のほとんどの複合語は、このような構文結合関係と同じ結合関係で結合していると指摘し、中国語の複合語を以下の五つに分類している。次に具体例を挙げながら説明する。

a. 「主謂式複合詞」

名詞：冬至 (dong zhi) 霜降 (shuang jiang)

動詞：地震 (di zhen) 心痛 (xin tong) 耳鳴 (er ming) 例如 (li ru)

形容詞：面熟 (mian shu) 年輕 (nian qing) 胆怯 (dan qie)

この類の複合語（中国語では「複合詞」）は「主語＋述語」関係で結合され、結合後の複合語の品詞から見ると、それぞれ名詞になるもの、動詞になる、形容詞になるものに分けられる。例えば、「冬至 dong zhi」の場合「冬が至る」で解釈でき、「主語＋述語」関係で複合される。なお、複合語全体が名詞となる。

同じく「地震 di zhen」の場合、「地（面）が震える」という「主語＋述語」関係で複合され、「日本又地震了。（日本でまた地震が発生した）」のように複合語全体が動詞となる。形容詞となる場合も同様で、例えば、「面（面識）が熟する」と解釈でき、「主語＋述語」の関係で結合され、「顔見知りである」という意味で形容詞となる。他の例も同様である。

b. 「述賓式複合詞」

名詞：主席 (zhu xi) 將軍 (jiang jun) 防風 (fang feng)

動詞：列席 (lie xi) 動員 (dong yuan) 出版 (chu ban) 告別 (gao bie)

形容詞：滿意 (man yi) 衛生 (wei sheng) 無聊 (wu liao)

副詞：到底 (dao di) 照旧 (zhao jiu)

この類の複合語は「述語＋目的語」関係で結合されたもので、結合後の品詞から見ると、それぞれ名詞になるもの、動詞になるもの、形容詞になるもの、副詞になるものに分けられる。例えば、「主席 zhu xi」は「席を主とする」という「述語＋目的語」関係で結合され、結合後名詞になる。

「列席 lie xi」の場合は、「席に連なる」ということで「述語＋目的語」関係で複合され、例えば、「顧問可以列席專門委員会會議、發表意見。（顧問は專門委員会會議に列席し、意見を出せる）」のように、複合後全体で動詞になる。複合後形容詞になる「滿意 man yi」、副詞になる「到底 dao di」も同様である。

c. 「偏正式複合詞」

名詞：飛機 (fei ji) 優點 (you dian) 蛋白 (dan bai)

動詞：重視 (zhong shi) 熱愛 (re ai) 回憶 (hui yi)

形容詞：自私 (zi si) 冰涼 (bing liang)

副詞：至少 (zhi shao) 未免 (wei mian)

連詞：不但 (bu dan)

この類の複合語は「修飾・被修飾」関係で結合されたもので、結合後の品詞からみると、それぞれ名詞になるもの、動詞になるもの、形容詞になるもの、副詞になるもの、連詞になるものに分けられる。中国語文法での「連詞」とは、接続詞のことである。

d. 「述補式複合詞」

動詞：革新 (gai ge) 改良 (gai liang) 証明 (zheng ming) 拡大 (kuo da)

この類の複合語は「述語＋補語」関係で結合されたもので、例えば、「革新 gai ge」の場合は「改革して新しくする」と解釈でき、「改良 gai liang」の場合は「(悪いところを) 改めて良くする」と解釈でき、両方とも修飾・被修飾関係で結合され、動詞になる。

e. 「聯合式複合詞」

名詞：音楽 (yin yue) 道路 (dao lu) 売買 (mai mai) 法律 (fa lv)

動詞：調査 (diao cha) 安慰 (an wei) 重畳 (chong die) 可能 (ke neng)

形容詞：奇怪 (qi guai) 透徹 (tou che) 光明 (guang ming) 特殊 (te shu)

副詞：千万 (qian wan)

介詞：自從 (zi cong)

連詞：而且 (er qie) 并且 (bing qie) 因為 (yin wei)

この類の複合語は並列関係で複合されたもので、例えば、「音楽 yin yue」のように複合後名詞になるもの、「調査 diao cha」のように複合後動詞になるもの、「奇怪 qi guai」のように複合後形容詞になるものがある。

また、「千万 qian wan」のように複合後副詞になるもの、「自從 zi cong」のように介詞になるものもある。「千万 qian wan」は「千」と「万」が並び、「絶対に」の意味を表す。中国語文法における介詞というのは、前置詞とよく似た機能をし、基本的に動詞の前に置かれ、主語と動詞の間に何か介する（導く）役割を果たしている。

例えば、

在 (介詞) + 家 (目的語) + 吃午飯 (被修飾語)

zai jia chi wu fan

介詞 家 昼ごはんを食べる

(家で昼ごはんを食べる。)

介詞は、「在」のように動詞の場所・方向・時間・対象・目的などの意味を表す虚詞（文法的機能語）である。その他、「而且 er qie」、「并且 bing qie」のような複合後連詞（接続詞）になるものもある。

以上、中国語の語の複合について主に朱(1999)を引用し説明した。

2. 2. 2 中国語の複合動詞について

次に、中国語の複合動詞の分類に関する先行研究を見てみよう。中国語の複合動詞に関する先行研究はそれほど多くなく、ここでは主に湯(1989)による五つの分類を紹介する。

a. 「述賓式複合動詞」

充電 chong dian、動員 dong yuan

述賓式複合動詞は述語＋賓語の組み合わせでできた複合動詞のことであり、中国語文法での賓語とは目的語のことである。従って、aの「充電 chong dian」は「電（気）を補充する」ことで「充電する」意味である。なお、「動員 dong yuan」は「（人）員を集める」ことで「動員する」意味である。

b. 「述補式複合動詞」

打破 da po、改良 gai liang

述補式複合動詞は述語＋補語の組み合わせのことで、例えば、「打破 da po」の「打 da」は打つ、叩くという意味を表す動詞であり、の「改 gai」改める、直すという意味を表す動詞である。後ろに来る「破 po→破る」が加わり「打って破る、打ち破る」の意味を表す。「改良 gai liang」も同様で、「良 liang→良い」が後ろに来て「良くする、改良する」の意味を表す。

c. 「偏正式複合動詞」

遲到 chi dao、熱愛 re ai

偏正式複合動詞は偏正関係の複合動詞で、偏正関係は修飾・被修飾関係のことである。「遲到 chi dao」、「熱愛 re ai」それぞれ「遅刻する」、「熱愛する」の意味を表す。

d. 「並列式複合動詞」

發展 fa zhan、改變 gai bian

dの「發展 fa zhan（発展する/発展させる）」、「改變 gai bian（変える/変わる）」のように、並列関係の複合動詞のことである。

e. 「主謂式複合動詞」

面熟 mian shu、头疼 tou teng

主謂式複合動詞は「主語＋謂語」関係の複合動詞であり、ここで「謂語」は述語のことであり、いわゆる主述関係を指す。「面熟 mian shu」の場合は「顔をよく知っている、顔に見覚えがある」という意味で、「头疼 tou teng」は「頭が痛い」の意味である。

2. 2. 3 中国語の補語について

中国語の補語に関する研究は従来から行われてきたものの、補語の内容の面からも、その体系の面からもまだ分かり難い点は多い。補語に対する名称の不統一や補語の内部構造の多様性など、補語全体は体系的に整理がなされていないような状態である。

ここでは主に朱(1999)を取り上げ中国語文法における補語について述べる。

朱(1999)では、述補構造の前の成分を述語と呼び、後ろの成分を補語と呼ぶとされている。また、補語と目的語は両者とも動詞の後ろに来るが、目的語は体詞性成分(名詞性を持つもの)でもいいし、謂詞性成分(述語性をもつもの)でもいいが、補語の場合はその成分が謂詞性成分に限られ、体詞性成分ではないと指摘している。なお、役割の面においては、目的語は動作と関連する事物(受け手、関与するもの、道具など)を指し示す場合に用い、補語の場合は動作の結果あるいは状態を説明するのに用いるとしている。

朱(1999)は更に「述補構造」という一章において、中国語の述補構造をまず「粘合式述補構造」と「組合式述補構造」に分類した。

粘合式述補構造とは補語が直接述語の後ろについてくる構造である。例えば、抓緊(zhua jin 固く握る)、写完(xie wan 書き終わる)、煮熟(zhu shu 煮上がる)、說清楚(shuo qing chu はっきり言う)、写上(xie shang 書き示す)、走回去(zhou huo qu 歩いて戻る)

それに対して、組合式述補構造とは中国語の「得」を用いる述補構造である。例えば、走得快(zou de kuai 歩くのが早い)、抓得緊(zhua de jin 掴むのがしっかりしている)、看得多(kan de duo 見るのが多い)、写得很清楚(xie de hen qing chu 書いたのがとてもはっきりしている)、看得见(kan de jian 見える)

朱(1999)では、粘合式述補構造を更に形容詞あるいは動詞が補語になる結果補語と方向動詞が補語となる趨向補語に分けた。

1. 結果補語

結果補語でできた述補構造は一種の粘合式述補構造であり、結果補語は形容詞でもいいし、動詞でもいい。例えば、

動詞+形容詞：長大 (zhāng dà 大きくなる、成長する) 変小 (biàn xiǎo 小さくなる) 染紅 (rǎn hóng 赤く染まる) 切碎 (qiē suì 細かく切る) 晒干 (shài gān 乾かす) 走遠 (zǒu yuǎn 遠くまで歩く) 拉長 (lā cháng 長く伸ばす) 煮熟 (zhǔ shú 煮上がる) 說清楚 (shuō qīng chū はっきり言う)

動詞+動詞：看見 (kàn jiàn 見える) 听懂 (tīng dǒng 聞いて分かる) 学会 (xué huì 学び取る) 踢倒 (tī dǎo 蹴って倒す) 拿走 (nǎ zǒu 持っていく) 写成 (xiě chéng 書き上げる) 殺死 (shā sǐ 殺す) 打破 (dǎ pò 打って破る) 說完 (shuō wán 話し終わる)

なお、結果補語として使われる動詞の数は多くなく、「走 zǒu、跑 pǎo、動 dòng、倒 dǎo、翻 fān、病 bìng、死 sǐ、見 jiàn、懂 dǒng、成 chéng、完 wán、通 tōng、穿 chuān、透 tòu」などがよく使われる。

2. 趨向補語

趨向動詞「来 lái、去 qù、進 jìn、出 chū、上 shàng、下 xià、回 huí、過 guò、起 qǐ、开 kāi」と組み合わせで用いられる補語を趨向補語と呼ぶ。例えば、走進 zǒu jìn、跳出 tiào chū、爬上 pá shàng、滑下 huá xià、拿来 ná lái、送去 sòng qù、寄回 jì huí、飛過 fēi guò、撑起 chéng qǐ、打开 dǎ kāi など、主に移動や方向を表すものが多い。なお、前に来る動詞は手段か原因、様態を表す。

朱(1999)では、組合式述補構造を更に結果補語あるいは趨向補語に「得」または「不」が挿入された可能補語、状態補語、程度補語に分けている。

3. 可能補語

この種の述補構造は可能性を表す。例えば、

肯定形式

看得見 (kàn de jiàn)

写得完 (xiě de wán)

說得清楚 (shuō de qīng chū)

進得去 (jìn de qù)

拿得出来 (ná de chū lái)

否定形式

看不见 (kàn bu jiàn)

写不完 (xiě bu wán)

說不清楚 (shuō bu qīng chū)

進不去 (jìn bu qù)

拿不出来 (ná bu chū lái)

「看得见 kan de jian」は見えるの意味を表し、「写得完 xie de wan」は書き終われるの意味を表し、「说得清楚 shuo de qing chu」ははっきり言えると可能の意味を表す。「進得去 jin de qu」も同様で、中に入れるの意味を表し、「拿出来 na de chu lai」は持つて出れるという可能の意味を表す。

4. 状態（様態）補語

この種の補語は状態を表す。例えば、写得好（xie de hao 書いたのが良い） 跑得快（pao de kuai 走るのが早い） 洗得干净（xi de gan jing 洗ったのが清潔である） 看得清清楚楚（kan de qing qing chu chu 見えるのがはっきりしている）

このような状態を表す述補構造は他の言い方に拡大することができる。

例えば、写得好→写得很好→写得非常好→写得确实好→写得好极了

順番に「書いたのが良い→書いたのがとても良い→書いたのが非常に良い→書いたのが確実に良い→書いたのが極めて良い」の意味である。

5. 程度補語

形容詞の後ろに「極 ji ごく、多 duo ずっと…だ、透 tou まったく、すごぶる」などからの組み合わせを加えることで程度を表す述補構造である。例えば、好极了「hao ji le きわめて良い」、暖和多了「nuan huo duo le ずいぶん暖かく（なる）」、可笑透了（ke xiao tou le まったくおかしい）この種の述補構造は後に綴り「了 le」を伴う。

2. 3 複合動詞の習得に関する研究

複合動詞に関する習得研究は、それほど多くはないが、最近になって複合動詞の意味分類などを踏まえ、語彙習得の観点から研究がなされつつある。

寺田(2001)

まず、寺田(2001)では、影山(1993)、影山・由本(1997)の複合動詞には「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の二種類があるという考え方を踏まえ、両者は異なるメカニズムによって習得されるという仮説を立て、日本語を母語とするが海外で生育した帰国子女を対象に、複合動詞の習得に関する調査を行った。それによると「統語的複合動詞」は規則を適応していく語形成規則 default タイプ¹¹であり、「語彙的複合動詞」は頻度と類推によって長期記憶に載せる(=Mental lexicon にリストして覚える)タイプであろうとする習得仮説を立て、複合動詞の作成、理解、正誤判定テストを用いて調査を行った。その結果、予想どおり海外滞在年数の多寡に関わらず「統語的複合動詞」は誤りが少ないのに

対し、「語彙的複合動詞」は海外滞在年数が長いほど誤用が増えたと報告している。統語的複合動詞は日本語の複合動詞の語形成規則の default タイプであり、一方の語彙的複合動詞はインプットの量に影響される連想記憶を形成するタイプであるという仮説が支持された。また日本語の動詞を基にした動詞の複合語習得の過程で、動詞の構造上修飾関係である付加詞より項関係を優先させる習得の途中の段階が存在する可能性が示唆された。この寺田(2001)の研究は、第二言語としての日本語の複合動詞の習得研究にとって大きな示唆を与えた。

他方、日本語学習者を対象とした習得研究では、次のような研究がなされてきた。

松田(2002、2004)

松田(2002、2004)では、超上級学習者を対象に「～こむ」の習得状況を考察し、認知意味論の観点から「コア図式」¹²を「～こむ」に応用して意味習得の面に着目した研究を行っている。まず、認知意味論的手法を援用し、「～こむ」のコア・スキーマをコア図式で表し、その図式に焦点化操作を加えることによって「～こむ」の多様な意味の統一的な説明を試みた。また、学習者の意味知識を探る方法として「～こむ」を後項要素とする複合動詞 54 語を提示し、それらを用いて短文を作るようにもともと産出した文を日本語母語話者 3 名が「受容できる文 (高受容度文)」か「受容しにくい文 (低受容度文)」かについて判定した。その結果、産出した文には低受容度文が多く含まれ、上級になっても「～こむ」についての意味知識が十分ではないことが明らかになった。そして、「受容」の観点からも学習者の意味知識を探った。主に、「～こむ」を後項要素とする複合動詞 30 語からなる刺激文 90 文の「文判断テスト」を韓国語母語話者、中国語母語話者、日本語母語話者にそれぞれ行った。調査の結果、日本語母語話者と学習者の文の判定には大きな相違点があり、日本語母語話者が「～こむ」の使用の拠り所となる認知的基盤¹³を持って判定しているのに対して、学習者は学習者の母語を問わず、「～こむ」の使用の拠り所となる認知的基盤の獲得は十分になされていないことが分かった。

松田の研究は主に、「～こむ」の多義構造はどのように捉えられるか、学習者は「～こむ」の多様性についてどのような意味知識を持っているか、語彙習得支援のためにはどのようなアプローチをしていけばよいかに注目して考察を行った。

陳(2006)

陳(2006)では、日本語複合動詞の様々な語義の中でプロトタイプ性の高いもののほうが、

早期に習得されるという仮説を立て、中国人日本語学習者を対象とした「～あう」「～こむ」型複合動詞の理解度調査を行った。調査では、「～あう」「～こむ」の様々な意味用例と、「結婚しあう」「疲れあう」「勉強しこむ」「鳴りこむ」などの非文用例を混ぜて例文の受容可能性を問うた。「～あう」と「～こむ」の学習者の習得に関する正答率の相関は、かなり強い正の相関が観察され、「～あう」が習得できている学習者は同時に「～こむ」のほうも高得点であったとする。学習者が前項動詞から複合動詞の意味を推測しているようだったが、前項動詞の意味をほとんど持たないような慣用句的な表現も多く、理解が困難であることが明らかになった。また、学習者が後項動詞に対して持っているプロトタイプは非常に曖昧なもので、第一義的なものにとどまり、残りは一つの単語として覚えていくと推察した。

そこで、陳は学習者が自然な形でスムーズに学習できるように複合動詞の習得階層を4つに分けている。階層Ⅰには、プロトタイプ性の高い語義を持つ代表的な語が選ばれる。例えば、「～あう」では「抱き合う」や「話しあう」、「～こむ」では「打ちこむ」、「さしこむ」のような明確に後項動詞のニュアンスを含意する語がプロトタイプ的な意味を持つ語として挙げている。次に階層Ⅱでは、プロトタイプから派生するような多義的意味構造の理解が求められることで、「～あう」での遭遇のカテゴリーや「～こむ」の累積化や固着化などである。階層Ⅲ、Ⅳには分析的知識の獲得ができるように後項動詞がつくことで前項動詞を単独で用いた時との意味の差異が属する。まとめると、学習者の複合動詞の理解には、(i)後項動詞が決定する明確なプロトタイプ的な意味を持つ複合動詞、(ii)多義的な意味体系の複合動詞、(iii)慣用表現や微妙なニュアンス、(iv)文脈判断による使用可否、という四段階が認められると指摘している。

白(2007)

白(2007)では、複合動詞「～出す」において、韓国語を母語とする学習者はどのような意味領域を持ち、母語話者とはどのようなところで相違しているのかを考察したものである。「～出す」の出現頻度の高い語彙であるだけでなく、韓国語にも「～出す」と似ている意味と用法を持つ対応語「～내다」が存在するという。白の研究では、特にこの母語対応語の概念が日本語語彙の概念形式にどのような影響を与えるかに注目し、考察を行った。主な研究方法としては、22項目の「～出す」が使われた文判断テストを実施した。調査項目の半分の11項目は学習者の母語である韓国語の直訳では自然であるが、日本語すれ

ば不自然な文である。実験の結果、学習者は 22 項目のうち 17 項目で母語話者と有意な差が見られ、両者の語彙に関する概念に差があることが明らかになった。またさまざまな項目において、学習者は母語の対応語の意味を「～出す」に適用する傾向が見られたが、学習者が母語直訳のみ頼りに、母語の概念をそのまま目標言語に適用して判断を下したのではないと指摘している。「～出す」のさまざまな意味のなかで「基本的で具体的な意味」を含んでいる項目の場合、学習者の受容度はより高くなり、これは母語の無標性¹⁴と「～出す」の意味構造という 2 つの要因が絡んでいると結論づけている。なお、母語で「有標」と感じられた項目の受容度はそこまで高くなく、学習者の判断基準は母語知識の選択的な使用、日本語に対する不完全な知識、またその語彙に関する学習経験が形成され、このようにさまざまな要素が介入するので、母語話者とは違う意味領域を持つようになる可能性について示唆している。

以上、複合動詞の習得に関する研究について概観した。帰国子女を対象とした研究、認知意味論の観点からの研究、「～あう」、「～こむ」のプロトタイプ性仮説からの研究、「～出す」とそれに相当する韓国語との意味領域の比較などの研究がなされてきた。ところが、複合動詞全般を研究対象とし、学習者が産出した運用データを利用して、使用状況を解明し、陥りやすい誤用に関する実証的な習得研究はそれほど進展していないというのが現状である。

第二言語習得の観点で複合動詞に関する学習者の習得研究は行われてきたが、管見の限り日本語教育への応用の点に関してはそれほど多くない。以上のことを踏まえ、本研究では中国人日本語学習者を対象に、学習者にとって習得しにくい複合動詞はどのようなもので、学習者の習得状況はどのようなものかを明らかにする調査を実施する。なお、第 3 章では、森田(1994)、姫野(1999)の複合動詞の分類に関する理論的枠組みを取り入れながら、調査の枠組みとなる複合動詞の新しい分類を日本語教育の観点から試みる。

第3章 理論的枠組みと本研究の立場

3.1 本研究での理論的枠組み

これまで日本語の複合動詞の分類については、数多くの研究者により分析が行われてきている。その中で、第2章では、意味的あるいは統語的関連性に基づいた寺村(1984)、山本(1984)、影山(1993)、松本(1998)、森田(1994)、由本(2005)、姫野(1999)を取り上げ、従来の分類の仕方と問題点について述べた。

寺村(1984)では、主に前項と後項の意味に注目し、前項と後項となる単純動詞の意味が複合後保持されているかどうかで分類している。山本(1984)の場合は、意味的な観点ではなく、前項と後項の格支配がどのような形で関わりあっているのかという統語的な面に従い分類している。影山(1993)では、複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に明確に分け、区別基準となる5つのテストを提示した。森田(1994)では、語義の問題に注目し、語義結合の度合いから複合動詞が5つの段階が認められると指摘した。姫野(1999)では、影山(1993)と同じく複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分類し、語彙的複合動詞を更に4つに分類している。

これらの複合動詞の分類に関する先行研究を踏まえ、本研究では、日本語教育への応用をも視野に入れた姫野(1999)の分類法、更に語義結合の度合いに注目した森田(1994)の分類方法を参考に新たな分類の枠組みを見出すことにする。それに先立ち、本研究の立場を示しつつ、姫野(1999)、森田(1994)の分類法の詳細について具体的に述べておく。

まず、姫野(1999)では先行研究のような分析方法だけでは複合動詞の複雑な結合様式を分析し尽くせないと指摘し、次のような分類法で複合動詞の分類を考えた。

- ① 影山(1993)の二分類でまず二分する。
- ② 複合動詞のそれぞれの動詞の意味構成を、文に言い換えてみる。

文に言い換えるかどうかを、前項、後項の二つの動詞を使って言い換えられ、本義がそのまま生きている、後項動詞を他の言い方にしなければならない、前項動詞を他の言い方にしなければならない、前項動詞と後項動詞二つの動詞とも他の言い方にしなければならないという4つの基準で分類している。

姫野は影山(1993)の二分類を認めた上、語彙的複合動詞をまず下記のように分類している。

- (1)二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる

(a)並列関係：「～して～する」

「～したり～したりする」

「～して、その結果すなわち～する（ことになる）」等

継起：流れ着く→流れて（流れてから）着く

手段・原因：縫いつける→縫って（縫うことにより）つける

焼け死ぬ→焼けて（焼けることにより）死ぬ

付帯状況：遊び暮らす→遊んで（遊びながら）暮らす

並起：泣き叫ぶ→泣いたり叫んだりする

類似：書き記す→書いてその結果、すなわち記す（ことになる）

(b)比喩的關係：「～するように、～する」

書き殴る→まるで殴るように乱暴に書く

盗み見る→他人の視線を盗むようにしてこっそり見る

(c)主述、補足の関係：「することが～する」

「することを～する」

主述：あり余る→あることが余る

飲み足りる→飲むことが足りる（＝十分だ）

補足：出し惜しむ→出すことを惜しむ

鳴き交わす→鳴くことを交わす

(2)後項動詞を他の言い方にしなければならない

投げ込む→投げて、中に入れる

投げつける→投げて、対象物に強く当てる

震え上がる→すっかり震える

(3)前項動詞を他の言い方にしなければならない

打ち切る→継続状況を途中で切る（＝終了する）

引き継ぐ→あとを続いて継ぐ

さりつける→押してつける

(4)二つの動詞とも他の言い方にしなければならない

落ち着く 取り成す 躰る（しつける）

(姫野 1999 : 21)

そして、影山(1993)の統語的複合動詞については下記のように分類している。

(1)二つの動詞がそのまま言い換えられる

(a)なし

(b)なし

(c)主述、補足の関係：～することが／を／に～する

主 述 : 働き過ぎる→働くことが過ぎる (=過度だ)

補 足 : 歩き始める→歩くことを始める

歩き慣れる→歩くことに慣れる

(2)後項動詞を他の言い方にしなければならない

降り始める→降ることが始まる

食べつける→食べることに慣れ親しむ

言いかける→言いそうになる／少し言うが、途中でやめる

話し合う→互いに話す

(姫野 1999 : 21)

第2章でも触れたが、姫野(1999)の研究は、単純動詞を既に習得した学習者の場合、動詞単独で扱われる場合の意味と複合動詞の意味とをいかに関連づけて理解するのかを提示することから、学習者の複合動詞習得に関しては評価できる分類方法と言えよう。しかしながら、単独で使われる場合の意味が複合動詞の中でどのような形で生かされているかは考察しているが、単純動詞がどのように変化しているか、変化の度合い、変化の中身については考察に及ばなかった。従って本研究は、姫野の基本的な立場「単独で使われる場合の意味の変化」と同様の立場に立ち、単純動詞の意味が複合動詞の中での変化の度合いに注目し、新たな複合動詞の分類方法を試みる。

次に、語義結合の度合いから分類した森田(1994)の分類法を詳しく述べていく。森田は複合動詞を意味面から考慮する場合、その重要度は用例数の多寡ではなく、複合動詞を支える個々の前項動詞と後項動詞の意味と複合動詞全体としての意味との比較の上に立って、考察しなければならないと指摘している。その上、意味面で重視すべき点を以下の4点にまとめている。

ア. 「降りしきる」「踏みしだく」のように、現代語では「しきる」「しだく」は単独で用いられない。このような動詞は、用例数はたとえ少なくとも、注意する必要がある。

イ. 「はいりこむ」「飲み込む」「教え込む」の「こむ」のように、「こむ」自体は単独

で用いられているが(=混む)それとは別語として複合化している場合は、注意する必要がある。

- ウ. 「突き落とす」「くどき落とす」「見落とす」のように、「～落とす」の意味に幾つかの段階が見られる語は、その複合動詞がどの段階にあるか注意する必要がある。
- エ. 上接動詞・下接動詞¹⁵の意味関係が多種にわたる場合は、要注意である。それぞれの関係を整理して、その規則を記述する必要がある。

(森田 1994 : 288)

そして、イでは、例えば「はいり込む」は「はいってこむ」のではなく、「～込む」は「中側に向かって」という方向性と「行為を完全に行う」という行為の度合いとを添えるにすぎないとしている。エの意味関係が多種にわたるとしているのは、例えば、「～入る」は「入る」本来の意味が働く例として、「討ち入る」、「忍び入る」のような本義と本義の関係のもの、「押し入る」のような「無理にはいる」という転義と本義の関係、「立ち入る」のように「立ち」が接辞化して、ただ「はいる」意しか表さない強意を添える関係などさまざまな意味関係が挙げられるからである。特に、「入る」の意味関係は前述のほかにも、「非常に……する」、「心から……する」意を表す「痛み入る」、「恐れ入る」などや、更に発展して「完全に……する」の意の「絶え入る」、「寝入る」、「じっと……する」、「一心に……する」の意の「見入る」、「聞き入る」などが挙げられる。

「～入る」のように種々の意味関係が見られ、さまざまな意味段階があるように、複合動詞全体を意味の度合いから眺めると以下の5つの段階が見出されるとしている。

第1段階 並列関係

二つの動詞が結び付いて生ずる意味関係として最も単純なものは、両動詞が対等の関係で並列する「……して……する」形式である。動詞の中には、「て」を介して二つの動詞が結合し合い、一語の動詞のように働く形式が稀に見られるという。例えば、

受けて立つ、うって変わる、買って出る、食ってかかる、取って代わる、取って返す、見てとる、持って回った(言い方)、よって来たる(所以)

などである。

これらは特定の動詞同士が結合して固定したものであるが、後接部が比較的自由にいろいろな動詞と結びついて、前後の意味関係が更に発展すれば補助動詞となるという。

なお、一般の複合動詞はむしろ「て」の助けを借りないで直接する形となっている。例えば、「……して……する」の動作関係は「て」の機能によって意味に幾つかの段階が生

ずる。まず、ある動作に続いて次の動作を行う〈動作・作用の順次性〉。つまり、「……してから……する／……になってから……になる」という相次いで成立する二つの動作関係で、このような複合動詞は意外と少ないとしている。

→追いすぎる、寄りすぎる、燃え移る

などがその例である。この型の特徴は、「に」格を取る自動詞が下接することである。「……して……する」の意味関係が結果として複合動詞全体が「に」格を要求する形となる。（「燃えて……に移る」→「……に燃え移る」）

そして、ある動作に引き続き次の動作が起こるということは、その動作が引き金となって次の動作・作用が結果的に生ずるという因果関係を成り立たせやすい。この因果関係は、ある場合には「……することによって……する」

→押し上げる、言い広める、踏み固める、掃き清める、なぐり殺す

という〈手段・方法〉となり、また「……することで……することになる」「……した結果……となる」

→寄り集める、言い当てる、食い荒らす、降り積もる、泣きぬれる、着ぶくれるという〈行為の結果〉となる。更に、その因果関係が緊密化すれば「……すること、すなわち……」

→貸し与える、切り刻む、言い聞かせる、書きしるす

というイコールの関係か、「……し、かつ……する」「……したり……したりする」

→照り輝く、鳴り響く、恋い焦れる、驚きあきれる、泣き叫ぶ、咲き匂う
または「……ながら……する」「……ながら……となる」の〈動作の状態〉ともなる。

→浮かれ歩く、遊び暮らす、泣き明かす

この段階まで来ると、並列関係というよりむしろ修飾関係と取ると指摘し、個々の語例に当たった場合、こうした意味差は必ずしも画然とは区別できないという。いずれも「……して……する」の意味関係をなし「踏んで固める、言って聞かせる、遊んで暮らす」と、「～て」の言い換えの可能な例が多く、つまり上下の動詞がまだ意味面で独立しており、互いに意味を発揮しあっている並列関係の段階にあると指摘している。

第2段階 主述、補足の関係

上下の動詞がそれぞれ独立した意味を持ち、それが並列関係でなく、一歩進んで「主語―述語」の「が」格の関係を構成することがある。「……することが……だ」「……することが……となる」と自動詞で受ける型のことである。

思い余る→思うことが余る

吹き荒れる→吹くことが荒れる

売れ残る→売れることが残る（売れずに残る）

また、「に」格の関係「……することに……だ」「……することに……となる」の意をなす例も見られる。「～に自動詞」となる語が下接する。

見飽きる←見ることに飽きる

し慣れる←することに慣れる

読みふける←読むことにふける

他動詞が下接すれば「を」格の補足関係「……を……する」の意となる。

書き誤る←書くことを誤る

売り急ぐ←売ることを急ぐ

見交す←見ることを交す

これら主述関係や補足関係にある複合動詞は、二つの動詞の表す意味が文法的関係で結びついており、語構成上注意すべき一群であるという。

第3段階 具体的意味から抽象的意味へ

主述関係や補足関係を取る複合動詞の中には、複合するどちらか一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられる例を幾つか挙げている。

「～起こす」の場合、「たたき起こす／抱き起こす／掘り起こす」などは「……して……する」並列関係（第1段階）にあたり、「起こす」はヒト・モノを対象とした“目覚めさせる、起き上がらせる、立てる”という具体的行為を表すものとして用いられている。一方、「書き起こす／説き起こす」などは「……することを起こす」補足の関係（第2段階）と考えられ、「起こす」はコトを対象とした「始める、開始する」の義で、かなり抽象的な意味となっている。これを森田は接辞化への第一歩としている。

飛び出す—降りだす

取り上げる—書きあげる

言い返す—塗りかえす

右の「だす、あげる、かえす」なども、左に比べてかなり抽象化されてはいるが、「降ることが始まる」「書くことを終える」「塗ることを再びなす」と、動詞本来の実質的意味をまだ失っていないと指摘している。「上げる」などは、「仕事を上げる」と、それ自体“終了させる”の意で独立して用いられる。

追い抜く—走りぬく

打ち付ける—やりつける

吹き掛ける—やりかける

の右の例になると接尾辞に近づくが、“最後まで完全に……する”“その行為をしばしば行っている”“その行為を始めて、途中まで進行する”といった実質的意味を多少は含んでいるという。

歩きとおす、言いかねる、言いくるめる、言いまくる

などがその段階である。

第4段階 造語成分への移行

下接部分が、それ自体独立した動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質的意味をまだ残している場合があり、これを森田は動詞的造語成分と考えている。

考えあぐねる、言いそびれる、言いならわす

第5段階 実質的意味から形式的意味へ

抽象化が更に進んで、実質的意味を失い、形式化されてしまう場合である。例えば「引き起こす」の場合、「倒れた墓石を引き起こす」なら「……して……する」並列関係（第1段階）としてモノ対象の実質的意味を持つが、「戦争をひき起こす」となると、「ひき」が極度に抽象化されて動詞的意味を失い、単なる強意の添えことばとなると指摘している。（森田では強意の添えことばを「接辞」としている）

突き飛ばす—叱りとばす

突き立てる—わめきたてる

攻め入る—恐れいる

追い散らす—どなりちらす

かき混ぜる—かき曇る

押し出す—おし進める

打ち砕く—うち続く

上に挙げた複合動詞の中で、傍線部は強意表現として形式的意味を添えているにすぎないという。「かき～」、「おし～」の例は「かいつまむ」、「おったまげる」のように音便形になる場合もあるので注意を払うべきだという。

以上の森田(1994)の分類によると、ある語が他の語と連結することによって新たな意味

が加わったり、原義から著しく意味が遠くなる場合などがあり、そして、そのような複合動詞は語彙的に前の二つの単純動詞から複合動詞の意味を推測しにくくなるので、学習者にとって複合動詞の習得が大きな問題になると思われる。

そこで、本研究では、複合動詞において前項動詞および後項動詞の意味の変化の度合いが複合動詞の難易度に影響し、かつ学習者の複合動詞の習得に影響するのではないかと考える。

3. 2 予備調査

「前項動詞および後項動詞の意味の変化の度合い」に関しては、3. 1で述べた姫野(1999)、森田(1994)の分類方法からも窺えるが、「前項動詞および後項動詞の意味の変化の度合いと学習者の習得とのつながり」を考えたもうひとつの出発点は金(2011)における予備調査である。

金(2011)では語彙的側面と統語的側面を持っている「～出す」、「～切る」型複合動詞を取り上げ、学習者の習得状況について予備調査を実施し、学習者における習得状況についていくつかの問題点を提示した。ここでは、金(2011)の予備調査と明らかになったこと、問題点について記述する。

3. 2. 1 予備調査の概要

(1) 調査の目的

学習者が複合動詞についてどのような意識を持っているのか、そして学習者の「～出す」、「～切る」の習得状況は具体的にどのようなものなのか、習得の上でどのような誤用が見られるかという課題を明らかにすることを目的として調査を実施した。

(2) 調査の対象：中国の大学で日本語を専攻している学習者

「～出す」、「～切る」が既習である3年生と4年生、いわゆる中上級レベル¹⁶の学習者を調査対象とした。

(3) 調査項目の内容及び方法

大きく意識調査、文産出テスト、日中翻訳テストの3つに分けられる。

まず、複合動詞についてどのような意識を持っているのかについてアンケート調査票を用いて調べることにした。次に学習者が「～出す」、「～切る」型複合動詞を使って実際にどのような短文を産出するか、またどのような誤用が見られるか文産出テストを実施することにより得られたデータをもとに誤用分析を行った。最後に「～出す」、「～切る」型複

合動詞を含んでいる日本語の文脈を学習者に提示し、学習者が文脈の中で複合動詞を正しく理解しているかどうかの理解度調査を実施した。

なお、予備調査においては、文産出テストに使用した複合動詞 30 語と日中翻訳テストで使用した複合動詞 20 語は異なる複合動詞を使用した。そのため、日中翻訳テストにおける 20 語に関しては、学習者が文脈においては正しく理解できたかどうかは測定されたが、それらの複合動詞を使って実際に正しく短文を作れるかどうかは判定できなかった。これらの問題点を踏まえ、複合動詞全体を取り上げ、学習者の習得状況を調べた今回の調査では、文産出テストおよび日中翻訳テストでは同様の複合動詞 30 語を使用し調査を実施した。

3. 2. 2 予備調査の結果および問題点

意識調査では、学習者の 8 割以上が複合動詞は難しいと回答し、8 割以上の学習者が複合動詞について「もっと勉強する必要がある」と意識し学習の必要性を感じていた。そして、複合動詞の意味については、「意味は前の動詞と後ろの動詞の意味を合わせて推測する」と回答した学習者が多く、前項または後項から意味が派生するか、あるいは前項と後項の意味とは全く別の意味になる複合動詞は学習者にとって、学習が容易ではなく習得が困難な項目になると予想がついた。

文産出テストにおいて、学習者の平均正答率は 44.8%であり、50%を下回っていた。このことは全体的に見ると学習者が「～出す」、「～切る」型複合動詞の習得において、運用の面特に複合動詞を使って文を産出するという点では、それほど習得できていないことが分かる。30 語のそれぞれの正答率は図 2 の通りである。

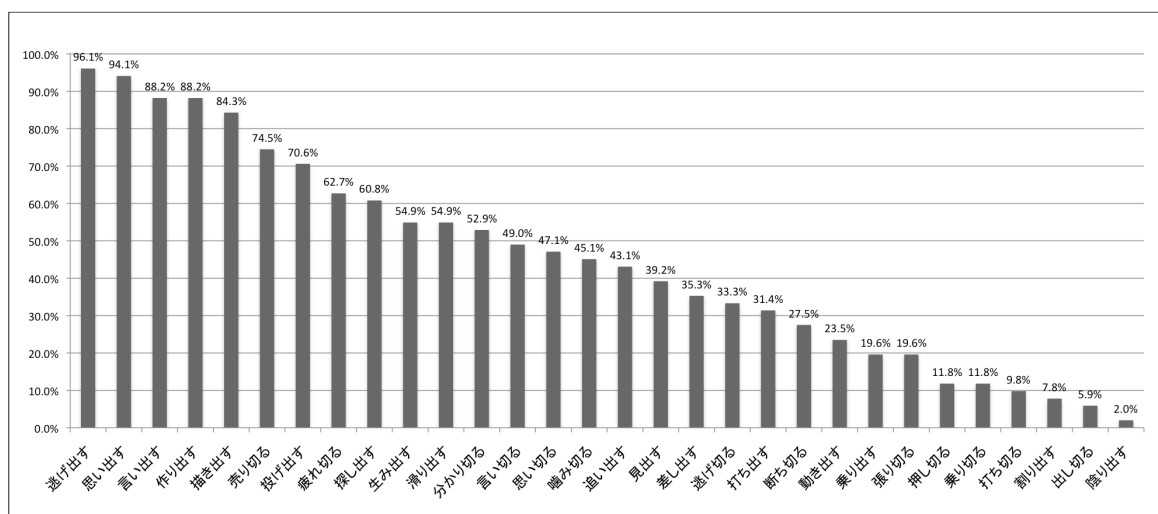


図 2. 文産出テストにおける 30 語の正答率

「逃げ出す」のように正答率が 96.1%で極めて高いものがあれば、「打ち切る」、「割り出す」、「出し切る」、「陰り出す」のように平均正答率が 10%も達していないものもあった。

日中翻訳テストにおいて、学習者の平均正答率は 61.1%であり、50%を上回っていて文産出テストと比べると平均正答率は少し高かった。このことから全体的に見ると学習者は「～出す」、「～切る」の習得において、意味理解の面特に文脈の中においてはある程度理解が進んでいることが窺える。翻訳テストにおける 20 語のそれぞれの正答率は図 3 の通りである。

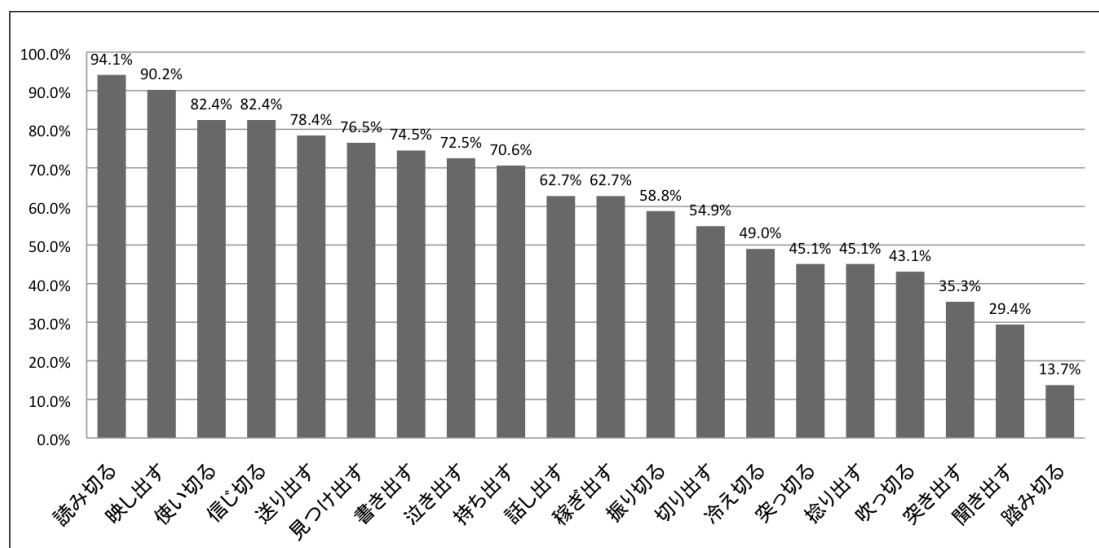


図 3. 日中翻訳テストにおける 20 語の正答率

日中翻訳テストにおいても、「読み切る」のように正答率が 94.1%で高いものがあれば、「聞き出す」、「踏み切る」のように正答率が 30%未満のものもあった。統語的・語彙的側面を持っている「～出す」、「～切る」の習得状況を詳しく分析した結果、興味深いことに、同じく「移動」の意味を表す「～出す」型複合動詞であるが、正答率に著しい差が見られるものがあった。「逃げ出す」(96.1%)、「投げ出す」(70.6%)、「差し出す」(35.3%)、「乗り出す」(19.6%)がそのようなもので、この 4 つの複合動詞の正答率の差は大きい。そこで、誤用分析を行った結果、学習者の産出文における「投げ出す」の誤用は以下のようなものであった。(以下(14)～(30)は学習者の産出した誤用文である)

(14) 王さんはバスケットボールが上手だ、いつも素晴らしいボールが投げ出した。

(15) 王さんは、大きな石を持って、汽車に投げ出した。

(16) 勝負にかかるショットを投げ出した。

「投げ出す」は精読教材に「そのめんどうな思案を投げ出して相手に押し付けることは、ときには無礼にもなりかねない。」という例文で提示されているにもかかわらず、被調査者は「投げ出す」の「事が完了しないのに、途中で諦めてやめてしまう。放棄する」意味の慣用的な用法は習得できていないことが明らかになった。

同じく「移動」の意味を表す「～出す」型複合動詞で正答率が二番目に低い「差し出す」を学習者は次のような意味で捉えていた。

(17) 先生は私の誤ったところを差し出した。

(18) 作文のまちがいところを先生に差し出されました。

(19) 太陽の光は地面に差し出して、あたたかく感じる。

(20) 教室から強い光が差し出す。

上に挙げた誤用では、学習者は「差し出す」という複合動詞は知っているものの、「差し出す」の前項動詞と同音異義語の「指す」の意味で、理解しているのではないだろうか。つまり、「私の誤ったところ」、「長い単語」、「作文のまちがいところ」、「私のミス」、「疑問」、「悪い所」を「指し示して、指摘した」という意味で誤用していた。また、「差す」の同音異義語には「指す」の他に「光が射す」の「射す」もある。この「射す」と理解し、誤用した被調査者はそれほど多くなかったが、「光が差し出す」のような誤用文を産出した。

姫野(1999)では、「さしだす」の「さす」は接頭語で、ある意図をもって相手の前面に何かを出すことを強調すると指摘している。他方、国広(1994)では「さす」は典型的には「団子に串をさす」のような動作をあらわすことだと指摘している。よって、このような多義的な意味を持つ前項動詞が後項動詞「出す」と結合し、本来の意味から変化がおこり、「差し出す」は、学習者にとって紛らわしく理解が困難で、習得の妨げにもなると考えられる。

同じく「移動」の意味を表す「～出す」型複合動詞で正答率が一番低い「乗り出す」の誤用文は以下のようなものであった。

(21) 仕事でバスに乗り出して会社に行った。

(22) お父さんは毎日バスで乗り出す。

(23) 不注意でバスを乗り出してしまった。

「乗り出す」についても精読教材に「お隣の主人は、恥ずかしそうに身を乗り出して言った。」という例文で提示されているにもかかわらず、学習者は「乗り出す」の慣用的な用法は習得できていなかった。姫野(1999)では、「乗り出す」を「さしだす」と同時に「移動」の意味用法に分類しているが、その具体的な意味関係の説明に関しては、「分析不可能なもの」に分類している。ここで、姫野(1999)を引用することにする。

【1. 移動】

1.1. 外部、前面、表面への移動

外部、前面、表面への移動を表す語が最も多い。主体の移動を表すもの「自動詞」と対象の移動を表すもの「他動詞」に分けられる。(中略)

[他動詞] この類は、前項動詞の修飾関係により、「方法、状態、目的、その他」に分けられる。

(1) 方法：「～することによって出す」

(2) 状態：「～した状態で出す」

(3) 目的：「～することすなわち外界に出す(開放、外部利用など)」

(4) 分析不可能なもの：乗り出す、さしだす

また、姫野(1999)では「乗り出す」は主体が自身の外部や前面に出す動作であるが、転じて、社会的行動に踏み切ることを表すと指摘している。このように、「乗り出す」は社会的行動に踏み切ることを表す慣用的な用法が多いが、学習者はそのような用法については習得できていなかった。

以上、同じ「～出す」型複合動詞であっても学習者の正答率は著しく異なり、例えば「逃げ出す」(96.1%)、「投げ出す」(70.6%)、「差し出す」(35.3%)、「乗り出す」(19.6%)と前項動詞および後項動詞の意味の変化の度合いが大きいほど学習者の正答率が低く習得が難しいことが窺える。

上述に挙げた誤用文の例に限らず、今回の予備調査では、例えば同じく「発見」の意味を表す「～出す」型複合動詞であっても、正答率がまちまちであるケースも見られた。姫

野(1999)の後項動詞「～出す」は同じく「発見」の意味を表すのにも関わらず、「探し出す」(60.8%)、「見出す」(39.2%)、「割り出す」(7.8%)と学習者の文産出における正答率には差が大きかった。

「発見」の意味を持つ「～出す」型複合動詞「探し出す」には以下のような誤用が見られた。

(24) 彼は頭を探し出して、「はい」と応答します。

(25) 学生は教室から頭を探し出す。

中国語には「探出头(去) tan chu tou (qu)」という表現があり、日本語で訳すと「頭を突き出す；頭を出す」の意味になる。ところが、誤用例(24)、(25)のような誤用をした学習者は日本語の「探し出す」の「発見」という意味が習得できず、中国語の漢字を見て、そのまま「頭を探し出す」のような誤用を産出したのである。

同じく「発見」の意味を持つ「～出す」型複合動詞「見出す」には以下のような誤用が見られた。

(26) 私は彼を庭で見出した。

(27) 私は富士山を見出しました。

「見出す」は学習者の精読教材にも、『能力試験出題基準』の1級文字・語彙リストにも提示されておらず、正答率も39.2%と低かった。「見出す」には「みだす」と「みいだす」の二通りの読みがあるため、少し紛らわしくなったのかも知れない。

同じく「発見」の意味を持つ「～出す」型複合動詞「割り出す」には以下のような誤用が見られた。

(28) ケーキから父親の一部分を割り出す。

(29) このケーキを割り出して、みんな分けましょう。

(30) このケーキを4分に割り出してください。

それはまた「～切る」型の複合動詞でも観察できた。同じく「終結」の意味を持ってい

る「～切る」型複合動詞で、例えば、「言い切る」、「思い切る」の正答率は49.0%、47.1%で、「乗り切る」、「打ち切る」の正答率は11.8%、9.8%と正答率には差が見られた。

日中翻訳テストでも同様に、例えば、同じく「終結」の意味を持っている「振り切る」(58.8%)、「踏み切る」(13.7%)はそれぞれ正答率に差が見られた。

3. 3 本研究における複合動詞の分類

以上の予備調査で明らかになった点、問題点などを踏まえ、本研究では、3.1節でも述べた森田(1994)の語義結合の度合いからの分類方法、姫野(1999)の語彙的複合動詞における単独で使われる場合の意味(本義)がどのように複合動詞の中で生かされているかという面からの分類方法を参考に、日本語の複合動詞を新たに5つのタイプに分類する。

本研究では、主に前項動詞と後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から変化しているかどうか注目し分類を行うことにした。以下具体例を挙げながら述べる。

【タイプ①】前項動詞あるいは後項動詞が単純動詞として使われる際の意味と変化がない複合動詞

飛び上がる、持ち歩く、泣き叫ぶ、送り届ける、言い忘れる、押し開ける、消え去る
読み始める、書き続ける、通り過ぎる、やり直す、燃え尽きる、払い終える、…

これらの複合動詞は、影山(1993)での二類の複合動詞つまり語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分けることなく、「飛び上がる」、「持ち歩く」のような語彙的な複合動詞であれ、「読み始める」、「書き続ける」のような統語的な複合動詞であれ、前項動詞および後項動詞いずれも単純動詞の意味から変化がないことが特徴である。森田(1994)の分類における「第1段階 並列関係」(「受けて立つ」、「買って出る」のような「て」を介して2つの動詞が結合し合うものは対象外)、姫野(1999)の分類における語彙的複合動詞の「二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる」と重なる部分もあるが、本研究では、「読み始める」、「書き続ける」などいわゆる影山の二分類における統語的複合動詞もこのタイプに分類している。「飛び上がる」は「飛ぶ+上がる」で単純動詞本来の意味は変化していない。「読み始める」は「読む+始める」も同様に単純動詞の意味は変化がない。つまり単純動詞本来の意味をそれぞれ保持する最も単純な複合動詞であり、これらの複合動詞は意味変化が

ないことで学習者にとって習得が易しいと考えられる。

【タイプ②】後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から文法的な意味に変化した複合動詞

降り出す、読み切る、めぐり合う、落ちかかる、書き通す、たまりかねる
苦しみ抜く、食べつける、死にかける、呼び得る、…

これらの複合動詞は主に後項動詞の意味が文法的な意味に変化し、複合動詞全体が文法的意味を持っているものである。例えば「降り出す」は「出す」本来の意味から「始動」の意味に変化し、文法的働きをすることで、「降り出す」は「雨が降り出す→雨が降り始める」の文法的意味を持っている。後項動詞が「完了」の意を表す「読み切る」や、「書き通す」、「苦しみ抜く」、後項動詞が「未遂」の意を表す「たまりかねる」、後項動詞が「始動」の意を表す「死にかける」、後項動詞が「習慣」の意を表す「食べつける」、後項動詞が「可能」を表す「呼び得る」などが挙げられる。このタイプの複合動詞は、後項動詞が文法的意味を持つことにより生産性が割りと高い。姫野(1999)の「統語的複合動詞」分類の「(2) 後項動詞を他の言い方にしなければならない」と類似した点はあるが、姫野は「降り始める」をも「食べつける」、「話し合う」と同じ分類にまとめている。「降り始める→降ることが始まる」と解釈し、姫野では「他の言い方にしなければならない」分類にしているのに対し、本研究では「降り始める」は単純動詞の意味の変化がないタイプ①に分類した点で姫野の分類と異なる。

【タイプ③】前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から抽象的な意味に変化した複合動詞

踏み切る、結び付く、見回す、見落とす、取り巻く、乗り出す、聞き入る
見越す、申し立てる、突き止める、引き起こす、取り入れる、…

これらの複合動詞は前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の物理的な意味から抽象的な意味(状況的な意味)に変化した場合である。このタイプの複合動詞は

前項動詞または後項動詞が具体的な動作などから離れ、抽象的なものへと変化する。森田(1994)の分類における「第5段階 実質的意味から形式的意味へ」では、例えば「引き起こす」の「ひき」は実質的な意味から抽象化され動詞的意味を失い、単なる強意の添えことば(接辞)であるとしている。本研究では、そのような複合動詞の他にも上に挙げた「踏み切る」、「乗り出す」など前項動詞、後項動詞いずれも抽象化したものも含めている。

【タイプ④】後項動詞が単純動詞として使われないもので、接辞化している複合動詞

眠り込む、乗り込む、詰め込む、降りしきる、考えあぐねる、言いふらす
言いそびれる、呼び習わす、黙りこくる、着古す、踏みしだく、恥じ入る、…

これらの複合動詞の後項動詞を見てみると、「込む」、「しきる」、「あぐねる」、「そびれる」など現代語では単純動詞として使われないもので、本研究では前項動詞と組み合わせて接辞化したもののタイプとして扱う。森田(1994)の分類における「第4段階 造語成分への移行」では、「考えあぐねる」、「言いそびれる」など後につく「あぐねる」、「そびれる」など自体独立した動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質的意味をまだ残している場合があり、動詞的造語成分と考えている。本研究では、「～込む」も加え、これらを接辞化した複合動詞として取り扱う。

【タイプ⑤】単純動詞として使われる際の意味から変化し、前項、後項ともに元の意味の手がかりなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞

打ち切る、落ち着く、取り成す、当て付ける、出し抜く、仕付ける
立て替える、立て引く、取り越す、掛け合う、入れあげる、…

これらの複合動詞は前項動詞および後項動詞の元の意味から完全に変化し、複合動詞全体の意味がたどれなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞である。「打ち切る」は前項動詞「打つ」と後項動詞「切る」の意味から完全に変化し、「それまでに続いていたものを終わりにすること」という意味にたどれなくなる。その他「落ち着く」も同様である。姫野(1999)では、語彙的複合動詞の分類において「(4)二つの動詞とも他の言い方にしなけ

ればならない」複合動詞として上述のタイプ⑤に当たる「落ち着く」、「取り成す」、「仕付ける（姫野では『躰る』と表記）」を挙げている。本研究では、タイプ①、タイプ②、タイプ③、タイプ④、タイプ⑤の順に、前項動詞および後項動詞の意味の変化の度合いが大きく、学習者にとっても習得が更に難しいと仮説する。

第4章 日本語の複合動詞に対応する中国語の表現

これまで見たように日本語の複合動詞には、例文(31)a、(32)aのように「動詞+動詞」の組み合わせが多くある。その複合動詞の前項と後項に対応する中国語の表現(31)b、(32)bを見てみよう。(以下の例文は全て村上春樹の『風の歌を聴け』から取り出したもので、例文の訳文 b は林少華の中国語訳版から取り出したものである)

(31)a. 僕は彼女を改札からひきずり出し、人通りの途絶えた道を目白まで歩いた。

b. 把她拖出检票口，沿着已无人影的街道走到目白。

(32)a. 7月の半ばにしゃべり終わると40度の熱を出して三日間学校を休んだ。

b. 到7月中旬说完时，发起四十度高烧，三年没有上学。

(31)bの「拖 tuo」は日本語で「ひきずる」の意味で、「出 chu」は日本語で「出す」の意味である。(32)bの「说 shuo」は日本語で「話す」の意味で、「完 wan」は日本語で「終わる、終える」の意味である。つまり、(31)a、(32)aの複合動詞の前項と後項に対応する中国語の表現(31)b、(32)bともに一対一に対応すると言える。

意味の側面においても、「ひきずり出す」と「しゃべり終える」は「拖出 tuo chu」、「说完 shuo wan」と日本語に対応する動詞の順序通りに当てはまり、中国語を母語とする学習者にとってこの種の複合動詞は理解しやすいと考えられる。ところが、日本語の複合動詞に対応するすべての中国語が(31)、(32)のように一対一で現れるわけではない。例を見てみよう。

日本語	中国語
(33) a. 取り出す	拿出(na chu 取り出す)
b. 乗り出す	积极从事(ji ji cong shi 積極的に従事する)
c. 流し込む	灌入(guan ru 注ぎ入れる)

例(33)では a の「取り出す」に対応する中国語は「拿出 na chu」で、直訳すると日本語の複合動詞と前項および後項の単純動詞が一対一に対応する。ところが、b の「乗り出す」に対応する中国語は「積極的に従事する」であり、中国語では複合動詞として表現されていない。また、c の「流し込む」の場合は複合動詞「灌入 guan ru」が使われているが、これは「流す」に対し「灌 guan (そそぐ)」、「込む」に対し「入 ru (入れる)」と意

味が微妙にずれていることが分かる。すなわち、これらの例から日本語に対応する中国語はすべてが日本語の動詞と同じように現れるわけではないことが分かる。

従って第4章では、日本語の複合動詞に対応する中国語にはどのような表現があり、日本語と比べどのような相違点が見られるかに注目し考察することにする。第3章で行った複合動詞の新分類は前項動詞あるいは後項動詞が単独で使われる時と意味の変化があるかどうか注目し分類したもので、複合動詞に対応する中国語の表現を検討したものではない。よって、対応する表現の仕組みが違うことが学習者の複合動詞の習得に何らかの関係があるかどうかを検討する。

4. 1 比較の対象および方法

分析対象として、日本国内だけでなく海外でも愛読者が多い村上春樹の小説『風の歌を聴け』の原作とその中国語版（林少華 訳）を選んだ。そして、原作『風の歌を聴け』における日本語の「動詞+動詞」336語を取り出し、それに対応する中国語について考察を行った。

村上春樹の小説を選んだ理由は、村上春樹の小説は海外でも愛読者が多く、特に中国では人気が高いことである。更に日常よく触れるコンテキストでもあり、日本語学習者にとっては、目に触れる可能性が高いことも考慮した。なお、翻訳者の林少華は村上春樹の25の作品を翻訳したほか、夏目漱石、芥川龍之介などの作品も翻訳し、中国でも有名な翻訳家として知られている。

取り出した複合動詞の延べ語数は336語で、異なり語数は242語であった。同じ語が異なる態(voice)などで使われていても、もとの態で数えた。(例えば、「飲み込む」が「飲み込まれた」のような受動態であっても、「飲み込む」と数えた。)

4. 2 対応する表現の考察

まず、『風の歌を聴け』から取り出した異なり語242語を第3章で試みた本研究の新しい分類タイプにそれぞれ分類してみた（詳しくは付録1を参照）。

ところが、前述の通り日本語の複合動詞に対応する中国語の表現は前項、後項の単純動詞がそれぞれ一対一に対応するものもあれば、「乗り出す→积极从事 *ji ji cong shi*」のように「積極的に従事する」というような別の表現で表されるものもあり、対応はさまざまである。従って、以下二節にわたり、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現について、構成要素の面、意味関係の面から考察を行う。

4. 2. 1 構成要素に関する考察

日本語の複合動詞に対応する中国語の表現を本研究では、表 1 のように語あるいは複合語レベルで対応するものと語レベル以上で対応するものと 2 つに大別した。

表 1 日本語の複合動詞に対応する中国語表現の構造

語あるいは 複合語レベル (190 語)	1) 動詞+動詞	132
	2) 動詞	17
	3) 動詞+形容詞	12
	4) 四字熟語	12
	5) 形容詞	7
	6) 動詞+助詞	5
	7) 動詞+名詞	5
語レベル以上 (52 語)	8) フレーズ表現	26
	9) 副詞的修飾語+動詞	26

※表に示した数字は異なり語数を表す(合計 242 語)。

表 1 を見ると、日本語の複合動詞に語あるいは複合語レベルで対応するのは 190 語で、語レベル以上で対応するのは 52 語であった。語あるいは複合語レベルと語レベル以上の区分は、主に、一つの語単位であるか、それとも幾つかの語が組み合わせられて一つの句をなしているかどうかで分けた。

語あるいは複合語レベルで対応するものを更に構成要素の品詞の面から考察を行った。四字熟語を除いて構成要素の品詞の面から具体的にみると、それぞれの語は「動詞+動詞」、「動詞」、「動詞+形容詞」、「形容詞」、「動詞+助詞」、「動詞+名詞」という品詞の組み合わせになっていた。その中でも、中国語でも「動詞+動詞」で対応する語は 132 語と過半数を占めていた。

語レベル以上で対応するものは、フレーズ表現になるものが 26 語、副詞的修飾語+動詞になるものが 26 語を占めていた。

以下具体例を挙げながら、『風の歌を聴け』に出現した複合動詞に対応する中国語表現の構造について検討していく。

1) 日本語の複合動詞に中国語でも「動詞+動詞」の複合動詞で対応するのは 132 語で、過半数を占めていた。例えば、

(34)叔父は三年後に腸の癌を患い、体中をずたずたに切り裂かれ、体の入口と出口にプラスチックのパイプを詰め込まれたまま苦しみ抜いて死んだ。

叔父，三年后身患肠癌，死的时候被切割得体无完肤，身体的入口和出口插着塑料管，痛苦不堪。

(35)僕はあきらめて天井を見上げた。

我无可奈何地仰望天花板。

「切り裂く」に対応する中国語の表現「切割 *qie ge*」は日本語の前項、後項とも動詞で、日本語と同じ動詞と後項動詞の順序で現れる。(35)の「見上げる」は中国語で「動詞+動詞」として対応されるが、「仰望 *yang wang* 仰いで見る」のように前項と後項の語形の順序が逆になっている。

中国語でも「動詞+動詞」で対応する 132 語の中には、(35)のように語形の順序が日本語と逆になる複合動詞が「見上げる」のほかにも、「見回す→环视 *huan shi* 回す+見る」、「聞き返す→反问 *fan wen* 返す+聞く」などが見られた。

2) 語あるいは複合語レベルで対応し、中国語で「動詞」で対応する例は、「全部海に向かって放り投げてしまう（一古脑儿扔到海里）」、「ハンドルにもたれかかったまま（一直俯在方向盘上）」などあった。「放り投げる」は「扔 *reng*（ほうる、投げる）」、「もたれかかる」は「俯 *fu*（うつむく）」と動詞で対応する。

3) 次は、語あるいは複合語レベルで対応し、「動詞+形容詞」の品詞要素になる例である。

(36)一夏中かけて、僕と鼠はまるで何かに取り憑かれたように 25 メートル・プールの杯分ばかりのビールを飲み干した。

整个夏天，我和鼠走火入魔般地喝光了足以灌满二十五米长的游泳池的巨量啤酒。

(37)「ジェイズ・バー」の床いっばいに 5 センチの厚さにピーナツの殻をまきちらした。

丢下的花生壳足以按五厘米的厚度铺满杰氏酒吧的所有地板。

「喝光 *he guang*」の「光 *guang*」は何も残らない、尽きている様子を表す形容詞である。また、「铺满 *pu man*」の「满 *man*」はいっばいである様子を表す形容詞である。こ

のほかに「動詞＋形容詞」の表現では「飲みすぎる→喝多 he duo」など 12 語見られた。

4) 語あるいは複合語レベルで対応し、四字熟語になる例は次の通りである。

(38)年老いたんだ。死にかけてる。

好啦，奄奄一息。

(39)一夏中かけて僕と鼠はまるで何かに取り憑かれたように 25 メートル・プール一杯分ばかりのビールを飲み干した。

整个夏天，我和鼠走火入魔般地喝光了足以灌满二十五米长的游泳池的巨量啤酒。

四字熟語として対応する語は、「取り憑かれる」→「走火入魔 zou huo ru mo (取り憑かれる)」、「死にかける」→「奄奄一息 yan yan yi xi (氣息奄々となっている)」のほかにも、「生き残る」→「苟活于世 gou huo yu shi (良心をごまかして生きていく)」、「付け加える」→「添枝加叶 tian zhi jia ye (枝に葉を添える)」、「向い合う」→「面面相覷 mian mian xiang qu (向き合う)」など「動詞＋形容詞」と同様 12 語あった。

5) 語あるいは複合語レベルで対応し、品詞要素が形容詞になっている語は次の通りである。

(40)ロレーヌ地方のすぐれた裁判官レミーは八百の魔女を焼いたが、この『恐怖政治』について勝ち誇っている。

洛林地方法院的优秀法官莱米烧死肋八百个女巫，而他对这种《恐怖政治》仍引以为自豪。

(41)1 キロメートルばかり下降してから彼は適当な横穴をみつけてそこに潜りこみ、その曲がりくねった道をあてもなくひたすらに歩き続けた。

下降大约一公里之后，他觅得一处合适的横洞，钻入其中，沿着曲曲折折的路漫无目的地走动不止。

形容詞として対応するのは、「勝ち誇る→自豪 zi hao (誇りに思う)」、「曲がりくねる→曲曲折折 qu qu zhe zhe (曲りくねっている)」のほかにも、「悟り切る→果斷 guo duan (きっぱりしている)」など 7 語あった。

6) 語あるいは複合語レベルで対応し、品詞要素が「動詞＋助詞」になっている語は次の

通りである。

(42)僕は深い傷を負い、羽には血の痕が黒くこびりついている。

而且身负重伤，羽毛上沾着块块发黑的血迹。

(43)彼はいつもまるで蠅が蠅叩きを眺めるように物珍しそうにのぞきこんだ。

他更像苍蝇盯视苍蝇怕似的盯着书问。

助詞「着 zhe」は、例えば、「吃着饭 chi zhe fan ご飯を食べている」の場合は、ある動作の進行や状態の持続を表すが、そのほかにも程度の深さも表すことができる。例えば、「好着呢 hao zhe ne!」（すごくいいんだよ！）のように程度の深さを表す。(42)、(43)の例も同様に程度の深さを表す助詞「着 zhe」が動詞と組み合わせられている。「動詞+助詞」の品詞要素になるのはこのほかに、「安物の家具をひととおりに詰めこんだ→一応堆着廉价家具」など5語あった。

7) 語あるいは複合語レベルで対応し、品詞要素が「動詞+名詞」になっている語は次の通りである。

(44)カウンターに座ってぼんやりと本を眺め、僕が何を話しかけても気の無さそう
などおりいっぺんの答えを返すだけだった。

常常坐在餐桌旁呆愣愣地看书，我同他搭话，他也只是无精打采地应付了事。

(45)僕は幾らかホッとして立ち上がり、机の上の電気時計を眺めてからグラスに水を注いで戻ってきた。

我算是舒了口气，起身看一眼桌上的电子闹钟，倒了杯水折回。

「動詞+名詞」で対応するのは、「話しかける→搭话 da hua」、「立ち上がる→起身 qi shen」など5語である。「搭话 da hua」、「起身 qi shen」はそれ自体一語で動詞であるが、構成要素からみると、「搭（つなげる、かける+話（はなし）」、「起（起こす）+身（からだ）」のように、「動詞+名詞（目的語）」の組み合わせとなっている。

次に日本語の複合動詞に中国語が語レベル以上で対応するものを見てみる。語レベル以上で対応するものには、フレーズ表現になるのが26語、副詞的修飾語+動詞になるものが26語あり、動詞+動詞と対応するもの(132語)の次に多かった。

8) フレーズ表現になる例は具体的には以下のようなものである。

(46) さあね、あたしにもどうもよくわからないよ。夏が終わりかけてるからかね。

这个—我也莫名其妙。莫不是因为夏天快要玩了？

(47) そのうちに待ちくたびれたんで奴のアパートに電話をかけてみたんだ。

于是一会儿我就等得心烦意乱，往那小子家里打电话

これらは語として現れず、いわゆるフレーズ表現になるものである。(46)は

「快（助動詞）＋要（助動詞）＋完（動詞）」

まもなく ~なるだろう 終わる

という構成で直訳すると「もうすぐ終わろうとしている」と訳することができる。「要 yao」という助動詞は、動詞や形容詞の前に置き、可能や願望、義務、必要などを表す。(47)は

「等（動詞）＋得（助詞）＋心烦意乱（形容詞・四字熟語）」

待つ 助詞 気分がむしゃくしゃする

という並びで構成され、直訳すると「気分がむしゃくしゃするほど待つ」と訳することができる。ここでの「得 de」は助詞で、動詞や形容詞の後ろについてそれらを結果あるいは程度を表す補語とつなげる役割をしている。

これらのほかにも、「焼け残る→未被晒 wei bei shai まだ焼かれていない」の場合は、フレーズ表現だが、構成要素からみると「副詞＋介詞＋動詞」の並びで構成されている。中国語文法における介詞というのは、前置詞とよく似た機能を持ち、基本的に動詞の前に置かれ、主語と動詞の間に何か介する（導く）役割を果たしている。「生え揃う」も同様の例である。

「生（動詞）＋得（助詞）＋整整齐齐（形容詞）」

生える 助詞 きちんと並んでいる

という構成で、「生えたのがきちんとする／きちんと生え揃う」の意味を表す。この他に「動詞＋量詞＋動詞」の例を紹介する。

「走（動詞）＋个（量詞）＋不停（動詞）」

歩く 量詞 絶えない

「生え揃う→生得整整齐齐 sheng de zheng zheng qi qi 生えたのがきちんとする」の場合は、「動詞＋助詞＋形容詞」の並びで構成され、「歩き回る→走个不停 zou ge bu ting 絶

えずに歩く」の場合は、「走（動詞）＋个（量詞）＋不停（動詞）」の並びで構成され、フレーズ表現となっている。

9) 語レベル以上でフレーズ表現と同様に多かったのは、副詞的修飾語＋動詞の組み合わせで対応するものであった。

(48)常連客も昔の方が良かったねとブツブツ文句を言いながらもビールを飲み続けている。

常客们一边嘟嘟囔囔地说还是从前好，一边不停地喝啤酒。

(49)なにしろ自分が不治の病に冒されてると信じこんでるわけさ。

固执地以为自己患了不治之症。

(48)の「不停 bu ting」は「止まらない」の意味で動詞であり、

「不停（動詞）＋地（助詞）＋喝（動詞）」

止まらない 助詞 飲む

(49)の「固执 gu zhi」は「頑固である、強情である」という意味で同じく動詞で、

「固执（動詞）＋地（助詞）＋以为（動詞）」

固执する 助詞 思う

という構成からなっている。それらの後ろに来る「地 de」は助詞で、他の語句の後ろにつけて動詞や形容詞の修飾語を作る働きをしている。すなわち、ここでは、「不停 bu ting」、「固执 gu zhi」は助詞「地 de」でつながられて副詞的修飾語として後ろにくる動詞を修飾している。「副詞的修飾語＋動詞」の表現で対応するものは、合計 26 語で、その中、上述のような助詞「地 de」でつながられる形で対応するものは合計 20 語あった。

「副詞的修飾語＋動詞」の表現ではあるものの、助詞「地 de」によって修飾語になるのではなく、形容詞の構成要素が副詞的用法になって、後ろの動詞を修飾する形で対応するものが残りの 6 語であった。

(50)鼠は包みを手にしたまま考えこんだ。

鼠把唱片拿在手上，沉思起来。

(51)彼女はヘアブラシを片手に握りしめたまま、いまにも泣き出しそうな目で僕をじっと見た。

她一只手紧握发刷，用马上要哭出来的眼神定定的看着我。

(50)の「沉 chen」は「船が沈む」のように「沈む」の意味で使われる場合は動詞であるが、ここでは「深い」という意味で形容詞である。(51)の「紧 jin」は「固い」の意味で同じく形容詞である。これらの形容詞が、後ろに動詞を伴う場合、「沉思 chen si 深く考える」、「紧握 jin wo 固く握る、しっかり握る」のように副詞的用法になる。日本語における形容詞の副詞用法は「深い→深く」、「固い→固く」のように形態変化を起こすが中国語では直接結合する。

4. 2. 2 意味関係に関する考察

日本語の複合動詞と対応する中国語の表現の意味関係を考察する前に、まず日本語の複合動詞の意味関係について第2章で見た由本(2005)を引用しまとめる。中国語の複合動詞の意味については湯(1989)を引用しまとめる。

由本(2005)では、語彙的複合動詞は以下の並列関係、付帯状況・様態、手段関係、因果関係、補文関係のような語彙概念構造(LCS)を持っていると提案している。

(a)並列関係

泣き叫ぶ、恋い慕う、忌み嫌うなど

[[LCS 1] AND [LCS 2]]

並列関係として解釈される複合動詞は、LCS 合成の条件が特に厳しいため、生産性が低いと指摘している。そしてこのことが、「*恋い乱れる」、「*叫び称える」のように自動詞と他動詞の結合は許されないことや「*思いひらめく」、「*泣き驚く」のようにアスペクト素性が異なる事象の結合も見られないことにつながると指摘している。

(b)付帯状況・様態

持ち寄る、遊び暮らす、すすり泣くなど

[[LCS 2] WHILE [LCS 1]]

付帯状況・様態の意味関係は前項が後項の表す行為・変化進行の際の様態を表している。

(c)手段

切り倒す、吸い取る、言い負かすなど

[[LCS 2] BY [LCS 1]]

手段の意味関係は前項が後項の手段を表す。

(d)因果関係

泣きぬれる、溺れ死ぬ、流れ着くなど

[[LCS 2] FROM [LCS 1]]

因果の意味関係は前項が後項の原因を表す。

(e)補文関係

響き渡る、見逃す、書き落とすなど

[LCS 2… [LCS 1] …]

補文関係は前項が後項に対し、補足的な説明の役割を果たす。ところが、由本の分類では「勝ち誇る」、「辿り着く」など手段関係なのかそれとも因果関係なのかがはっきり分かれていないものもある。つまり、構成要素間の関連性を表す「手段」、「原因」などといった枠組みに明確に分類することは難しいと思われる。

中国語の複合動詞に関しては、湯(1989)では、以下のように述語と目的語関係の「述賓式複合動詞」、述語と補語関係の「述補式複合動詞」、修飾・被修飾関係の「偏正式複合動詞」、「並列式複合動詞」、主語と述語関係の「主述式複合動詞」に五分類している。

a. 「述賓式複合動詞」

充電 chong dian (充電する)、動員 dong yuan (動員する)

b. 「述補式複合動詞」

打破 da po (打ち破る)、改良 gai liang (改良する)

c. 「偏正式複合動詞」

遅到 chi dao (遅刻する)、熱愛 re ai (熱愛する)

d. 「並列式複合動詞」

発展 fa zhan (発展する/発展させる)、改變 gai bian (変える/変わる)

e. 「主謂式複合動詞」

面熟 mian shu (顔に見覚えがある)、头疼 tou teng (頭が痛い)

以上のことを踏まえ、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現は意味関係の面から考察すると以下の通りである。

日本語の「並列関係」の複合動詞は、例えば、「飛び散る→飞溅 fei jian」、「付き添う→陪伴 pei ban」のように、対応する中国語も前項と後項が対等に並列されていることが分かる。つまり、同類や類似の性質を持つ語が「動詞+動詞」の並列関係で対応する。「付

帯状況・様態関係」の複合動詞に対応する中国語は偏正関係、述補関係の複合動詞が多かった。

日本語の「手段関係」の複合動詞では、述語と補語関係の「述補関係」で対応する中国語が多かった。その中でも、特徴的なのは日本語は後項が動作そのものを表すのに対し、中国語の後項の場合、結果を表すものが多かった。例えば、「叩き折る→打斷 da duan」の場合、「斷 duan」は「折れる」の意味で、「叩いた結果折れる」の意味合いを持つ。

「撃ち殺す→杀死 sha si」の場合も同様に、「殺した結果死ぬ」と結果まで表すことができる。同じく「蹴飛ばす→踢开 ti kai」、「引っ張り上げる→拉到 la dao」も「蹴った結果離れる」、「引っ張った結果手に入れる」の意味合いを持つ。この時の「到 dao」は「動詞の補語として使われ、ある動作が結果を持つこと（『現代漢語詞典』、筆者訳）」を表す。

「因果関係」の複合動詞の場合は偏正関係で対応し、「補文関係」には述補関係で対応する表現が多かった。

以上、第4章では日本語の複合動詞に対応する中国語の表現を構成要素の面と意味関係の面から考察を行った。次の章では、学習者における複合動詞の習得状況を調べることで、学習者にとって習得しにくい複合動詞はどのようなものかを明らかにする。

第5章 学習者における複合動詞の習得状況

本章では、中国語を母語とする学習者にとって習得しにくい複合動詞はどのようなもので、複合動詞の習得状況は具体的にどのようなものか、どのような誤用が見られるのかを明らかにすることを目的として、学習者の意識、文の産出、母語の中国語に翻訳の観点から行った調査について述べる。調査においては、第3章で先行研究を踏まえた上に提案した複合動詞の5つのタイプを調査データの抽出および分析の枠組みとする。

5.1 調査内容および手順

5.1.1 調査目的および枠組み

日本語学習者の複合動詞に関する意味知識を考察する場合、重要なのは、学習者がどのようなプロセスを経て複合動詞を習得していくのかという習得プロセスに関する考察と、学習者が持っている複合動詞に関する意味知識はどのようなものであるかという習得内容に関する考察を行うことである。本研究で行う習得状況の考察は、学習者が持っている複合動詞に関する意味知識はどのようなものであるかという習得内容に着目したもので、なお習得内容に伴って明らかになった誤用について誤用分析を行うことで学習者の習得困難点を明らかにする。

調査は、金(2011)で行った「～出す」、「～切る」型複合動詞の習得に関する予備調査を踏まえ、後項動詞に限らず多様な前項動詞と後項動詞を持つ複合動詞全般を取り上げその習得状況について考察する。

具体的な調査課題は

- ① 学習者にとって習得しにくい複合動詞はどのようなものなのか。
- ② 具体的な習得状況はどのようなもので、習得困難点は何か。
- ③ 習得上どのような誤用が見られるのか。

である。以上の調査課題で明らかになった学習者の習得しにくい複合動詞、習得困難点、誤用をもとに日本語教育現場においてどのような複合動詞教育の支援を行うべきかについても提言を目指す。

第3章で述べたように本研究では、今まで行われてきた複合動詞の分類法や予備調査での問題点などを踏まえ、複合動詞を5つのタイプに分類している(表2)。本章ではこの分類を調査データの抽出および仮説の枠組みとし、データを分析する。

表 2 複合動詞の新しい分類

タイプ①	前項動詞あるいは後項動詞が単純動詞として使われる際の意味と変化がない複合動詞	例) 飛び立つ、読み始める
タイプ②	後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から文法的な意味に変化した複合動詞	例) 降り出す、読み切る
タイプ③	前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から抽象的な意味に変化した複合動詞	例) 踏み切る、結びつく
タイプ④	後項動詞が単純動詞として使われないもので、接辞化している複合動詞	例) 眠り込む、乗り込む
タイプ⑤	単純動詞として使われる際の意味から変化し、前項、後項ともに元の意味の手がかりがなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞	例) 落ち着く、取り成す

表 2 にみるように、タイプ①からタイプ⑤まで前項動詞および後項動詞各々の意味の変化により 5 つタイプに分類している。タイプ①の場合、「読み始める」のように前項動詞「読む」と後項動詞「始める」は複合される際、意味の変化がなく複合動詞「読み始める」の意味は「読み始める＝読む＋始める」となる。

タイプ②の場合、例えば「読み切る」はタイプ①の「読み始める」と同じ前項動詞「読む」だが、タイプ①のように「前項動詞＋後項動詞＝複合動詞全体の意味」にはならない。後項動詞「切る」が本義から意味の変化が生じ、複合動詞「読み切る」全体が「終わりまで読む、全部読む」の意味を表している。学習者にとって、「読み切る」のようなタイプ②は後項動詞が本義から意味の変化が起こり、タイプ①より習得が難しいと考えられる。タイプ③の場合は前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から抽象的な意味に変化したものであり、例えば「踏み切る」のように前項動詞「踏む」と後項動詞「切る」は単純動詞として使われる「足で体重をかけて上から押さえる」、「つながっているものを断ったり、付いているものを離したりする。刃物などでものを分け離す」の物理的な意味から「思い切って、物事に当たる。心を決めて物事に乗り出す」という状況的な意味に変化し、「踏み切る」複合動詞全体で抽象的な意味に変化している。タイプ②の「読み切る」と同様に「切る」を後項動詞として複合された「踏み切る」だが、抽象的な意味へ変化したため、学習者にとって推測が難しく習得もしにくいと考えられる。

タイプ④の場合は「眠り込む」、「乗り込む」のように後項動詞が単純動詞として使われ

ないもので、接辞化している複合動詞であり、学習者は前項動詞については理解が可能であるが、単純動詞として使われない後項動詞が後ろにつくことで、理解が難しくなると考えられる。ところが、学習者は「～込む」のような本来単純動詞として使われないがさまざまな動詞の後ろに組み合わせて接辞的機能を果たすようなこの種の複合動詞については、一旦接辞化を理解できれば、前項動詞が異なっても他の同様の接辞化した後項動詞も理解が可能であると考えられる。

タイプ⑤の場合は単純動詞として使われる際の意味から変化し、前項、後項ともに元の意味の手がかりがなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞であり、これらの複合動詞は前項動詞および後項動詞が元の意味から完全に変化し、複合動詞全体の意味がたどれなく、慣用句的な意味機能を持っている。「落ち着く」、「取り成す」のような複合動詞がこの種に属しているが、「落ち着く」の場合は、前項動詞「落ちる」、「着く」はそれぞれ複合動詞全体「落ち着く」の組み合わせの際タイプ②やタイプ③のように単純動詞が本義から意味変化がたどれるほどの意味変化ではなく、完全に意味変化をなし意味がたどれないのである。この種の複合動詞は、前項動詞の「落ちる」、「取る」、そして後項動詞「着く」、「成す」といずれも中上級レベルの語彙として学習されるが、それら前項動詞と後項動詞が複合された「落ち着く」、「取り成す」などは意味が完全に理解できないわけである。ただし、「落ち着く」、「取り成す」のようなタイプ⑤の類の複合動詞は学習者に一度インプットされ理解ができ、その意味を覚え習得できれば誤用が少ないと考えられる。

以上を踏まえると、複合動詞の前項動詞または後項動詞の意味変化の度合いはタイプ①→タイプ②→タイプ③→タイプ④→タイプ⑤といく順にその度合いは大きいと言えよう。すなわち学習者にとっては、タイプ①→タイプ②→タイプ③→タイプ④→タイプ⑤といく順に習得困難度が増すと考えられる。従って本調査では、第3章で以上のような複合動詞の新しいタイプ分類を枠組みとし、「学習者にとって習得しにくい複合動詞はどのようなものなのか」という調査課題①を明らかにするためまず、次のような仮説を立て、調査を実施することで検証を行うことにした。

仮 説: 複合動詞の前項と後項について各々の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得はそれに応じて難しくなる。

5. 1. 2 調査内容および手順

(1) 調査対象者

中国の北部の大学で日本語を専攻している上級レベルの学習者 30 名である。調査に協力した対象者は、外国語教育を主に実施している外国語専門の大学に在学中の四年生で、学習者全員日本留学の経験がなく、新しい日本語能力試験 N1 に合格している学習者である。中国国内で日本語を専攻している学習者の場合、一般的に 3 年生の際日本語能力試験 N1、N2 などを受験し、3 年生の学習者でも N1 の資格を持っている場合があるが、本調査では、いわゆる複合動詞についてすでに学習し、かつ日本語が熟達したと思われる高学年の四年生を対象とした。

(2) 調査内容

調査内容は大きくフェイスシート、文産出テスト、日中翻訳テスト、テスト終了後の意識調査という 4 つに分けられる。(付録 2 参照)

フェイスシートには、日本語学習歴、日本語能力、日本留学経験などを記入してもらった。そして、フェイスシートの最後の項目には「複合動詞とは何か、知っていますか。知っている複合動詞を自由に挙げてください」という項目を設け(図 4)、学習者に自由にピックアップしてもらった。(詳しくは付録 2-1 を参照)

1. あなた自身について教えてください。	
氏名:	_____ 学年: _____ 年級 _____ 組
連絡先: 携帯	_____
E-Mail	_____
2. 日本語能力などについてお聞きします。*「有・無」は当てはまるものに○をしてください。	
日本語学習歴: _____ 年	日本語能力試験: 有 (N _____) ・ 無 (旧試験 _____ 級)
日本短期留学経験: 有 ・ 無	
(滞在期間 20 _____ 年 _____ 月 ~ 20 _____ 年 _____ 月)	
3. 複合動詞とは何か、知っていますか。知っている複合動詞をご自由に挙げてください。*5~10 個程度	

図 4. フェイスシート形式

その目的は、のちに行った複合動詞を用いたテストを実施する前に、学習者はどのような複合動詞を自身は知っているか自己判断しているかを考察しようとするものである。また、学習者の自己判断と実際の運用能力の間に何か差があるのかどうかを考察しようとする設問を示したものである。

文産出テストは、学習者に 30 語の複合動詞を提示し、それらの複合動詞を用いて、短文を作らせるテストである。下の図 5 のように、学習者が「彼は泣き出した」のような文を産出した場合、その語を正しく理解してきたか判断が難しくなるため、できるだけ具体的状況が分かる短文を作るよう指示した。学習者が複合動詞を使って実際にどのような文を産出するか、またどのような誤用が見られるかを明らかにすることを目的とする。（詳しくは付録 2-2 を参照）

氏名 (_____)

テスト 1

次の語を使って短文を作ってください。(辞書は使わないこと。状況が分かるよう具体的に作ってください。)

例：泣き出す

× 彼は泣き出した。

○ 1 歳になったばかりの姪子は動物のぬいぐるみを見たたん、わーと泣き出しました。

1. 持ち続ける _____

2. 売り出す _____

図 5. 文産出テスト形式

日中翻訳テストは、複合動詞が含まれている文脈を学習者に提示し、文脈をもとに文脈に現れた複合動詞を中国語に訳すテストである（図 6）。文産出テストと同じく 30 問あり（詳しくは付録 2-3 を参照）、文脈で用いた複合動詞は、文産出テストで使用した複合動詞と同様の 30 語である。学習者が複合動詞を含んだ日本語の文を正しく理解し、中国語に訳せるかどうかを測定しようとする理解度テストである。テストで提示した文脈は、主に村上春樹の小説『風の歌を聴け』の文脈を使用し、学習者に文脈中の複合動詞を翻訳してもらうことにした。例えば「鼠はまだ小説を書き続けている。」の文脈では、主人公の「鼠」を「彼」に置き換えて「彼はまだ小説を書き続けている。」と提示するなど、適宜修正を加えた。中には小説の文脈のほか、作例も加えた。

氏名 (_____)

テスト 2

次の文の下線の複合動詞を文脈の内容に沿って、中国語に訳して下さい。

1. あらゆるものから何かを学び取ろうとする姿勢を持ち続ける限り、年老いることはそれほどの苦痛ではない。(_____)

2. 彼は戦争の始まる直前に苦勞して化学薬品の工場を手に入れ、虫よけの軟膏を売り出した。(_____)

図 6. 日中翻訳テスト形式

文産出テストで産出した文が誤用であるかどうかは日本語母語話者 2 名（日本語教師、国語教師）に依頼しネイティブチェックを行った。1 名は日本語教授歴 10 年で、主に中国の大学で日本語を教えている。1 名は国語教授歴 20 年で、日本の高等学校で国語を担当している。学習者が産出した文について学習者が複合動詞を正しく理解し、正しい文として成り立っているかどうかについて判断してもらった。

特に、学習者がある複合動詞について本当にその意味で理解し短文を作っているのかの判断が難しい場合は、学習者に連絡を取り、産出した文について意味の確認の作業を行った。

日中翻訳テストでは、誤訳であるかどうかは筆者が行い、主に『新日漢辞典【増訂版】』（2002）、『中国語大辞典』（1994）などを参考にした。

（3）テストで使用した複合動詞

文産出テストおよび翻訳テストで使用した 30 語の複合動詞は、以下の手順で抽出した。

- i. 村上春樹の小説『風の歌を聴け』から取り出した複合動詞 242 語について、書き言葉のデータベースである『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』（天野・近藤 2000）を用いて、それぞれの複合動詞の使用頻度を調べる。
- ii. 村上春樹の小説『風の歌を聴け』から取り出した複合動詞 242 語を本研究における複合動詞の 5 つの意味分類に基づいて、意味ごとにリストアップする。
- iii. 意味ごとにリストアップした 242 語を i で調べた使用頻度に基づいて、各意味で使用頻度の高い順で 6 語ずつ複合動詞を抽出する。

『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』は 14 年間に発行された朝日新聞の記事データに対し、形態素解析を行って単語を切り分け抽出した 36 万語が含まれたデータであり、ニュース記事のほか、経済面、文芸面など多様なジャンルにおける記事が含まれ、広い分野で使用される語が現れる可能性が高いと考えられる。そこで、今回の調査では、村上春樹の小説『風の歌を聴け』で抽出した複合動詞を『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』を用いて、その使用頻度を調べることにした。

また、意味分類におけるタイプ⑤に該当する複合動詞が『風の歌を聴け』から取り出した 242 語中 2 語しかなかったため、残りの 4 語は先行研究で取り上げている複合動詞を

上述した手順で調べ、追加した。

テストで使用した複合動詞 30 語は表 3 の通りである。

表 3 テストで使用した複合動詞 (計 30 語)

タイプ①	持ち続ける、やり直す、書き続ける、受け取る、振り返る、生み出す
タイプ②	売り出す、思い出す、言い出す、流れ出す、向い合う、重なり合う
タイプ③	結び付く、取り付ける、成り立つ、盛り上がる、取り巻く、語りかける
タイプ④	落ち込む、追い込む、乗り込む、突っ込む、入り込む、詰め込む
タイプ⑤	打ち切る、落ち着く、取り成す、出し抜く、当て付ける、仕付ける

テストで使用した合計 30 語の複合動詞に関して、前項および後項となる単純動詞は学習者にとってすでに学習したことがある既習語であることは確認済である。

(4) 調査の手順

調査は調査内容に沿って、以下のような流れで行った。

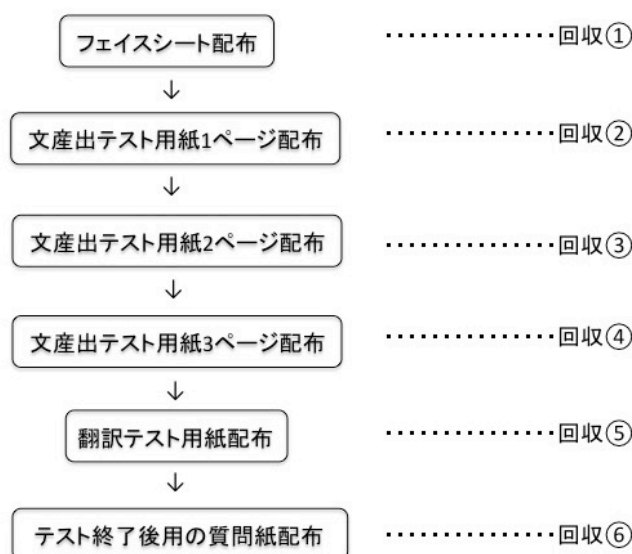


図 7. 調査の流れ

まず、フェイスシートを学習者に配布し、記入してもらい第 1 回目の回収を行う。回収が終わったら、文産出テストの用紙の最初の 1 ページを配布する。文産出テストの用紙は合計 3 ページである (付録 2-2 を参照)。文産出テストは、選択肢で当てはまるものを選ぶなどの選択テストとは違い、短文を産出するという学習者にとって極めて負担のかかる

作業である。尚更今回 30 語という極めて多い複合動詞を使って学習者が一つ一つ計 30 の短文を産出しなければならない。例えば、一回のテストで 10 個ずつの複合動詞を提示し、一日二日程度日にちをおいて実施する方法も考えられるが、分からなかった複合動詞を辞書で調べたり質問したり復習したりして、正しく産出するかどうかに影響が出てくる可能性が高い。故に、今回は限られた時間（短文を産出するのに十分な時間）を学習者に与え、1 ページずつ配布し、回収するという手順を繰り返し行った。それは学習者が一遍に解答用紙を受け取った時のプレッシャーや負担などを少しでも減少させるためでもあり、また回答率を保つことにもつながると考えられる。

文産出テストが終わり、回収が済んだ後、次は翻訳テストの用紙を配布した。翻訳テストは文産出テストと同様に 30 問であるが、翻訳テストの場合用紙は 2 ページ綴りにしている。それは提示されている文脈の中で使われている複合動詞を中国語に訳すということで、文産出テストに比べて比較的容易であるため、一斉配布し回収を行った。

二つのテスト全てが終了した後、テスト終了後用の質問紙（図 8）を配布し、回収を行った（詳しくは付録 2-4 を参照）。この質問紙は学習者が実際に複合動詞の文産出および翻訳テストを終え、複合動詞についての意識や気づいた点などを伺うことを目的としたものである。

テスト終了後	
氏名： _____	学年： _____ 年級 _____ 組
連絡先： 携帯 _____	
E-Mail _____	
該当する番号には○をし、 _____ のある場合や質問には具体的に書いてください。	
Q 1 テストが終わりました。複合動詞について、難しいこと、よくわからないこと、もっと知りたいことがあれば自由に書いてください。	
Q 2 複合動詞について授業で教えてもらいましたか。1つ選んで○をつけてください。	
1. 教えてもらった (→Q 2-1、Q 2-2へ)	
2. 教えてもらっていない (→Q 3へ)	
3. 覚えていない (→Q 3へ)	

図 8. テスト終了後の質問紙形式

学習者には質問紙に回答し、産出および翻訳テストの内容を十分理解し、解答するのに文脈を読み取るのに十分な時間を与えた。なお、学習者の質問紙記入時やテスト進行時、筆者がその場において辞書の使用禁止や隣同士との私語、相談などを禁止するよう呼びかけた。

5. 2 調査結果の分析と考察

文産出テストを実施する前に、学習者自身はどのような複合動詞を知っていると自己判断しているのかを明らかにするため、知っている複合動詞を自由に挙げてもらった結果、学習者は合計 172 語（異なり語数は 91 語）の複合動詞を挙げた。その他、「引き渡し」、「割り合い」、「問い合わせ」のような名詞化したものを挙げた学習者や「間に合う」のような「動詞+動詞」ではないものも挙げている。

表 4 知っている与自己判断した複合動詞上位 5 位

第 1 位	見直す(10)
第 2 位	立ち並ぶ(8)
第 3 位	受け取る(6)
第 4 位	書き直す(5)、乗り込む(5)、話し合う(5)
第 5 位	追いかける(4)、考え出す(4)、考え直す(4)、付き合う(4)、 取り出す(4)、引き受ける(4)、読み切る(4)

本研究における複合動詞の意味分類に基づいて、上位 5 位に挙げた複合動詞をみると、第 1 位の「見直す」はタイプ①、第 2 位の「立ち並ぶ」はタイプ①、第 3 位の「受け取る」もタイプ①である。

また、第 4 位の「書き直す」はタイプ①、「乗り込む」はタイプ④、「話し合う」はタイプ②、第 5 位の「追いかける」はタイプ③、「考え出す」はタイプ②、「考え直す」はタイプ①、「付き合う」はタイプ③、「取り出す」はタイプ①、「引き受ける」はタイプ③、「読み切る」はタイプ②である。

その他にも学習者は以下のような（異なり語数 91 語、延べ語数 172 語）複合動詞を知っていると挙げている。

聞き入る、差し上げる、使い切る、取り上げる、走り出す、やり直す、売れ切る、躍りかかる、思い出す、聞き入れる、聞き取る、仕上がる、座り込む、立ち上がる、辿り着く、飛び出す、取り入れる、引き上げる、踏み出す、申し込む、読みかける、仰ぎ見る、言い出す、入れ込む、動き始める、打ち合う、打ち切る、生み出す、追い込む、追いつける、追い詰める、送り出す、押しかける、押し出す、落ち込む、躍り上がる、思い込む、書き上げる、書き取る、書き始める、聞きかえす、

切り倒す、組み合わせる、組み込む、組み立てる、差し出す、澄み通る、助け合う、立ち上げる、立ち入る、立ち下げる、食べ終わる、食べ始める、使いこなす、作り出す、突っ込む、跳び上がる、飛び上がる、飛び歩く、飛び込む、飛び散る、取り合う、取り扱う、とりあわせる、取りかかる、取り組む、習い始める、乗り越える、跳ね飛ばす、引き出す、引き取る、ひっかかる、勉強しはじめる、向い合う、やりつける、呼びかける、呼び出す、寄りかかる（挙げた複合動詞のタイプ分類および度数は付録3を参照）

「動き始める」、「習い始める」といった統語的複合動詞のAspectを表す後項動詞「～始める」の他にも、「生み出す」、「取り合う」、「使いこなす」といった後項動詞「出す」や「合う」、「こなす」などを持つさまざまな種類の統語的複合動詞を挙げている。

語彙的なものを見てみると、例えば、「仰ぎ見る」、「切り倒す」、「組み立てる」、「澄み通る」、「跳ね飛ばす」、「引き取る」、「飛び歩く」など多様なものを挙げている。すなわち、これらの複合動詞は学習者が習得できたとは言い難いが、学習者にとって馴染みがあることから、学習者自身が知っているとして自己判断したと言えよう。

学習者が挙げた複合動詞の中には、前述した「引き渡し」、「割り合い」、「問い合わせ」のような名詞化したものや「間に合う」のような「動詞+動詞」ではないものの他、「売り切る」を「売れ切る」と誤答した学習者もいた。「*追い押す」、「*立ち下げる」といった前項動詞と後項動詞の組み合わせが不可能なものを二つ挙げているが、前項動詞と後項動詞の組み合わせにおいてはほぼ組み合わせ可能な正しい複合動詞が挙げている。

「*聞き帰る」、「*見向かう」なども「*追い押す」と同様に前項動詞と後項動詞の組み合わせが不可能である。「*聞き帰る」、「*見向かう」などにこれについて由本(1996)および Matsumoto(1996)では、後項が状態変化を表し前項がそれを引き起こす原因となる出来事を表す原因複合動詞においては、結果を表す後項動詞が非動作主的でなければならないとしている。例えば、「焼け死ぬ（非動作主的+非動作主的）」、「泣き沈む（動作主的+非動作主的）」のように非動作主的な動詞を後項とするものは存在するが、「*疲れ座る（非動作主的+動作主的）」、「*聞き帰る（動作主的+動作主的）」のような動作主的な動詞を後項とする複合動詞は存在しないということである。

「*立ち下げる」の場合、「立ち上げる」は組み合わせ可能である。同様に、「持ち上げる」は組み合わせ可能で、「*持ち下げる」は不可能である。しかし、「見下げる」、「見上げる」は両方可能で、前項動詞の方向性と関係があると考えられる。

5. 2. 1 文産出テストの結果と分析

文産出テストでは、本研究における複合動詞の 5 つの意味分類に基づいて、複合動詞 30 語を学習者に提示し、短文を作るように求めた。提示された複合動詞を使って正しい文が作れるかどうかを考察しようとしたもので、学習者の複合動詞の実際の運用力を測定することを目的としている。文産出テストで取り上げた 30 語の複合動詞の正答率は次の通りである。

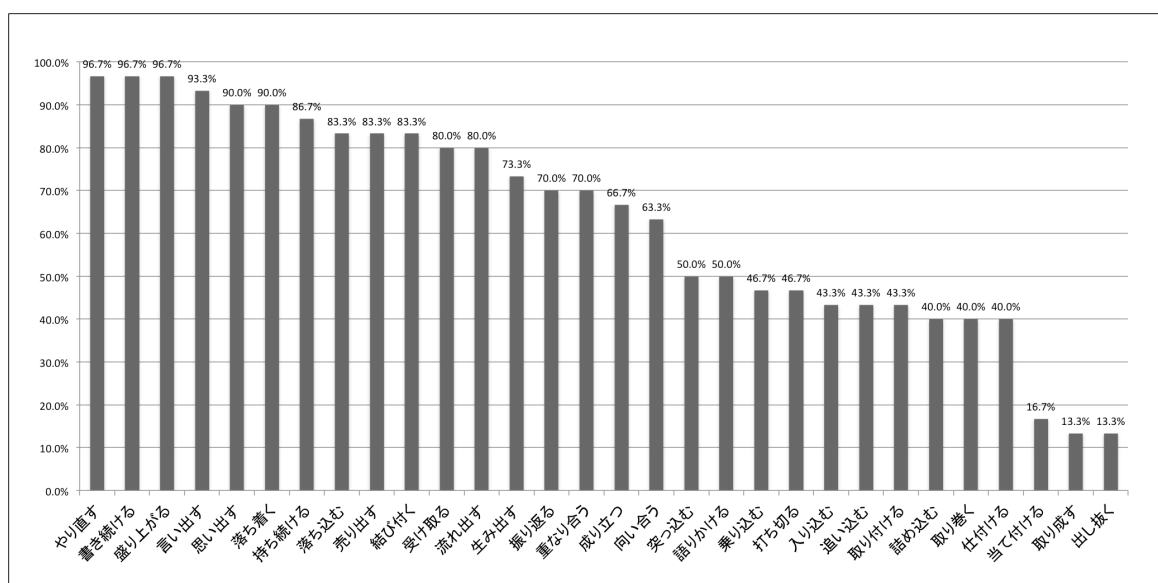


図 9. 文産出テストにおける 30 語の正答率

図 9 から学習者の文産出テストの結果を全体的に考察すると、文産出テストの平均正答率は 63.0%であり、50%を上回っていた。このことは、全体的に見ると学習者がこれらの複合動詞の習得において、運用の面、特に複合動詞を使って文を産出するという点では、それほど高くないことが窺える。

正答率が最も高いのは「やり直す」、「書き続ける」、「盛り上がる」の 3 語で、正答率は 96.7%であった。「やり直す」、「書き続ける」とともに、タイプ①で、これらの複合動詞は学習者の習得が進んでいると言えよう。

その次に高いのは、「言い出す」が 93.3%であった。意味分類タイプ②である。

意味分類タイプ①～⑤まで、各意味分類の中で、正答率が最も高いのは、タイプ①では「やり直す」、「書き続ける」が 96.7%であり、タイプ②では「言い出す」が 93.3%であり、タイプ③では「盛り上がる」が 96.7%であり、タイプ④では「落ち込む」が 83.3%であり、タイプ⑤では「落ち着く」が 90.0%であった。

意味分類タイプ①～⑤まで、各意味分類の中で、正答率が最も低いのは、タイプ①では「振り返る」が70.0%であり、タイプ②では「向い合う」が63.3%であり、タイプ③では「取り巻く」が40.0%であり、タイプ④では「詰め込む」が40.0%であり、タイプ⑤では「取り成す」と「出し抜く」がそれぞれ13.3%であり最も低かった。

文産出テストでの複合動詞30語の各意味分類の平均正答率は次の通りである。

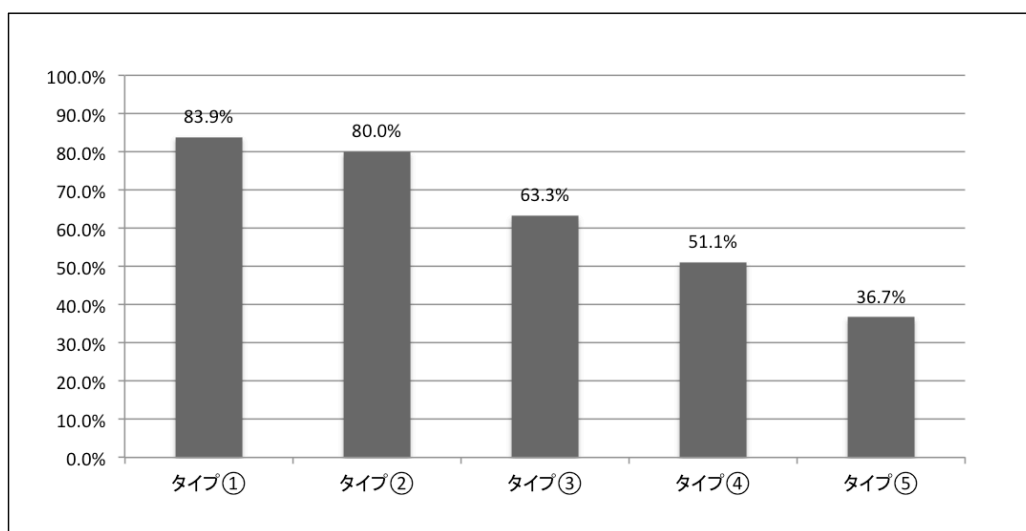


図10. 文産出テストにおける各意味分類の平均正答率

文産出テストにおける複合動詞の各意味分類の平均正答率は、タイプ①が最も高く、83.9%であり、その次にタイプ②で80.0%であった。平均正答率が最も低いのは意味分類のタイプ⑤で、36.7%であった。

図から分かるように、平均正答率は高い順からタイプ①、タイプ②、タイプ③、タイプ④、タイプ⑤となり、すなわち、複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得が更に難しいことが明らかになり、仮説が検証できた。

5. 2. 2 翻訳テストの結果と分析

翻訳テストでは、本研究における複合動詞の5つの意味分類に基づいて、文産出テストで使用した30語の複合動詞が含まれた日本語の文を学習者に提示し、それらの複合動詞を中国語に翻訳させたもので、学習者がある文脈の中で、複合動詞の意味を正しく理解できているかどうかを測定することを目的とする。翻訳テストで取り上げた文脈における複合動詞30語の正答率は次の通りである。

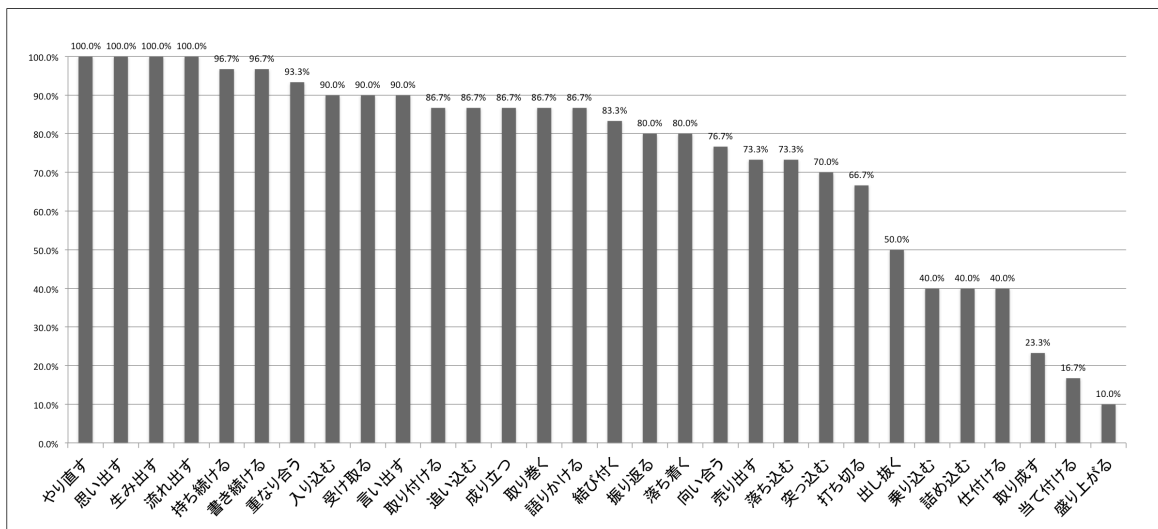


図 11. 翻訳テストにおける 30 語の正答率

図 11 から学習者の翻訳テストの結果を全体的に考察すると、翻訳テストの平均正答率は 73.8%であり、50%を上回っていた。文産出テストの平均正答率 63.0%より高く、学習者はこれらの複合動詞の習得において、特に複合動詞を使って文を産出するより、文脈の中に含まれている複合動詞を理解するという理解能力のほうが高いことが窺える。

正答率が最も高いのは「やり直す」、「思い出す」、「生み出す」、「流れ出す」の 4 語で、正答率は 100%であった。「やり直す」、「生み出す」は意味分類のタイプ①で、「思い出す」、「流れ出す」はタイプ②で、これらの複合動詞について、学習者は理解がよくできている。

その次に高いのは、「持ち続ける」、「書き続ける」がそれぞれ 96.7%であった。これら意味分類タイプ①であり、学習者にとってよく理解でき、習得が進んだと言えよう。「やり直す」は文産出テストにおいても正答率(96.7%)がもっとも高く、学習者にとって一番習得が進んでいる複合動詞である。

意味分類タイプ①～⑤まで、各意味分類の中で、正答率が最も高いのは、タイプ①では「やり直す」、「生み出す」が 100%であり、タイプ②では「思い出す」、「流れ出す」が 100%であり、タイプ③では「取り付ける」、「成り立つ」、「取り巻く」、「語りかける」がそれぞれ 86.7%であり、タイプ④では「入り込む」が 90.0%であり、タイプ⑤では「落ち着く」が 80.0%であった。意味分類タイプ①～⑤まで、各意味分類の中で、正答率が最も低いのは、タイプ①では「振り返る」が 80.0%であり、タイプ②では「売り出す」が 73.3%であり、タイプ③では「盛り上がる」が 10.0%であり、タイプ④では「詰め込む」、「乗り込む」がそれぞれ 40.0%で最も低く、タイプ⑤では「当て付ける」が 16.7%で最も低かった。

翻訳テストでの複合動詞 30 語の各意味分類の平均正答率は次の通りである。

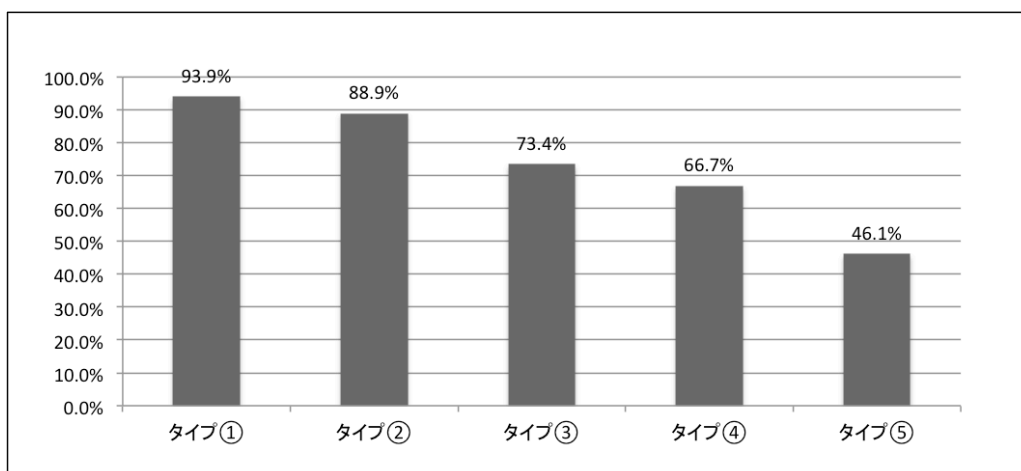


図 12. 翻訳テストにおける各意味分類の平均正答率

翻訳テストにおける複合動詞の各意味分類の平均正答率は、タイプ①が最も高く、93.9%であり、その次にタイプ②で 88.9%であった。平均正答率が最も低いのは意味分類のタイプ⑤で、46.1%であった。翻訳テストにおいても、各意味分類の平均正答率は高い順からタイプ①、タイプ②、タイプ③、タイプ④、タイプ⑤となり、すなわち、複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得が更に難しいことが明らかになり、仮説が検証できた。

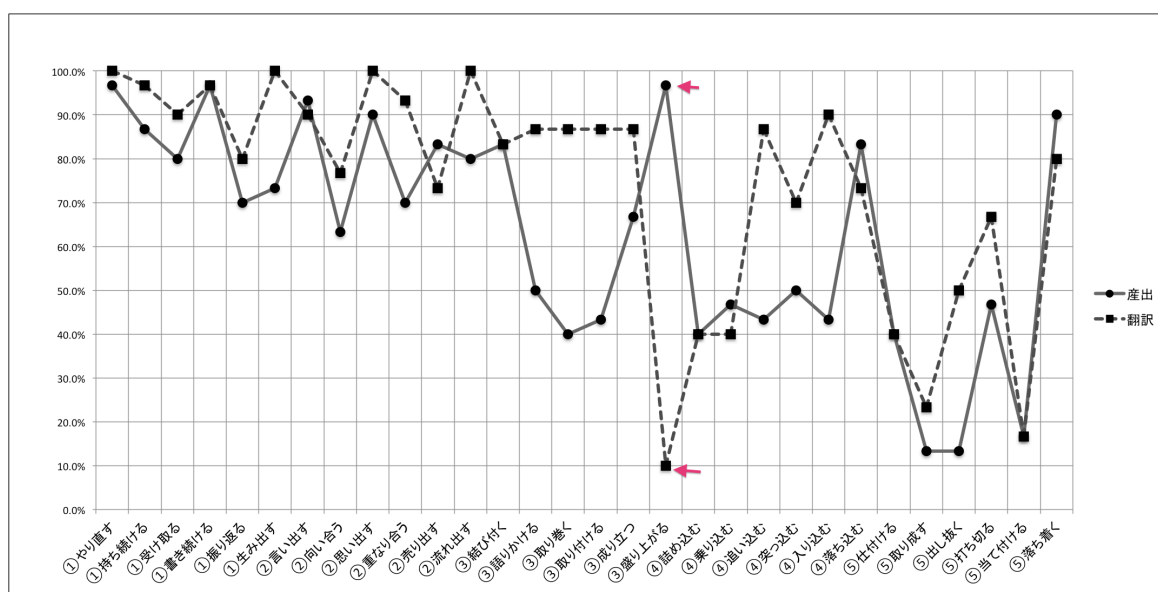
「盛り上がる」は文産出テストおよび翻訳テストでは複合動詞の意味分類のタイプ③に分類し、テストを行っていた。ところが、翻訳テストでは「盛り上がる」を「自分でカットしたらしい前髪は無造作に広い額に落ちかかり、そこからわずかに盛り上がった頬にかけて微かなニキビの痕跡が残っている。」といった文脈で提示したため、意味分類のタイプ①の意味で捉えたことになる。従って、翻訳テストでは各意味分類の正答率に影響があることを認めなければならない。「盛り上がる」を意味分類のタイプ①にすると、意味ごとに複合動詞の語数はタイプ①が 7 語、タイプ②が 6 語、タイプ③が 5 語、タイプ④が 6 語、タイプ⑤が 6 語となる。それに従い平均正答率を求めると以下ようになる。

翻訳テストにおける各意味分類の平均正答率				
タイプ②	タイプ③	タイプ①	タイプ④	タイプ⑤
88.9%	86.0%	81.9%	66.7%	46.1%

すなわち、「盛り上がる」はタイプ①に入り、翻訳テストにおける各意味分類の平均正答率はタイプ②、タイプ③、タイプ①、タイプ④、タイプ⑤となっている。タイプ①を除

くと、平均正答率はタイプ②→タイプ③→タイプ④→タイプ⑤となり、翻訳テストにおいて複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得が難しいと言えるだろう。

今回、翻訳テストにおける「盛り上がる」の文脈の提示の仕方、翻訳テストにおいて「盛り上がる」をタイプ③の分類に分類しまとめるのは強引なところもあるが、他の 29 語の複合動詞の両テストの平均正答率を以下のようにまとめることにする。



※番号はそれぞれのタイプを表す。

図 13. 両テストにおける平均正答率

図 13 では、複合動詞をそれぞれのタイプ順に並べてみた。図からも分かるように、学習者の産出と翻訳の正答率の差が最も大きいのはタイプ③の「盛り上がる」である。「盛り上がる」について学習者はほぼ、「氣勢が盛んになる」の意味で正しい短文を産出している反面、翻訳テストにおいては「盛り上がる」の物理的意味「盛ったように高くなる。うずたかくなる。」で提示された文脈においてほぼ、「氣勢が盛んになる」の意味で翻訳していた。(詳しくは第 6 章で述べる) その次に正答率の差が大きかったのは、「入り込む」、「追い込む」、「取り付ける」、「取り巻く」で、タイプ④とタイプ③に属する。

なお、図からみて分かるように、タイプ①の 6 語は産出と翻訳の間の正答率の差はそれほど大きくなく、タイプ②からタイプ③、タイプ④へ移るにつれ正答率の差が激しいと言えよう。それがタイプ⑤の場合は、産出と翻訳の間の正答率の差は激しくなく、正答率が産出・翻訳ともに高い場合もあれば、産出・翻訳ともに低い場合もあった。このことから、

タイプ①、タイプ②、タイプ③、タイプ④の順に複合動詞における産出と文脈での理解のギャップが激しくなると考えられる。一方、タイプ⑤は全体的に平均正答率が低いが、学習者はタイプ⑤のような複合動詞は文の産出と理解の程度に差がないことが分かる。

5. 3 テスト終了後の質問紙の考察

文産出と日中翻訳の二つのテスト全てが終了した後、学習者に再度質問紙を配布し、回答を求めた。この質問紙は学習者が実際に複合動詞の文産出および翻訳テストを終え、複合動詞について抱えている意識や気づいた点などを明らかにすることを目的としたものである。本質問紙では5つの設問により、主に学習者の複合動詞の使用と学習に関する質問を行った。(詳しくは付録2-4を参照)以下、その結果を考察する。

5. 3. 1 複合動詞の使用について

まず、複合動詞の使用について、学習者が普段日本語で文章を書く時や日本語で会話をする時どの程度複合動詞を使うかを問うた。その結果、次のような回答を得た。

【Q3 日本語で文章を書く時や会話をする時、複合動詞を使いますか。】

【はい：15名　いいえ：9名　無回答：6名】

「はい」と答えた学習者は15名で、6割を占めており、「いいえ」と答えた学習者は9名で4割を占めていた。「使う」と答えた学習者は「使わない」と答えた学習者より多いが、全体的にみると日本語で文章を書く時や会話をする時、複合動詞をそれほど頻繁に使わない傾向があることが分かる。このことは学習者における複合動詞の文産出テストの結果をも裏付けることができる。文産出テストの平均正答率は63.0%で、学習者は複合動詞を使って文を産出する運用能力がそれほど高くないことが分かった。

【Q3 はい→どんな時よく使いますか。】

複合動詞をどんな時によく使うかを聞いたところ、「作文を書く時」、「文章を書く時」や「法律の中によく使われます」（「」内は学習者の回答のまま、以下同様）と回答した学習者が多く、主に文章を書く時に使っていることが窺える。母語の中国語環境で日本語を学ぶ多くの学習者にとって、日本語を使って会話する機会は概ね「会話」の授業だけで、その他の「基礎日本語（日本での「総合日本語」に相当）」「作文」「聴解」などの授業では、中国語で授業が行われることが多い。従って、複合動詞を口頭で使うチャンスは、「話す」場面ではなく「書く」場面が多いということが分かる。

このような使用場面を挙げたほかに、「動詞だけで十分に表現できない時」、「いろいろ

な意味を表す時」、「複雑な気持ちを表す時」、「二つの意味を表す時」のように、複合動詞の特徴を意識した回答もあった。これは、単純動詞に比べ豊かな表現ができる複合動詞の特徴を学習者も意識していて、単純動詞だけでは十分に表現できない時やさまざまな意味を表したい時は複合動詞を使おうとする意識を持っていることが分かる。

他方、複合動詞を使わないと答えた学習者は、使わない理由として以下のように述べていた。

【Q3 (いいえ) 使わない→その理由は？】

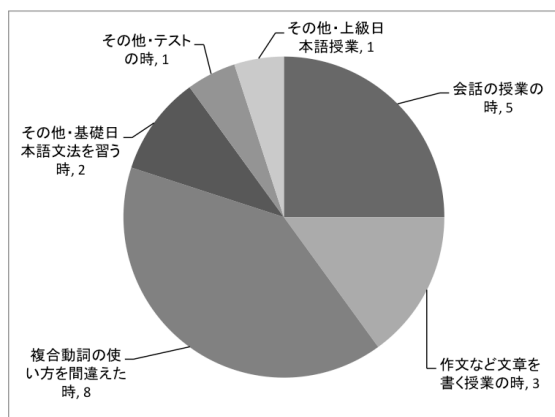
まず、学習者自ら複合動詞を十分に学習できていないと認識している状況を反映する回答を得た。例えば、「身につけないから」「上手じゃないから」「よく知らない、できるだけ使わない」(学習者の回答のまま、以下同様) 等である。

また、「直ちに覚えることがちょっと無理だ」、「よく覚えません」等、記憶が難しいという回答もあった。その他、複合動詞の使い方が分からないので使わないと述べた学習者もいた。「使いにくいから」「使い方は難しいので」「意識の中でそのような使い方を自然に使えない」などがそれに当たる。

以上のことから、複合動詞を使わない理由として、複合動詞が十分に学習できていないこと、覚えにくいということ、そして、使い方が分からず自然に使えないという3点にまとめることができる。それでは、学習者は授業で複合動詞の何について、どのような場面で、どのように指導を受けているのだろうか。

授業の中で、複合動詞について教えてもらったかどうかについて質問したところ、「教えてもらった」と答えた学習者が20名で、「教えてもらっていない」と答えた学習者が5名、「覚えていない」と答えた学習者が5名であった。ほとんどの学習者は授業で教えてもらったと答えていた。更に、具体的にどのような場面で教えてもらったかを聞いたところ、図14の通りの回答を得た。

【Q2-1 授業ではどのような場面で教えてもらいましたか。】



複合動詞の使い方を間違えた時	8名
会話の授業の時	5名
作文など文章を書く授業の時	3名
その他・基礎日本語文法を習う時	2名
その他・テストの時	1名
その他・上級日本語授業	1名
合計	20名

図 14. どのような場面で教えてもらったか

「会話」、「基礎日本語文法」、「上級日本語」、「作文」といったさまざまな授業で複合動詞について教えてもらっていた。図 14 でも分かるように、「複合動詞の使い方を間違えた時」に教えてもらったと答えた学習者は 8 名であり、授業中学習項目として複合動詞を教えてもらう他に、誤用を犯した時に指導を受けていることが多いと言える。

授業中、具体的に複合動詞の何について、どのように教えてもらったかの質問については以下のことが明らかになった。

【Q2-2 複合動詞の何についてどのように教えてもらいましたか。】

表 5 何についてどのように教えてもらったか

何について (回答数)	どのように教えてもらったか (学習者の回答のまま)
文章中の複合動詞の意味 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複合動詞を授業の本文に入れてその実際に持っている意味を教える ・ 文章とかテストとか、複合動詞に会う。その時、先生はその単語は複合動詞だと言った。その意味も教えてもらった。 ・ 単語と文章を説明してくれた時、複合動詞の使い方を教えました。
類似の複合動詞 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複合動詞に似ている動詞もちょっと紹介して下さった。 ・ 「～かける」と「～かかる」からなった複合動詞の違いについて勉強した。 ・ 文章を書く授業で、「思い出す」と「考え出す」の違いを教えてもらいました。
後ろにつく後項動詞 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「出す」という単語を習うとき、それについての複合動詞「言い出す」とか ・ 後ろの続く動詞の形式について、そして普段どのような場で使うかについて

意味、使い方、読み方 (2、2、2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複合動詞は文章の中に意味と使い方が合っているかどうか、意味と使い方と句を造った。 ・ 複合動詞の発音と意味、例えば、思い出す→おもいだす→想起来了。
接続の方法、複合要素 (1、1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 接続の方法 ・ 複合動詞の品詞分析について、複合要素や複合された語

表 5 のように、文章中に現れる複合動詞の意味、類似の複合動詞、後ろにつく後項動詞、複合動詞自体の意味や使い方、読み方、接続の方法、複合される要素など、様々なことについて教えてもらっていることが分かる。中でも、文章中の複合動詞の意味（その文脈の中での意味）、類似の複合動詞（「思い出す」と「考え出す」等）、後項動詞（「～かかる」と「～かける」等自他対を持っている後項動詞の違い等）の 3 つのカテゴリーについて教えてもらったと回答した学習者が多かった。

以上に挙げた回答以外、「文法の授業で先生がただ簡単に説明してくれました。」「作文授業で、もっと複合動詞を使えば意味伝達にいい役が立つ」と述べた学習者もいた。図 14 で見た、学習項目としての指導も含まれていることが窺える。

それでは、学習者はよく分からない複合動詞がある場合、先生に質問したり、辞書を調べたりするのだろうか。

【Q4 先生に質問したり、辞書で調べたりしましたか。】

【した：21 名 しなかった：5 名 覚えていない：3 名 無回答：1 名】

教師に質問したり、辞書で調べたりしたと回答した学習者は 21 名で、全体の 8 割を占めていた。具体的にどのような質問をしたり、調べたりしたかを聞いた。

【Q4-1 どのような質問をしたり、調べたりしましたか。】

- ・ 意味分からない単語とか、おなじ語尾がある単語とか、仰ぎ見る、打ち見る
- ・ 違った複合動詞はどんな違う意味と同じ意味がありますか。
- ・ 「かかる」、「かける」の違いについて質問した。
- ・ 似ている言葉との違いは何か。

複合動詞の意味、類似の複合動詞について質問したり、調べたりしていると述べた学習者が多かった。同様に、「（「押し込む」を例にあげて）「V ます+込む」の場合の動詞がけっこう多いが、どんな時に使いますか。」「この複合動詞はどの場合で使われるほうがいいのですか?」「辞書の例、具体的な使い方、使う場所」などの回答から、複合動詞の使

い方について質問したり、調べたりする学習者も多かった。また、複合動詞をどんな時に使うのか、どんな場合に使うのか等、具体的な使い方についての疑問も多く、たとえ、辞書に例として挙げられていても、具体的な使い方や使う場面に関しては十分に理解できていないことが分かる。

以上のような複合動詞の使い方以外、回答が多かったのは以下のような複合動詞の特徴や複合動詞の学習方法に関するものであった。

- ・ どのような特徴がありますか。
- ・ どうして同じ動詞は違う品詞に入ると、違う意味を表すか。
- ・ どうして日本語に複合動詞をたくさんあるのですか。
- ・ 複合動詞を勉強する方法はなんですか。

結合後どうして違う意味になるのか、どうして日本語の複合動詞は豊富であるのか、またどのような特徴を持っているのかについて疑問に思い、質問したり調べたりしていた。また1名であるが、複合動詞そのものについてそれほど深く勉強したことがなく、「だいたいその複合動詞の意味、そして仕組みだけについていろいろ質問し覚えるので、深く勉強したことがあまりない」と回答した学習者もいた。

5. 3. 2 複合動詞の学習の必要性について

文産出テストおよび日中翻訳テストを終えた時点で、学習者が複合動詞の学習をどの程度必要だと思っているかについて質問した。

【Q5 日本語学習の中で、複合動詞の習得は必要だと思いますか。1つ選んで○をつけてください。また、その理由を書いてください。】

【(A)必要：20名 (B)少し必要：2名 (C)あまり必要ではない：1名
(D)全然必要ではない：0名 (E)無回答：7名】

「(A)必要・(B)少し必要」と答えた学習者は22名なのに対し「(C)あまり必要ではない」と答えた学習者は1名で、9割以上の学習者が複合動詞の習得が必要であると意識していることが分かる。その理由について挙げたものはそれぞれ以下の通りである。

【A 必要】

- ・ 日本語の中に、複合動詞をよく使う。使い方を分からない日本語らしい日本語を学べないです。
- ・ 日本人と話す時、日本人がよく複合動詞を使う。とても重要だと思う。

- ・ 日本語を話すや文章を書くなど自然な日本語を学んでいることに必要だと思う。
- ・ もっと日本語らしい。日本語を上手に話せるのです。
- ・ 複合動詞は自分の日本語を日本語らしくしてくれますから。
- ・ もっと日本語らしい日本語を身につけたい。

ここから、学習者は「日本人がよく複合動詞を使う」とし、「日本語らしい日本語」を学ぶには複合動詞の習得が必要であると考えている。つまり、日本語母語話者に近い自然な日本語を学ぶには複合動詞を習得する必要があると考えている。

その他の理由は以下の通りである。

- ・ 表現をもっと生き生きさせられる。利用は便利です。
- ・ 単語を豊かにして、覚える日本語を多くする。
- ・ 多くの意味を簡単に表現できる。
- ・ 複合動詞を習得しないと、一部分の単語の意味にずれがある。
- ・ 自分が表現したいことをちゃんと伝えると思う。

学習者は複合動詞を使うことにより「表現がもっと生き生きしている」、「単語を豊かにする」、「多くの意味を簡単に表現できる」、「表現したいことをちゃんと伝える」と考え、複合動詞を習得できないと、単語の意味を理解する際「意味にずれがある」と考えている。前述のように「日本語らしい日本語を学べる」、「表現を豊かにする」という理由以外にも、「日本語の中にとっても重要な部分で理解すれば日本語が生かせる」、「日本語の中で複合動詞の数が多く、使う場合が多く、重要だ」と、数が多くよく使われ、重要であると意識し、「機会があれば、もっと具体的に習いたい」と考えていることが分かる。

【B 少し必要】

- ・ たくさんすぎるので、覚えるのは面倒くさい。だから、ほかの文字を使ってもいいと思います。
- ・ 日本語を身につけるためには、それなりの複合動詞を把握する必要があります。

日本語を身につける上で、複合動詞を把握する必要があるが、複合動詞の数が多く、学習者にとって負担がかかるため、他の表現で言い換えればいいと思うことから、複合動詞の習得が「少し必要」であるとした。

【C あまり必要でない】

- ・ 把動詞拆开，一般都能理解什么意思。（複合動詞の前項と後項を分けて考えると大体何の意味か理解できる－筆者訳）

この回答者は「大体何の意味か理解できる」と考えているが、例えば「打ち切る」のように、前項動詞「打つ（打 da）」と後項動詞「切る（切 qie）」をそれぞれ分けた場合、日本語でも、中国語でも、「打ち切る（停止 ting zhi・中止 zhong zhi）」本来の意味が推測できる訳ではない例などがある事を知らない。このような学習者は、前項、後項がもともとの単純動詞の意味から変化し結合された複合動詞について誤用を犯す可能性が高くなる。

最後に、Q5 に先だつてたずねた Q1 の複合動詞全般について、難しいこと、よく分からないことなどに関する自由記述をみってみる。

【Q1（前略）複合動詞について難しいこと、よくわからないこともっと知りたいことがあれば、自由に書いてください。】

これに対する回答内容は大きく 3 つに分けられる。

- 1) 意味や語構成、造語法について
- 2) 使い方、習得方法などについて
- 3) 翻訳について

1) 意味や語構成、造語法について

- ・ 複合動詞の意味、構成などについての知識が知りたい。
- ・ 構詞法（造語法—筆者注）、規律（文法—筆者注）、意味があいまい。
- ・ 意味が複雑、忘れやすい、複合動詞の意味などを知りたい。
- ・ 複合動詞の構成と複合した動詞の文法上の関係についてもっと知りたいです。

主に複合動詞の意味、構成、構詞法（造語法）についてよく分からないとし、そのような知識が必要であると考えている。特に学習者は結合後、元の動詞の意味が変わる複合動詞が多いことを意識した上、「特別な意味を持つ複合動詞をもっと知りたく、深く勉強したい」と感じている。

また「漢字だけを見て、その意味を考え出すのは難しい」とし、「意味がよく分からない言葉がある。当てても間違えた時がある」と意味が推測できない複合動詞に難しさを感じている。そして、複合動詞には「よく間違えやすいもの」があり、それは「意味の近いもの」であると述べ、それらの類義の複合動詞は難点であるとした。

2) 使い方、習得方法などについて

以下のように複合動詞の使い方、構成、習得方法についてもっと知りたいという回答も少なくなかった。

- ・ 複合動詞の具体的な使い方を知りたいんです。

- ・ どう覚えればよく分かるか、知りたいです。中国人にとってちょっと難しいと思います。

3) 翻訳について

以上のほかに翻訳に関して記述した学習者もいた。日本で第二言語として日本語を学んでいる留学生と異なり、母国で外国語として日本語を学んでいる学習者にとって、翻訳は重要な一つの科目であり、日本国内とは異なった課題となっている。

- ・ 複合動詞の翻訳、もっと知りたい。
- ・ 複合動詞の翻訳があまりできない。「打ち切る」、「取り成す」、「入り込む」、「し付ける」
- ・ 複合動詞の翻訳方法をもっと知りたい。

中でも「打ち切る」、「取り成す」、「入り込む」、「仕付ける」など、結合によって元の動詞の意味が変化している語を挙げ、翻訳ができないとしていることから、この種の複合動詞はたとえ文脈があっても学習者は理解しにくいものと推察される。

5. 3. 3 テスト終了後の質問紙のまとめ

以上、テスト後の質問について検討してきたことを以下にまとめる。

1) 複合動詞の使用状況について

学習者は日本語で文章を書く時や会話をする時、複合動詞をそれほど頻繁に使わない傾向がある。複合動詞を使う場合は、主に文章を書く時である。複合動詞を使わない理由として、複合動詞が習得できていないことと使い方が分からないため自然に使えないことである。

2) 学習のプロセスと内容

学習者は「会話」、「基礎日本語文法」、「作文」といったさまざまな授業で学習項目として習う以外、特に、複合動詞の使い方を間違えた時に教えてもらうことが分かった。具体的には、文章中の複合動詞の意味、類似の複合動詞、後ろにつく後項動詞、意味、使い方を主に教えてもらっていた。また、複合動詞の意味、類似の複合動詞、複合動詞の具体的な使い方に疑問を感じ、質問したり、辞書で調べたりする学習者が多い他、単純動詞の結合後の意味の変化、複合動詞の数および特徴について理解が不十分でよく質問をしていた。

3) 複合動詞の学習の必要性について

①学習者の9割以上が複合動詞の習得が必要であると意識していた。習得が必要である理

由として、日本語らしさが表現できる、表現が豊かになる、よく使われ、重要であるなどが挙げられていた。

②複合動詞の意味、構成、構詞法（造語法）、翻訳についてもっと知りたいと感じ、意味が推測できない複合動詞と「意味の近い」類義の複合動詞に困難を感じていた。

5. 4 習得状況のまとめ

以上、文産出テスト、翻訳テスト、意識調査の結果を検討してきた。ここから、学習者の複合動詞の習得状況を以下にまとめる。

1) 2種テストの結果からみる習得状況

産出テストの結果によると、タイプ①の、前後の動詞が共に単純動詞で、結合後意味変化のないものについては正答が80%を超えているのに対し、タイプ⑤の前項・後項動詞ともに元の意味の手がかりがなく、慣用句的な意味を持っているものは正答が36.7%と、タイプ①に比べ、半減していることが分かった。

翻訳テストを見ると平均正答率が73.8%で、文産出テストの平均正答率63.0%より高いことから、作文の中で複合動詞を使うことより、文脈に含まれて一定の意味を持つ複合動詞を理解することのほうが優れていることが分かった。

さらに、産出・翻訳それぞれのテストの間の関係を見ると、タイプ①の語ではあまり見られなかった両テスト間の差が、タイプ②から④にかけて広がり、タイプ⑤に至ってまた少なくなるという現象も確認できた。タイプ①は産出も理解も最もやさしいこと、タイプ⑤は産出、理解ともに困難であることが分かる。

2) テスト後質問紙の結果

テスト後の質問紙は、学習者の複合動詞の使用状況、学習のプロセス、習得の必要性について調べたものである。そこでは、授業時間の少ない「会話」授業ではあまり使用せず、「作文」の授業で書くときに使うことが多いことが分かった。意味や使い方がよく分からないことがあまり使われない理由として挙げられている。また、学習のプロセスとしては、学習項目として授業の中に組み込まれている以外に、誤用の場面で指摘を受け、そこで詳しい説明を受けるというケースが多かった。意味や造語法、使い方について質問したり、調べたりしている実態が報告され、結合後の意味の変化を伴う語についての質問が多いことは、テストの結果とも関係するものと推察される。習得の必要性については、複合動詞の役割（「日本語らしい」「豊かな表現」「重要」など）が認識されており、90%以上の学

習者が必要であると回答している。さらに、造語法や使い方、また翻訳などについてもっと学習したいという要望も提示されている。

以上、第 5 章では文産出テスト、日中翻訳テスト、テスト終了後の意識調査を行い、学習者の複合動詞の具体的な習得状況、使用および習得に関する意識を明らかにした。次章では、学習者が産出した短文をもとに個々の複合動詞について誤用分析を行い、どのような誤用が見られるかを明らかにする。

第6章 習得状況・対応表現に基づいた対照分析

6.1 習得状況・対応表現に基づいた分析と考察

前章で概観したことから、本章では、産出した文をもとに誤用分析を行う。その際、翻訳テストにおける複合動詞の翻訳、学習者が産出した文の意味確認、第4章で考察した対応する中国語表現などを照らし合わせてどのような誤用があり、どのような影響が見られるかについて考察する。((52)～(192)は学習者が産出した誤用文である。短文における格助詞や活用などの間違いは考慮しない。)

【持ち続ける】

「持ち続ける」の産出テストにおける正答率は86.7%で、翻訳テストにおける正答率は96.7%であった。「持ち続ける」は以下のような誤用が見られた。

(52) 持ち続けない大金を持つ。

学習者は「持ち切れないほどの大金を持っている」意味で短文を作りたかったということで、ここでは「持ち切る」と混同していることが分かった。翻訳テストでは、「あらゆるものから何かを学び取ろうとする姿勢を持ち続ける限り、年老いることはそれほどの苦痛ではない。」という文脈において単純動詞「持つ」の意味で理解し、「持つ→拿 na」と訳していた。「持ち続ける」に対応する中国語は「保持 bao chi」と中国語においても「動詞+動詞」で対応する。

【やり直す】

「やり直す」の産出テストにおける正答率は96.7%で、翻訳テストにおける正答率は100%であった。「やり直す」は「持ち続ける」と同様に両テストにおける正答率は極めて高かった。

(53) 自分のミスをやり直してください。

「手続きミスで仕事をやり直す」のような短文なら誤用ではないが(53)のように「ミスをやり直す」は誤用である。学習者は「やり直す」を単純動詞「直す」の意味で理解し、短文を産出していた。

【書き続ける】

「書き続ける」は産出テスト、翻訳テストとも正答率が 96.7%で、(54)の「食べることに書き続ける」といった「書く」の意味で短文を産出し、翻訳テストでも「書く」の意味のみで理解し「写 xie」と翻訳していた。

(54)食べることに書き続ける。

【受け取る】

「受け取る」の産出テストにおける正答率は 80.0%で、翻訳テストにおける正答率は 90.0%であった。

(55)パーティーの誘いを受け取った方は今席スーツを着て出席してください。

(56)今学期新しい日本語の授業を受け取る予定なんです。

(55)、(56)のように学習者は「～受ける」の意味で短文を産出していた。「受け取る」の産出においては、「受領する」意味の他にも「子供にとって受け取りにくい話だった。」のように「引き受ける」の意味で正しく文を産出した学習者も多かった。対応する中国語は「收到 shou dao」で日本語と同様に「動詞+動詞」で対応している。

【振り返る】

「振り返る」の産出テストにおける正答率は 70.0%で、翻訳テストにおける正答率は 80.0%であった。「振り返る」において学習者は「繰り返す」の意味で理解し、短文を産出した学習者が多かった。

(57)振り返って改善しても結局失敗してしまった。

(58)何回も振り返ってようやく覚えてしまいました。

(59)行くか行くまいか私は優柔不断なので振り返ることはしました。

(60)何度もこの件について振り返るのがよくなる気は全然ない。

上で挙げた誤用文の「繰り返し改善する」、「何回も繰り返し覚える」、「優柔不断な迷いを繰り返す」などの意味で理解し短文を作ったことは、産出した文の意味確認を通し確認

できた。翻訳テストでも「六色のボールペン、そんなものを抱えて僕たちは坂道を上り、時折立ち止まって港の方を振り返った。」という文脈で「往返 wang fan→往復する、行ったり来たりする」、「反复 fan fu→繰り返す」などと翻訳し、「繰り返す」、「往復」の意味で理解していた。

【生み出す】

「生み出す」の産出テストにおける正答率は 73.3%で、翻訳テストにおける正答率は 100.0%であった。

(61)努力して美しい花が生み出す。

(62)疲れるので逃げる考えは生み出した。

(63)彼女は生み出すながら金持ちだ。

翻訳テストにおいては「真の芸術が生み出されるためには奴隷制度が必要不可欠だからだ。」の文脈で学習者全員正しく理解しているが、産出テストでは上に挙げているような誤用が見られた。産出した文の意味確認を通し、学習者は(61)の「美しい花が生み出す→美しい花が生ける」、(62)の「疲れたので逃げる考えは生み出した→逃げる考えが芽生えた(生まれた)」、(63)「彼女は生み出すながら金持ちだ→彼女は生まれつきの金持ちだ」の意味で理解し、短文を作っていたことが分かった。

以上、本研究で行われたタイプ分類①に属する「持ち続ける」、「やり直す」、「書き続ける」、「受け取る」、「振り返る」、「生み出す」の複合動詞について誤用分析を行った。その結果、タイプ①のこれらの複合動詞に対応する中国語は日本語と同様に「動詞+動詞」で、学習者においても理解能力は極めて高く、実際の文産出能力も高いことが明らかになった。

【売り出す】

「売り出す」の産出テストにおける正答率は 83.3%で、翻訳テストにおける正答率は 73.3%であった。

(64)この商品は人気がある。売り出すことはやすいです。

(65)この店は非常に人気がある。今日のパンを全部売り出した。

(66)この物は最近人気があるだから全部売り出した。

「売り出す」においては、学習者には上に挙げているような「商品が人気なので全部売り切れた」の意味で理解し、「売り切る」と混同して誤用を犯した例が特徴である。また、「売り出す」を「～を売り始める」の意味で短文を作る他、「あの女は一夜に名を売り出しました」と「(自動詞的に)世間に名を広める」の意味で短文を産出した学習者もいた。「売り切る」と混同していることは翻訳テストでも確認できた。「彼は戦争の始まる直前に苦勞して化学薬品の工場を手に入れ、虫よけの軟膏を売り出した。」の文脈においても「售完 shou wan→売り切る」、「卖光 mai guang→売り切る、売りつくす」と翻訳していた。

【思い出す】、【言い出す】の場合は、産出テストにおける正答率はそれぞれ 90.0%、93.3%で、翻訳テストにおける正答率はそれぞれ 100.0%、90.0%であった。2つの複合動詞とも産出テスト、翻訳テストでの正答率は高く、習得が進んでいることが窺える。誤用はほぼなく、「寝る前にいつも考えていた問題の答えを思い出した」、「こんなことを他人に言い出さないてください」などと短文を作った学習者がいた。「言い出す」の翻訳テストではただ「言う」の意味で理解し「讲 jiang、说 shuo」と翻訳していた。

【流れ出す】

「流れ出す」の産出テストにおける正答率は 80.0%で、翻訳テストにおける正答率は 100.0%であり、文脈においては学習者全員理解が上手くできていた。

(67)うれしさのあまりに涙が流れ出してしまいました。

(68)けがして血が出た母を見ると彼女は涙を流れ出してしまった。

(69)皿にたまった水を流れ出させないてください。

(67)、(68)のように「涙を流れ出してしまった」と文を産出した学習者が多く、「涙を流す」の意で理解していた。(69)の「水を流れ出させないてください」も同様に「水を流さないてください」の意味で短文を作っていた。

【向い合う】

「向い合う」の産出テストにおける正答率は 63.3%で、翻訳テストにおける正答率は 76.7%であり、意味分類のタイプ②の産出においては正答率が一番低かった。誤用には以下のような傾向が見られた。

- (70)性格に向い合って二人は仲良い友達になりました。
- (71)どんな困難に向い合っても負けないで恐れないうください。
- (72)勇気をもって困難に向かい合った。
- (73)奨学生に向い合っているこの本はベストセラーになった。
- (74)この目標を向い合って勉強する。
- (75)目標を向い合ってがんばってください。

(70)~(73)まで観察してみると、「向い合う」を学習者は「~が合う」、「(困難など事態を直視する)に向き合う」、「(送り先や対象を示す) ~向け」という意味で理解していることが分かる。まず、(70)の「性格に向い合って仲良い友達になりました」は後項動詞「合う」の2つのものが一致する・合致すると意味で捉えていた。これは翻訳テストでも見られ、「僕たちは二人きりで向い合っていた。」の文脈で「适合 shi he→合う、似合う」という中国語で翻訳していた。

(71)と(72)では、学習者は主に「困難に向い合う」で短文を産出しているが、これは「事態を直視する」の意味を持つ「向き合う」と捉えたことが分かる。(73)の場合は、送り先や対象を示す「向け」の意味で理解していた。(74)、(75)はある方向を向かせる「向ける」の意味で「目標に向けて頑張る(勉強する)」と捉えていた。「向き合う」と対応する中国「面面相覷 mian mian xiang qu」と四字熟語に訳すことができる。よって、この種の複合動詞は学習者にとって理解しにくく、誤用を犯したと考えられる。

【重なり合う】

「重なり合う」の産出テストにおける正答率は70.0%で、翻訳テストにおける正答率は93.3%であり、文脈における理解はできているが文産出では、以下のような誤用が見られた。

- (76)ことしの春節の冬休みが重なりあいます。
- (77)水とアルコールを混ぜてちゃんと重なり合っていた。
- (78)問題と答えは重なり合わないじゃない。

「重なり合う」を(76)のように前項動詞「重なる」の意味で「冬休みが重なりあう」と文を産出していた。(77)の「水とアルコールを混ぜて重なり合っていた」というのは誤用

で、「～作用が重なり合っている」、「旨味が重なり合っている」などの短文なら正しい。(78)では「問題と答えが一致しない」の意味で捉え「問題と答えが重なり合わない」と短文を作っていた。「重なり合う」に対応する中国語は第4章の考察でも述べたように、「重重叠叠在一起 chong chong die die zai yi qi」となり、構成要素は「副詞+動詞+名」で語レベル以上のフレーズ表現になるものである。中国語においてフレーズ表現で対応するため、この種の複合動詞は学習者にとっても習得が難しいと言える。

以上、本研究で行われたタイプ分類②に属する「売り出す」、「思い出す」、「言い出す」、「流れ出す」、「向い合う」、「重なり合う」の複合動詞について誤用分析を行った。その結果、タイプ②のこれらの複合動詞に対応する中国語は日本語と同様に「動詞+動詞」で対応するもの（「思い出す」、「流れ出す」）、四字熟語で対応するもの（「向い合う」）、フレーズ表現で対応するもの（「重なり合う」）と一対一ではないため、学習者にとっても四字熟語になるものやフレーズ表現になる複合動詞は比較的に難しい。

【結び付く】

「結び付く」の産出テスト、翻訳テストにおける正答率は両テストとも83.3%であった。産出した文に見られる誤用は以下のようである。

(79)蝶結びを結び付いていて彼はかこよく見える。

(80)赤い花が王さんのかばんに結び付いていて、きれい。

(79)では「蝶結びを結んでいる」の意味で、(80)では、「花が鞆についている」の意味で短文を作ろうとしたことが産出した文の意味確認で分かった。「結び付く」はタイプ③「前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から抽象的な意味に変化した複合動詞」に分類される。「結び付く」は「結ぶ」、「付く」が本来の意味から変化し、抽象的な意味を持っている。このような複合動詞について学習者は上で挙げている誤用例のように前項動詞、或いは後項動詞のみの意味で理解していることが分かった。そのようは傾向は翻訳テストでも確認することができた。翻訳テストでは「街には僕の心にしっかりと根を下ろし、思い出の殆んどはそこに結び付いている。」の文脈において学習者は産出テストと同様に「結ぶ」の意味の「系上 ji shang」、「系 ji」と翻訳していた。「結び付く」に対応する中国語表現は「联系在一起 lian xi zai yi qi」で構成要素は「動詞+動詞+副詞」で語レベル以上のフレーズ表現として対応する。前述の「重なり合う」と同様で

中国語ではフレーズ表現で対応するこの種の複合動詞の場合、その影響で学習者は習得が難しい。

【取り付ける】

「取り付ける」の産出テストにおける正答率は 43.3%で、翻訳テストにおける正答率は 86.7%であり、主に下に挙げているような誤用例が見られた。

(81)もしこれが正しいと思うと、○を取り付けなさい。

(82)誕生日の日友達にチーズを取り付けられた。

(83)仕事のことを取り付けるのは私の考えだ。

(84)この仕事はどう取り付けたらいいか私にわからない。

(85)何年間勉強した後英語をしゃべる能力を取り付けた。

まず、(81)、(82)のように「正しいと思うと○を取付けなさい」、「チーズを取り付けられた」と「取り付ける」を「○をつける」、「友達にチーズをつける」の「つける」の意味で解釈しそのような意味で短文を産出していた。その次の誤用例(83)「仕事のことを取り付けるのは私の考えた」と(84)「この仕事はどう取り付けたらいいか私にわからない」は産出した文の意味確認を通し、学習者は「仕事に取り組む」の意味で理解していることが明らかになった。「取り付ける」の誤用はその他にも、(85)の「何年間勉強した後英語をしゃべる能力を取り付けた」のように「英語をしゃべる能力を身につけた」として捉える場合もあり、「取り付ける」のように本研究でのタイプ③は前項動詞または後項動詞が抽象的意味に変化し、学習者は推測しにくく、上述のようなさまざまな誤用文を産出したと考えられる。

【成り立つ】

「成り立つ」の産出テストにおける正答率は 66.7%で、翻訳テストにおける正答率は 86.7%であり、学習者は「成り立つ」を主に「創立する」の意味で理解することが明らかになった。

(86)10年おけるの努力によって彼はやっと自分の会社を成り立ちました。

(87)会社を成り立つためにはいろいろ苦勞をしなければなりません。

(88)この会社の三年前成り立つので新しい会社と言ってもいい。

(89)その学校は去年成り立たれたばかりなので今年もう倒れました。

(90)いい結果を成り立つように頑張ります。

誤用例(86)～(90)いずれも「会社が創立される」、「学校が創立される」という意味で捉えていた。その原因について、学習者は「成り立つ」の前項動詞と後項動詞の漢字を取り、その語に当たる「成立 cheng li→創立する、創立される」と推測したという。翻訳テストでの正答率は 86.7%とそれほど低くなかったが、「世の中が何故こんな風に成り立っているのかわかるかもしれない。」という文脈の中においても「「成立 cheng li→創立する、創立される」と翻訳した学習者が少数いた。このことは、漢字を含む複合動詞で前項動詞と後項動詞の漢字を中国語に組み合わせて推測しようとする学習者の複合動詞理解のある種の方略とも言えよう。

【盛り上がる】

「盛り上がる」の産出テストにおける正答率は 96.7%で、翻訳テストにおける正答率は 10.0%であり、興味深いことに、産出能力が極めて高く、文脈中の複合動詞の理解度は極めて低かった。学習者は文産出においてほぼ全員が「氣勢が盛んになる」の意味で正しい短文を産出していた。だが、翻訳テストでは、「自分でカットしたらしい前髪は無造作に広い額に落ちかかり、そこからわずかに盛り上がった頬にかけて微かなニキビの痕跡が残っている。」といった文脈を提示したのにもかかわらず、ほとんどの学習者は「氣勢が盛んになる」の意味で翻訳していた。ごく少数の学習者が文脈に沿って「盛ったように高くなる。うずたかくなる」の「盛り上がる」本来の意味で捉えていた。「盛り上がる」は「盛ったように高くなる」の意味の場合タイプ①に属し、「氣勢が盛んになる」の抽象的な意味の場合タイプ③として使われ、学習者は抽象的な意味知識のほうが「盛り上がる」の本来の意味知識より習得できていることが分かる。学習者にとって前項動詞「盛る」も後項動詞「上がる」も既習の単純動詞であるが、単純動詞「盛る」の場合「ご飯を茶碗に盛る」の用法で使われる以外学習者にはそれほど馴染みがない。単純動詞「盛る」は「盛り上がる」より使用頻度も低い。「盛り上がる」の前項動詞「盛る」のこのような用法が影響し、学習者の文産出テストと翻訳テスト正答率の間に著しい差があるだろう。

【取り巻く】

「取り巻く」の産出テストにおける正答率は 40.0%で、翻訳テストにおける正答率は 86.7%であり、「取り巻く」も「取り付ける」と同様にさまざまな種類の誤用例が見られ

た。

(91)テープを取り巻いてください他人を使う時便利です。

(92)彼はこの紙を取り巻いてきれいな蝶々に折す。

(93)清朝の絵を見てからその絵をしっかりと取り巻きました。

(94)敵を取り巻きください。

(95)研究の話を取り巻いて先生と話した。

(96)東京に着くと大勢な新聞記者に取り巻かれてきた。

(97)あの人は取り巻くことが得意だ。

(98)彼はまっすぐな人なので取り巻くはきらいです。

(91)～(93)は「テープを取り巻いてください」、「髪を取り巻いて蝶々に折る」、「絵を見てからしっかりと取り巻く」と学習者が「取り巻く」をいずれも後項動詞「巻く」の意味で捉え短文を産出したことが分かる。(94)の「敵を取り巻いてください」という誤用文と、(96)の「東京に着くと大勢の新聞記者に取り巻かれてきた」という誤用文は学習者がそれぞれ「敵を囲む」、「新聞記者に囲まれる」の意味の「囲む」で解釈したもので、(95)の「研究の話を取り巻いて先生と話した」は「研究の話をめぐって」の意味で解釈したものと判断できる。誤用文(97)と(98)は産出した文の意味を確認したところ、「取り巻く」を「婉曲的、曖昧な」の意味で理解していることが分かった。これは翻訳テストでも現れた誤用で、提示された「自分と自分を取り巻く事物との距離を確認することである。」という文脈において「彎曲 wan qu→婉曲」と翻訳していた。

【語りかける】

「語りかける」の産出テストにおける正答率は 50.0%で、翻訳テストにおける正答率は 86.7%であり、「語りかける」と「話しかける」の混同、「語りかける」と「話し合う」との混同が多く見られた。

(99)日本人に語りかけるために日本語を習っている。

(100)赤の人を語りかけられたらすごい怖いだと思います。

(101)かわいい女の子から語りかけられてすごくうれしかった。

(102)どこで見たことがあるような感じがしてあの人に語りかけました。

(103)この二人はずっとそこで語りかける。

(104)両親と語りかけた後留学する予定になった。

(105)彼女とは語りかけて本当にいい人だと思います

(99)～(102)までは「語りかける」と「話しかける」の混同である。(99)の「日本人に語りかけるために日本語を習っている」は「日本人に話しかける」という意味で表現したかったという。(100)、(101)、(102)も同様である。(103)の「二人はずっとそこで語りかける」、(104)の「両親と語りかけた後留学する予定になった」では「語りかける」と「話し合う」を混同していることが分かる。

以上、本研究で行われた複合動詞のタイプ③に属する「結び付く」、「取り付ける」、「成り立つ」、「盛り上がる」、「取り巻く」、「語りかける」の複合動詞について誤用分析を行った。タイプ③は「前項動詞または後項動詞が単純動詞として使われる際の意味から抽象的な意味に変化した複合動詞」であり、物理的意味から抽象的な意味に変化し、また具体的な動作などから離れ、抽象的なものへと変化している。よって学習者はこのタイプの複合動詞を前項動詞、あるいは後項動詞から推測することにより、誤用にもさまざまなものが見られた。「成り立つ」の場合は、学習者は漢字だけを組み合わせた中国語表現で文を産出していた。対応する中国語表現は、例えば「結び付く→联系在一起 *lian xi zai yi qi*」で構成要素は「動詞+動詞+副詞」でフレーズ表現になるものや、「語りかける→搭话 *da hua*」で「動詞+名詞」の構成要素になるものなど多様な対応関係を呈していた。従って、これらの複合動詞は学習者にとってさまざまな誤用を犯す危険性が高まり、対応する中国語もまちまちであるため、学習の難点となっていると考えられる。

【落ち込む】

「落ち込む」の産出テストにおける正答率は 83.3%で、翻訳テストにおける正答率は 73.3%であり、学習者の主な誤用は以下の通りである。

(106)あの男の目が落ち込みます。

(107)こんなに落ち込んでください。

(108)彼女は恋愛に落ち込まれた。

(109)この二人は愛情に落ち込んでいる。

(110)彼は不意識のうちに危険に落ち込んだ。

まず、(106)と(107)のように「あの男の目が落ち込みます」、「こんなに落ち込んでください」は産出した文の意味確認の結果、学習者が「落ち着く」の意味で捉え、上記の短文を産出したことが分かった。そして、翻訳テストでも、「秋が近づくと、いつも彼の心は少しずつ落ち込んでいった。」という文脈で「落ち込む」を「落ち着く」を混同していることが確認できた。

【追い込む】

「追い込む」の産出テストにおける正答率は 43.3%で、翻訳テストにおける正答率は 86.7%であり、主に前項動詞「追う」を含む「追いかける」と混同している傾向が強かった。以下のような短文を産出していた。

(111)財布をすりにすられたとたんその人を追い込んでいました。

(112)私はずっと彼の後で追い込んでいるほかに何も気にする気がない。

(113)彼はずっとこの夢を追い込めます。

(114)みなさん自分の未来の生活を一生懸命追い込む。

誤用文(111)～誤用文(114)は「その人を追いかける」、「後で追いかける」、「夢を追いかける」、「未来の生活を一生懸命追いかける」と「追いかける」と混同していることが分かる。

【乗り込む】

「乗り込む」の産出テストにおける正答率は 46.7%で、翻訳テストにおける正答率は 40.0%であり、主に以下のような誤用が見られた。

(115)家に入るとソファに乗り込んだ。

(116)彼女は彼の自転車に乗り込むのが一番幸せなことだと思います。

(117)いい気に乗り込まれて不都合な事が出てしまった。

(118)中国は今グローバル化の道に乗り込んでいる。

(119)今のよい調子を乗り込んで最後までがんばりましょう。

(120)その機会に乗り込んで新しい成績をあげたい。

「乗り込む」はある領域の内部ということを強調しているため、(115)の「ソファーに乗り込む」と(116)の「彼の自転車に乗り込む」のような表現は通常しない。「馬に乗り込む」という表現も誤用である。興味深いことに、学習者は前項動詞「乗る」の本来の「乗物の上、または中に身を置く。乗り物で移動する。」の意味の他に、「勢いにまかせてすすむ」の意味で解釈し、「いい気に乗り込む」、「グローバル化の道に乗り込む」、「よい調子に乗り込む」、「機会に乗り込む」などの誤用文を産出していた。「乗り込む」の翻訳テストでは主に前項動詞「乗る」の意味だけを捉え、「彼は黙って本を閉じ、車に乗りこんでからサングラスをかけた。」という文脈で「坐 zuo→乗る（座る）」、「乗 cheng→乗る」と翻訳した学習者が多かった。

【突っ込む】

「突っ込む」の産出テストにおける正答率は 50.0%で、翻訳テストにおける正答率は 70.0%であり、次のような誤用が見られた。

(121)この企業は長年にわたる努力をへてやがて世界多国籍大手企業に突っ込んだ。

(122)彼は一向に心を研究に突っ込んでいる。

(123)彼は自分の研究に突っ込んでいる。

(124)私は前に歩いています。彼は突っ込んできました、びっくりしました。

(125)私を突っ込んで彼は前に足を出しました。

「世界多国籍大手企業に突っ込んだ」という誤用文は産出した文の意味確認を通して学習者が「大手企業に進出した」という意味で解釈していることが分かった。(122)の「一向に心を研究に突っ込む」と(123)の「自分の研究に突っ込んでいる」はいずれも「研究に打ち込んでいる」と意で表現したく、「突っ込む」を「専念する。全力で集中して熱中する」の意味知識として捉えていた。そのような誤用は翻訳テストでも確認できた。「突っ込む」の文脈「ダッシュボードの上の煙草の箱をポケットに突っ込んでから、おもむろに僕の手をつかんで車の屋根によじのぼった。」においても「热衷 re zhong→打ち込む」と翻訳していた。

【入り込む】

「入り込む」の産出テストにおける正答率は 43.3%で、翻訳テストにおける正答率は 90.0%であり、産出と翻訳の正答率の差は大きい。産出における誤用は以下のようなものである。

- (126)高校を卒業してから大学に入り込む。
- (127)落ちた部品をちゃんと機械に入り込む。
- (128)携帯を鞆の中に入り込みます。
- (129)分からないことも論文に入り込みなさい。
- (130)彼女は自分の美しさに入り込んでいて人に嫌われた。

(126)の「大学に入り込む」は意味が分からず単純に「入る」の意味で短文を作っていた。(127)～(129)は「部品を機械に入り込む→入れ込む」、「携帯を鞆の中に入り込む→入れ込む」、「分からないことも論文に入り込む→入れ込む」のように、いずれも「入り込む」を「入れ込む」の意味に解釈していた。

【詰め込む】

「詰め込む」の産出テスト、翻訳テストにおける正答率は両テストとも 40.0%であり、学習者にとって理解しにくく、習得できていないことが窺える。産出テストにおいて主に以下のような誤用が見られた。

- (131)彼はよく人を詰め込むらしい言葉を言います。
- (132)他人話を詰め込まないてください。
- (133)いつも彼の話を詰め込んでいる。
- (134)この小説に詰め込んでもう遊びなどはしない。

「詰め込む」は「つめていれる。つめられるだけ一杯に入れる」という意味だが、学習者は(131)の「よく人を詰め込む言葉を言う」と(132)の「他人の話を詰め込む」、(133)の「彼の話を詰め込む」はいずれも「突っ込む」の意味で理解し、短文を作っていた。「詰め込む」のもうひとつの「知識をむやみにおぼえる」の意味を正しく理解し、「親たちは子供に知識を詰め込んでいる」という文を産出した学習者もいた。その他、(134)のように「小説に詰め込んでもう遊びたどはしない」では、「～に夢中になる。はまり込む」の意味で捉えていた。この誤用については翻訳テストでも見られ、「体中をずたずたに切り裂かれ、体の入口と出口にプラスチックのパイプを詰め込まれたまま苦しみ抜いて死んだ。」のような文脈だが、「沉浸 chen jin→はまり込む」と翻訳していた。

以上、本研究で行われたタイプ分類④に属する「落ち込む」、「追い込む」、「乗り込む」、「突っ込む」、「入り込む」、「詰め込む」の複合動詞について誤用分析を行った。その結果、タイプ④「後項動詞が単純動詞として使われないもので、接辞化している複合動詞」に分類されるこれらの複合動詞は、やはり前項動詞が「乗る」、「入る」、「追う」などとそれほど多義的で意味が不透明な単純動詞でないにもかかわらず、後項動詞となる「込む」の影響で学習者にとってその意味理解は容易ではない。

【打ち切る】

「打ち切る」の産出テストにおける正答率は 46.7%で、翻訳テストにおける正答率は 66.7%であり、学習者には主に以下のような誤用が見られた。

(135)彼とけんがをしたあと、一切打ち切りました。

(136)あの二人は大喧嘩をして友情も怒りで打ち切られた。

(137)A : 打ち切ってくださいこれを二つにしてほしいから B : いいですよ

(138)この後の失敗を打ち切るために彼勉強に専心した。

(139)絶対打ち切ってやろうと彼は決心した。

「打ち切る」の場合、本研究ではタイプ⑤「単純動詞として使われる際の意味から変化し、前項、後項ともに元の意味の手がかりなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞」に分類した。前項動詞「打つ」と後項動詞「切る」の元の意味から完全に変化し、複合動詞全体の意味がたどれなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞である。「打ち切る」は「あとを切り捨てて、一応終わりにする」の意味だが、学習者は(135)と(136)、(137)のように「彼と一切打ち切る」、「友情を打ち切る」、「二つに打ち切る」といずれも「切断」の意味で理解し、短文を作っていた。ところが、この「打ち切る」も「成り立つ」の同様の誤用で、「打ち切る」の前項と後項の漢字をとり、その漢字にあたる中国語「打斷 da duan →断ち切る」と捉えていた。これは産出した文の意味確認を通して確認できた。

その他「打ち切る」を「難局を突破する」の意味の「乗り切る」と理解して入ることも明らかになった。(138)と(139)がその誤用文である。

【落ち着く】

「落ち着く」の産出テストにおける正答率は 90.0%で、翻訳テストにおける正答率は 80.0%であり、タイプ⑤の中では産出、翻訳とともに正答率が極めて高い。「落ち着かな

いでください」といった誤用文が見られるほか、ほぼ正解であった。翻訳テストにおいて、提示された文脈「午後は気分が落ち着くノンカフェインのハーブティーや、ルイボスティーがおすすです。」中の「落ち着く」を「消沉 xiao chen→落ち込む、低落 di luo→落ち込む」と翻訳した学習者が多く、このことから「落ち込む」の意味で理解し、文産出で「落ち着かないでください」という短文を作ったことが窺える。

【取り成す】

「取り成す」の産出テストにおける正答率は 13.3%で、翻訳テストにおける正答率は 23.3%であり、学習者にとって産出、翻訳ともに困難であることが分かる。「取り成す」には主に以下のような誤用が見られた。

- (140)この判子を押すと契約が取り成しました。
- (141)一年間の努力によってやっと大学の合格を取り成しました。
- (142)三ヶ月の努力でいい成果を取り成す。
- (143)この研究は長年かけてやっと取り成した。
- (144)一年間の努力で彼は最後に成功を取り成す。
- (145)今まで取り成した成果はこの論文に大きなささげになります。
- (146)両方の努力をもとにして契約が取り成した。

「取り成す」を本研究ではタイプ⑤「単純動詞として使われる際の意味から変化し、前項、後項ともに元の意味の手がかりなく、慣用句的な意味を持っている複合動詞」に分類した。「取り成す」は「仲裁する。仲直りさせる。また、なだめて機嫌をよくさせる」意味で、前項動詞「取る」と後項動詞「成す」の元の意味から完全に変化し、複合動詞全体の意味がたどれなく、慣用句的な意味を持っている。よって、学習者にとってその意味は推測しにくく、正答率は低い。(140)～(146)の誤用文をみると、いずれも「完成する、果たす、成し遂げる」の意味で理解し、短文を作っていた。

【出し抜く】

「出し抜く」の産出テストにおける正答率は 13.3%で、翻訳テストにおける正答率は 50.0%であり、産出の正答率は「取り成す」と同様で最も低かった。主に以下のような誤用が見られた。

- (147)彼は話しながら一紙を出し抜いて私の前に置きました。
- (148)彼はかこよく刀を出し抜いて戦いはじめました。
- (149)雨で道がどろどろになって足が泥から出し抜くことさえ難しくなる。
- (150)この鉛筆を一本出し抜いてください。
- (151)力を出し抜いて最後まで走り続けていた。
- (152)その試合で全部の力を出し抜いた。
- (153)自分の経験は全部出し抜いた。
- (154)この机を二階に運ぶために王さんは全部の力を出し抜いた。
- (155)間違っているところを出し抜いてください。
- (156)チェックする時間違いを出し抜いてください。

「出し抜く」は「他人の隙をうかがったりだましたりして、自分が先に事をする」意味で「他紙を出し抜くスクープ」のように使われる。前項動詞「出す」と後項動詞「抜く」は元の意味から完全に変化し、一種の慣用句的な意味を持つ。学習者にとって推測が難しく、(148)～(150)のように「刀を出し抜く」、「足を出し抜く」、「鉛筆を一本出し抜く」と「～を抜き出す」の意味で理解していた。産出した文の意味確認をした結果、学習者は意味の推測が難しく「成り立つ」、「打ち切る」と同様に漢字だけを取り中国語にし、「抜き出す」にあたる「拔出 ba chu」と理解して入ることが明らかになった。

【当て付ける】

「当て付ける」の産出テストにおける正答率は 16.7%で、翻訳テストにおける正答率は 16.7%であり、産出、翻訳ともに正答率が極めて低く、学習者は習得困難であった。「当て付ける」の誤用には以下のものがあった。

- (157)この問題についてみんなは全部当て付けます。
- (158)答えが分からないが思い付いたのを当て付けた。
- (159)彼は賢い子です。先生はそのなごを言い出すと彼はすぐ解答を当て付ける。
- (160)あたたかいタオルを顔に当て付けてストレスを解消する。
- (161)まだ新人ですからこの仕事を当て付けられるかな。
- (162)やべえ、服には何か当て付けているの？洗わなければならない。
- (163)10 \$ を当て付ける物を彼にあげました。そのかわりに彼から 10 \$ を当て付け

る珍珠をもらいました。

「当て付ける」は「はっきりそれと言わずに、何かにかこつけて悪く言う。あてこする」の意味で「兄に当て付けて弟をほめる」などの用法として使われる。(157)～(159)は「問題を当て付ける」、「答えを当て付ける」、「解答を当て付ける」と「経験や勘によって、予測、推測を的中させる」の意味で使っていることが分かる。(160)の「あたたかいタオルを顔に当て付けてストレスを解消する」は「当てる」の本来の意味「物などを移動させて他の物に勢いよく触れるようにする。ぶつける」で用い、「当て付ける」の誤用文となった。(161)「まだ新人ですからこの仕事を当て付けられるかな」の場合は「当てる」のもう一つの「何人かの中である特定の人を指名して課題を与える」の意味で「当て付ける」を理解していた。

(162)の「やべえ、服には何か当て付けているの？洗わなければならない」の場合は「～がついている。付着している」の意味で捉えた誤用例である。最後の(163)は「10\$を当て付ける物」と文を作り、「当て付ける」を「～にあたるもの、～に相当するもの」と理解していることが分かる。

【仕付ける】

「仕付ける」の産出テスト、翻訳テストとも正答率は40.0%であり、学習者は次のような誤用文を産出していた。

(164)自分の仕事をちゃんと仕付けることについても用心が必要です。

(165)この仕事は難しい彼だけが仕付けた。

(166)私はいつもちゃんと仕事を仕付ける。

(167)この工程を仕付ける以上「止め」と言っても止まらないよ。

(168)私は五年前からあの会社で仕付けている。

(169)週末にはちゃんと部屋を仕付けようと思った。

「仕付ける」は「礼儀作法などを身につけさせる。躾をする」の意味だが、学習者は(164)～(167)のように「仕事をちゃんと仕付ける」、「工程を仕付ける」などといった誤用文を産出し、産出した文の意味確認をした結果、「仕事などを完成する、仕上げる」の意味で理解して入ることが分かった。その意味で理解したのが原因で誤用になったのは翻訳テス

トでも見られた。「その真面目さ、昔親からきちんと仕付けられたのが円谷家であった。」という文脈で「仕付ける」を「做好 zuo hao→(仕事などを)ちゃんとする」と翻訳していた。

6. 2 まとめ

以上、テストで使用した 30 語の個々の複合動詞の誤用について考察を行った。学習者が産出した文について、日本語の複合動詞に対応する表現、産出した文の意味の確認に基づき誤用分析を行った結果、主に以下の誤用が顕著であった。

1. 前項動詞あるいは後項動詞のみの意味で捉える

(170) パーティーの誘いを受け取った方は今席スーツを着て出席してください。

(171) 今学期新しい日本語の授業を受け取る予定なんです。

(172) 彼女は恋愛に落ち込まれた。

(173) 彼は不意識のうちに危険に落ち込んだ。

(174) いい気に乗り込まれて不都合な事が出てしまった。

(175) 今のよい調子を乗り込んで最後までがんばりましょう。

「受け取る」を「受ける」の意味で捉えたほか、「落ち込む」、「乗り込む」では、それぞれ「引きこまれる感じのする状態に至る」、「勢いにまかせてすすむ」の意味の「落ちる」、「乗る」で解釈していた。

2. 同じ前項動詞あるいは後項動詞を含む他の複合動詞との混同する

(176) この店は非常に人気がある。今日のパンを全部売り出した→売り切れた

(177) 日本人に語りかけるために日本語を習っている→話しかける

(178) 財布をすりにすられたとたんその人を追い込んでいました→追いかける

(179) みなさん自分の未来の生活を一生懸命追い込む→追いかける

「売り出す」を「売光 mai guang→売り切れる」、「追い込む」を「追上 zhui shang→追いかける」と混同する傾向も見られる。

3. 前項動詞、後項動詞の漢字のみを組み合わせる

- (180) 10年おけるの努力によって彼はやっと自分の会社を成り立ちました。
- (181) その学校は去年成り立たれたばかりなので今年もう倒れました。
- (182) あの二人は大喧嘩をして友情も怒りで打ち切られた。
- (183) A: 打ち切ってくださいこれを二つにしてほしいから B: いいですよ
- (184) 雨で道がどろどろになって足が泥から出し抜くことさえ難しくなる。
- (185) 彼はかこよく刀を出し抜いて戦いはじめました。

「成り立つ」では、漢字をとり「成立 cheng li→創立する」と捉え、「打ち切る」の場合も前項と後項の漢字をとり「打断 da duan→断ち切る」と捉えている。「出し抜く」は「抜き出す」の意味を持っている「拔出 ba chu」と理解している。

4. その他

- (186) あの人は取り巻くことが得意だ。
- (187) 彼はまっすぐな人なので取り巻くはきらいです。
- (188) 彼女は自分の美しさに入り込んでいて人に嫌われた。
- (189) この小説に詰め込んでもう遊びなどはしない。
- (190) 一年間の努力によってやっと大学の合格を取り成しました。
- (191) 今まで取り成した成果はこの論文に大きなささげになります。
- (192) 自分の仕事をちゃんと仕付けることについても用心が必要です。

(186)、(187)の「取り巻く」は「弯曲 wan qu→婉曲」の意味で、(188)の「入り込む」と(189)「詰め込む」は「～夢中になる、はまり込む(→沉浸 chen jin)」の意味で捉えている。(190)、(191)の「取り成す」の場合は、「～を遂げる」の意味で理解し、(192)の「仕付ける」の場合、「仕事を完成する(→做好 zuo hao)」の「完成」の意で理解していた。

以上、学習者の主な誤用についてみた。次章では、これらの誤用、具体的な習得状況を踏まえ、日本語教育現場への応用について考える。

第7章 日本語教育現場への応用

7.1 日本語教師の意識調査

日本語教育における「語彙教育」の中心課題の一つに、教師の学習者に対する語彙指導が挙げられる。この意味では、中国国内で上級レベルにある学習者の授業活動に、実際に関わっている教師に対する意識調査は有益なデータを提供してくれると思われる。

学習者の語彙学習に関わる学習者自身の要素は学習者の生活経験、学習意欲など多岐に渡るが、学習内容から見ると語彙の意味連想による記憶の問題、機能語と内容語などが挙げられる(阿部他1995)。

教師の指導内容、指導量、ドリルにかける時間、指導観、教材の提示方法などは学習者の複合動詞の習得に影響する要素として考えられる。以上を踏まえて、本研究では教育現場で日本語を教えている日本語教師に意識調査を行い、複合動詞教育の現状について考察を行うことにする。意識調査の主な目的、対象、内容は以下の通りである。

(1) 調査目的

- ① 日本語教師自身が持っている複合動詞観、複合動詞指導観はどのようなものを明らかにする。
- ② 複合動詞の教育活動中、問題になっている点、改善すべき点は何かを検討する。

(2) 調査対象者

調査の対象は、中国の大学で日本語を教えている日本語教師 15 名である。全員中国語母語話者の教師であり、学習者の習得に関する調査を行った大学で日本語を教えている。平均教授歴 7 年で、教授歴が最も短い教師は 4 ヶ月、最も長い教師は 18 年であった。教授歴 5 年未満の教師は 4 名、5 年～9 年が 7 名、10 年～15 年が 3 名、15 年以上が 1 名であった。

以下担当学年と担当科目、使用教材の詳細である。

担当学年：1 年生 7 名、2 年生 11 名、3 年生 3 名

担当科目：【基礎日本語】、【会話】、【聴解】、【上級日本語】

使用教材：【基礎日本語】→『基礎日本語総合教程』（高等教育出版社）、『中に標準日本語』（人民教育出版社）、『新編日本語』（上海外国語教育出版社）、『総合日本語』（北京大学出版社）

【会話】→『基礎日本語口語教程』（高等教育出版社）

【聴解】→『毎日の聞きとり 50 日』（凡人社）、メディア資料

【上級日本語】→『上級日本語』（上海外国語教育出版社）

（3）調査内容

日本語教師の意識調査の形式は以下の通りである。

海外日本語教育における複合動詞教育の現状調査への	
ご協力をお願い	
この度、海外日本語教育における複合動詞教育の現状に関する実態調査を実施することとなりました。お忙しいところ大変恐縮ですが、(中略) ご協力くださいますようお願い致します。	
また、本調査の結果をまとめる際、皆様の個人情報は一切公開せず、個人が特定できないよう資料化いたします。	
1. 教授歴などについてご記入ください。	
教授歴： _____ 年	担当学年： _____ 年級
担当科目： _____	使用教材： _____
2. 該当する番号に○をし、 _____ のある場合は具体的な内容をご記入ください。	
Q1 学習者に複合動詞について教えたことがありますか。1つ選んで○をつけてください。	
1. 教えたことがある (→Q1-1、Q1-2へ)	
2. 教えたことがない (→Q2へ)	
3. 覚えていない (→Q2へ)	

図 15. 日本語教師の意識調査の形式

調査ではまず、図 15 のように教師の教授歴、担当学年、担当項目、使用教材の詳細を記入してもらった。複合動詞の指導観に関する質問項目、複合動詞観に関する質問項目、複合動詞の習得の必要性に関する質問項目、日本語教育活動中の問題点・改善点に関する自由記述からなっている。(詳しくは付録 4 を参照) 以下、日本語教育現場の教師は複合動詞においてどのような指導観およびどのような複合動詞観を持っているのか、複合動詞教育の現状について考察する。

7. 1. 1 複合動詞の指導観

まず、学習者に複合動詞について教えたことがあるかどうかを問うた。その結果、全員が「教えたことがある」と答えた。

【Q1 日本語教育の中で、今まで複合動詞を教えたことがありますか。】

【教えたことがある：15名 全員】

日本語教授歴の長短に関係なく、複合動詞について全員教えた経験があった。具体的にどのような場面で教えたかを尋ねたところ、以下のような回答があった。

【Q1-1 どのような場面で教えましたか。】(学習者の回答のまま、以下同様)

- ・ 会話の授業の時

- ・ 作文など文章を書く授業の時
- ・ 精読の授業の時
- ・ 基礎日本語の授業の時
- ・ 聴解の授業で教えたことがある。

作文の授業や精読の授業に限って複合動詞の教育を行っているのではなく、会話の授業、基礎日本語の授業、聴解の授業といったさまざまな授業で複合動詞を教えていることが分かる。より具体的には以下の場面で複合動詞を教えていたと答えた。

- ・ 基礎日本語の本文の中に使われた複合動詞
- ・ テキストの文章に出ている時
- ・ 文章に出た時

つまり全て複合動詞が文中に使われた際に指導を行っている。語彙学習には意図的学習と付随的学習がある。教師の回答から複合動詞については付随的学習が主に行われていることが分かる。その次に多数の回答を占めていたのは文法を教える時であった。

- ・ 文法要点を説明した時
- ・ 文法として教える時
- ・ 基礎日本語の授業で文法を教える時

中国国内で出版された日本語の主教材では、例えば「降り出す」の「～出す」や「読み切る」の「～切る」といった後項動詞を文法項目として立てる場合が多い。上述の「文法として教える」のがそのような統語的複合動詞の後項のことで、生産性が高い統語的複合動詞は文法として捉えている。複合動詞の何について、具体的にどのように教えたかの質問については以下のことが明らかになった。

【Q1-2 複合動詞の何についてどのように教えましたか。具体的に書いてください。】

表 6 何についてどのように教えたか

何について (回答数)	どのように教えたか (教師の回答のまま)
分類、意味関係 (3、4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分類について「補足関係」、「形式的意味への移行」、「主述関係」、「並列関係」、「抽象的意味への移行」の5つの方面から教えました。 ・ 複合の関係によってそれぞれ例を挙げて説明して教えました。 ・ 複合動詞の意味関係、例えば補足関係、並列関係、主述関係、形式的意味への移行、抽象的意味への移行

	<ul style="list-style-type: none"> ・ まず、大量の例をあげながら複合動詞の前項動詞と後項動詞の意味特徴を学生にまとめてもらう。主にその複合動詞のプロトタイプ意味用法に重点を置いて説明する。その他の意味への拡張は、習得状況に応じて、説明を進める。 ・ 「聞き返す」「聞き」は聞くという動詞から、「返す」という動詞と一緒にになると、単独の動詞で表せない意味を表す
後ろにつく後項動詞 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主によく使われている複合動詞の後ろの部分の意味合いなど例えば「～切る」の基本的な使い方など。 ・ 複合動詞の語基、例えば～かける、～出す、～切る、～切れる、～込む、～抜く、～始める、～終わる、～得る、～かねる、～すぎるなど
接続法 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複合動詞の接続を中心に教えた。意味も触れた。 ・ 複合動詞の接続法と意味を教えました。
構成、構成法 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複合動詞の意味または構成法について ・ 複合動詞の語構成、例えば V+V、N+V、A+V
活用 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「持ってくる」の活用を教えた時、ついでに「乗り越える」のような複合動詞は活用は後ろの動詞の類に従うなどと教えた。
概念、規則 (1、1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複合動詞の概念 ・ 複合動詞の規則

表 6 のうち、複合動詞の分類、意味関係について教えている日本語教師が最も多かった。分類、意味関係については、「補足関係」、「並列関係」、「主述関係」、「形式的意味への移行」、「抽象的意味への移行」といった 5 つの分類で説明していた。また、複合の関係によってそれぞれ例を挙げて説明し、前項動詞と後項動詞の意味特徴をも教えるとしている。「その複合動詞のプロトタイプ意味用法に重点をおいて説明し、その他の意味への拡張は、習得状況に応じて、説明を進める。」という記述を見ると、多義的な意味を持っている複合動詞の場合、プロトタイプ意味用法以外は学習者の習得状況に応じて説明することになり、十分な説明になっているかどうかは疑問である。他方、「聞き返す」のように前項動詞「聞く」と後項動詞「返す」を組み合わせることにより、単純動詞では表わせない意味を持つこと、つまり複合動詞の特徴についても教えていた。

以下、学習者から複合動詞に関する質問を受けたことがあるかどうか、具体的にはどのような質問が多かったかについて見てみる。

【Q2 複合動詞について質問されたことがありますか。】

【ある：4名 ない：6名 覚えていない：1名 無回答：4名】

具体的にどのような質問があったかは以下の通りである。

【Q2-1 どのような質問を受けましたか。具体的に書いてください。】

- ・ ほとんど意味についての質問です。
- ・ 複合動詞の意味、複合動詞の使い方
- ・ 意味は何か。使い方はどうなるか。活用形や自他性は変わるかについて質問されていた。
- ・ 一年生で文に出てきた複合動詞に「普通の動詞ではないな」という疑問があって、説明していました。

複合動詞の意味に関する質問が最も多く、一年生つまり初級レベルにおいても複合動詞が文中に現れた場合、それについて説明していた。意味に関する質問以外、複合動詞の使い方、活用形、自他性について質問を受けていた。

7. 1. 2 教師の複合動詞観

ここでは、日本語教師自身が複合動詞についてどのような意識も持っているのかについて考察する。まず、日本語教師に複合動詞はどのようなものだと思うか尋ねた。

【Q3 複合動詞はどのようなものだと思いますか。具体的に書いてください。】

教師は複合動詞を主に複合動詞の構成と複合動詞の表現の特徴という二つの面で考えていた。

- ・ 動詞の中立形の後にもう一つの動詞がついて、全体として一つの動詞のようになったものだと考えています。
- ・ 二つの動詞の複合によってできた動詞のことだと思っています。
- ・ 二つの動作を合わせて表すのに使う動詞、2語の複合によってできた動詞
- ・ 二つの動詞からなっているもの。
- ・ 狭い意味では、複合動詞は一つの動詞とも一つの動詞を結びつけてできた複合語だと思う。
- ・ 具体的な意味を持っている二つの動詞を組み合わせたものである。

一つは複合動詞の構成に関する回答で、主に二つの動詞からなり、全体に動詞の働きをしているものを複合動詞だと考えている。中には、「二つの動作を合わせて表すのに使う動詞」と「動作」を表す際に使うものとして捉えている。また、「具体的な意味を持って

いる二つの動詞を組み合わせたもの」であると意識しており、例えば「取り押さえる」の場合、「取り」は複合動詞の中では具体的な意味を持たないが、後項動詞「押さえる」と結合することにより、単純動詞「押さえる」だけでは表わせない表現になっているという記述もあった。また、二つの動詞からなっているものだと意識はしているものの、「具体的な意味を持っている」、「二つの動作を合わせて」と答えた教師もいて、多少あいまいに捉えるように見える。

もう一つは単純動詞と比べ、複合動詞の特徴を述べていることで、主には以下の特徴を示している。

- ・ 中国語にも同じような現象があるので、日本語特有なものだと思わない、動作や作用の段階や状態が具体的に正確に表現できるものだと思う。
- ・ 表現をより豊かに、明確にする言葉であると思っています。
- ・ 単語としても、文法要点としても覚えなければならないもの
- ・ 一つの単語として説明しにくいあるいは説明しきれない時がある。その使い方をうまく説明しようとするにはあるいは学生に理解してもらうためには一つの単語そのものの内容はまだまだ足りない。文や談話レベルなどを十分に考慮した上で、導入すべきではないかと思われる。
- ・ 二つの動詞が一緒になることで、単独では言い表せない意味を表すことができる。
- ・ ある動作の表現力を高めるための存在だと思います。例えば、「住む」と「住み込む」を使う時、「住む」はただ現状を述べるだけに対して、「住み込む」の場合は更に参与する程度を表すことができます。複合動詞を使うことによって表現力が豊かになることにつながります。

以上、日本語教師は複合動詞について主に動作や作用の段階や状態が具体的に正確に表現できることができ、表現をより豊かに明確にし、単純動詞では言い表せない意味を表すことができると意識していた。また複合動詞は基礎日本語の勉強において、欠かせない項目であると指摘し、複雑な意味構造を持っていて、その習得は難しいものであると学習の必要性と習得の困難を指摘している。次は、教育現場の教師は複合動詞の習得について必要だと思っているかどうかについて考察することにする。

(1) 複合動詞の習得の必要性

【Q4 複合動詞の習得は必要だと思いますか。】

【(A)必要：11名 (B)少し必要：3名 (C)あまり必要ではない：1名】

複合動詞の習得が「(A)必要・(B)少し必要」と答えた教師は14名で、ほとんどの教師は日本語教育において複合動詞は習得の必要があると考えている。「(C)あまり必要ではない」と答えた教師は1名であった。必要としたらあるいは必要でないとしたらその理由は何かについて尋ねたところ以下のような回答を得た。

【Q 習得の必要性→その理由は？】

複合動詞の習得が「(A)必要」と意識している教師は、その理由について「自然な日本語を習得する」ため、「単語・文法要点として重要で日本語の勉強」に役立つ、「割合が高く、大きな特徴」を持っているためと大きく3つ挙げていた。

まず、学習者にとって複合動詞の習得が必要である理由として最も多かったのは以下のような理由である。

- ・ 自然な日本語表現には必要だから。自然な日本語を習得するために。
- ・ 日本語の使用方法を身につけるために必要な内容である。
- ・ 自然な日本語を身につける、日本語表現を豊かにするには欠かせない。

教師は複合動詞を習得することを自然な日本語を身につけることと結び付けている。学習者も同様に、複合動詞の習得が必要である理由として「日本語らしい日本語、自然な日本語を学べる」ことであると意識していた。現場の教師は複合動詞を学習する重要性についても触れている。

- ・ 複合動詞に関する知識が不十分なままでは、上級段階に進もうとしてもなかなか無理だから。
- ・ 単語としても、文法要点としても覚えなければならないもののため。
- ・ 言語実用に必要、コミュニケーションに不可欠。

複合動詞は語彙としても文法としても捉えられ、語彙的な側面と統語的な側面を持っているため、学習者にとって学習の必要があると考え、日本語を応用する際、日本語でコミュニケーションをする際、必要不可欠であると考えている。複合動詞の知識が不十分なままでは、上級レベルに達することは難しいと指摘した教師もいた。話し言葉中心の初級レベルから、書き言葉中心の中上級レベルに進むにつれ触れる複合動詞は急増し、学習の妨げになる可能性があると考えられる。

また、複合動詞は次のような特徴を持っているため、習得が必要であるとしている。

- ・ 割合の高さが、その一番の理由だと思う。
- ・ 複合動詞は日本語の大きな特色の一つだと思う。

複合動詞の習得が「(B)少し必要」と答えた教師は3名で、具体的には次のような理由を挙げている。

- ・ 教えなければ複合動詞がどういう意味かどういふふうに使うか分からないから
- ・ 具体的な意味を持ち、生活で使われているため、必要だと思う。特別なもの「～だす」、「～はじめる」のようなものは少し取り組むべきだと思う。
- ・ 複合動詞の構成や使う時の注意事項について説明する必要があると思います。

複合動詞を教えなければ意味や使い方が分からないため、少しは教える必要があると考えている。特に「～出す」と「～始める」のような類義のもの、複合動詞の構成や使う時の注意点については少し取り組むべきだと指摘している。

複合動詞の習得が「(C)あまり必要ではない」と答えた教師は1名で、「一つの項目として習得する必要がなんとなくないと思われる」とその理由を述べている。

(2) 教育活動中の問題点・改善点

日本語教育現場において、問題点となっている点、改善すべき点、学習者の習得状況の問題点、教授法などについて自由記述してもらった結果、以下のような回答があった。

【Q5 問題になっている点、改善すべき点などご意見を自由に書いてください。】

- ・ ケースバイケースで指導してきたので、一つのテーマとして取り上げたことがなく、深く考えたことがなかった。あえて言わせれば系統性がかけるということだろう。
- ・ 教師によって認識差があるので、複合動詞を一つの重要な内容として特に時間を用いて教えたことはありません。いつも「ついでに」という感じでした。
- ・ 習得時期の検討が必要だと思います。

これは、複合動詞を特に学習項目として捉えておらず、付随的学習を主としていることが窺える。そして習得の時期、指導の段階について検討が必要であると指摘している。

その他には、複合動詞を学習する上で、参考になる資料、辞書、教科書での複合動詞の扱い、提示の仕方、練習（ドリル）などに関していくつか改善点を挙げている。

- ・ 複合動詞の結合度について参考になれる資料が少ない。
- ・ 複合動詞の使い方や使う場面をまとめた辞書があるとよい。
- ・ 教科書ではあまり触れていない。教授法もばらばらで、統一した要綱がない。
- ・ 初級の日本語学習者にとって、複合動詞を学びましたが、実にはあまり使わないため、複合動詞の練習を増やすことが必要ではないかと。
- ・ 複合動詞が一つの単語として教えることはまだ不足していると思われる。やはり、

複合動詞はどのように前後の文脈などと結びついて理解するのかは大事なことだ
と思う。これから複合動詞の基本規則を教えると同時に具体的にその産出した文を
どのように指導すべきなのかに焦点を当てる必要がある。

また、複合動詞を指導する際の注意点として以下のようなものを挙げている。

- ・ 日本語教育現場において、学生には複合動詞の使用を避ける傾向がある。教材も複
合動詞についての説明が足りないようだ。複合動詞を教える時、用例の収集、意味
特徴の提示、具体的な使用場面を例に取り上げながら、説明したほうが良いと考え
られる。
- ・ 一般的な複合動詞はともかく、上述したような「～だす」、「～はじめる」のような
区別して使うものは学習者に気をつけてもらう必要がある。

つまり、学習者は複合動詞の使用を避ける傾向があるため、具体的な使用場面を例とし
て取り上げながら説明を行い、「～出す」、「～始める」のような類義の複合動詞に関して
は、相違点について具体的な指導を行う必要がある。

以上、日本語教師を対象とした意識調査について考察した。複合動詞の指導に関して、
教師全員複合動詞を教えたことはあるが、主に複合動詞が使われた際に指導を行う付随的
学習が行われていることが分かった。複合動詞の分類、意味関係について教えた教師がも
っとも多く、後ろにつく後項動詞、接続法、構成、活用、概念、規則などについても教え
ていた。

また、日本語教師は主に構成と表現の特徴の二つの面で複合動詞を捉えていた。9割以
上の教師は複合動詞の習得が必要であると考え、その理由は、自然な日本語を習得するた
め、単語・文法要点として重要で日本語勉強に役立つ、割合が高く大きな特徴を持ってい
るためと指摘していた。教育活動の中では、付随的学習の傾向が強いことや複合動詞を学
習する上で参考になる資料、辞書、教材、教材の中の扱い方、提示の仕方などに改善の必
要があると指摘していた。

7. 2 日本語教育への示唆

本研究では、まず先行研究の理論的枠組みと予備調査での問題点を踏まえ、中国人学習
者の複合動詞の習得状況を調べた。文産出テスト、日中翻訳テストを行い、その結果から
日本語の複合動詞に対応する中国語表現をもとに総合的に誤用分析を行い、学習者の習得

における困難点、誤用などを明らかにした。また、複合動詞の習得状況が明らかになり、複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得が困難度を増すという仮説も検証できた。

以上の考察を踏まえ、日本語教育現場では以下の点を指摘したい。

- i. 学習者にとって複合動詞の前項動詞または後項動詞の意味変化の度合いが大きければ大きいほど習得困難度が増し、誤用も多様になってくる。そのような誤用を防ぐため、教育現場では、学習者のレベルに応じて、意味変化の度合いが小さいものから大きいものへと提示し指導することが望ましい。
- ii. 産出・翻訳両テストの差はタイプ②からタイプ④にかけて広がり、タイプ①は産出も理解も最もやさしく、タイプ⑤は産出、理解ともに困難であった。つまり、意味の変化度合いにより、文脈中で理解可能な複合動詞や文脈中でも理解が困難な複合動詞がある。文脈中でも理解困難な複合動詞については、初級での導入は避け、中上級の段階で注意しながら指導すべきだと考える。
- iii. 学習者は前項動詞あるいは後項動詞の片方の意味を捉える傾向が強く、主に中国語では並列関係、補述関係の複合動詞がこれに対応する。この種の複合動詞は前項動詞と後項動詞ともにそれぞれの意味について確認し、どちらの意味も重要であることを教えることが必要である。
- iv. 学習者の文産出に見られるもう一つの特徴は同じ前項動詞あるいは後項動詞を含む他の複合動詞との混同であった。それらは、中国語で「副詞的修飾語＋動詞」の、補述関係で対応する複合動詞が多い。これら混同しやすい複合動詞について、どこがどのように違うのか具体的な説明をする必要がある。
- v. タイプ②、タイプ③、タイプ④のように前項あるいは後項の意味が変化していてもある程度意味の推測が可能な複合動詞が存在する。この種の複合動詞については、その動詞を含んだ文脈をできるだけ多く提示し、使い方と意味の定着を図ることが望ましい。一方、意味の推測ができず、複合動詞の漢字のみの組み合わせで理解する誤用（中国語ではフレーズ表現に対応する複合動詞）も多かったため、これらはまず意味の確認をきちんと行うことが大切であろう。

更に、学習者の複合動詞の使用、学習の必要性に関する意識調査および日本語教師の複合動詞指導観、複合動詞観では様々な意識や要望が挙がっていた。それらを含め、日本語

教育では以下の点を指摘したい。

- ① 複合動詞の指導については、学習項目として授業に組み込まれるケースより、学習者が犯した誤用の場面、文中に現れる複合動詞について付随的学習を行うケースが多かった。今回の学習者の複合動詞の習得状況や学習の必要性、教師の複合動詞観などから見て、教育現場ではまず、学習項目として複合動詞を体系的に指導する必要があると考える。
- ② 複合動詞について意味だけではなく、文脈を多く提示することや、複合動詞の構造、翻訳についても指導する必要があると考える。特に日本語教師の回答で挙げたように、参考になる資料、辞書、教材の中の提示の仕方などの面で改善を行い、複合動詞の学習を支援する必要がある。

第8章 結論

8.1 まとめ

本研究では、まず姫野(1999)、森田(1994)の複合動詞の分類および予備調査の結果を踏まえ、日本語教育の観点からタイプ①からタイプ⑤まで複合動詞の新しい分類を試みた。

そして、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現について構成要素の面と意味関係の面から考察を行った。分析対象として、村上春樹の小説「風の歌を聴け」とその中国語訳版(林少華訳)を取り上げ、取り出した複合動詞 336 語(異なり語数 242 語)に対応する中国語表現について考察を行った。日本語の複合動詞に対応する中国語表現を大きく、語あるいは複合語レベルで対応するものと語レベル以上で対応するものと2つに大別した。語あるいは複合語レベルで対応するものから四字熟語を除いて構成要素の品詞の面から具体的にみると、それぞれの語は「動詞+動詞」、「動詞」、「動詞+形容詞」、「形容詞」、「動詞+助詞」、「動詞+名詞」という品詞の組み合わせになっていた。語レベル以上で対応するものは、フレーズ表現になるものと副詞的修飾語+動詞になるものがあった。

また、「複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得が更に難しい」という仮説を立て、学習者にとって一番習得しにくい複合動詞はどのようなものなのか、具体的な習得状況はどのようなものかを明らかにした。上級レベルの学習者 30 名を対象に、複合動詞に関する意識調査、文産出テスト、日中翻訳テストを実施した。その結果、複合動詞の前項と後項の変化の度合いが大きければ大きいほど学習者の習得困難度が増し、仮説が検証できた。2 種のテストにより、タイプごとの習得状況が明らかになった他、学習者の産出、理解に差があることも分かった。学習者の複合動詞の使用、学習の必要性に関する意識も明らかになった。

更に、学習者が産出した文について誤用分析を行った結果、次のような誤用が見られた。

1) 前項動詞あるいは後項動詞のみの意味で捉える

(パーティーの誘いを受け取った方は今席スーツを着て出席してください／今学期新しい日本語の授業を受け取る予定なんです)

2) 同じ前項動詞あるいは後項動詞を含む他の複合動詞との混同する

(この店は非常に人気がある。今日のパンを全部売り出した→売り切れた／財布をすりにすられたとたんその人を追い込んでいました→追いかける)

3) 前項動詞、後項動詞の漢字のみを組み合わせる

(10年おけるの努力によって彼はやっと自分の会社を成り立ちました／あの二人は大喧嘩をして友情も怒りで打ち切られた)

4) その他

(彼はまっすぐな人なので取り巻くはきらいです／一年間の努力によってやっと大学の合格を取り成しました)

日本語の複合動詞に対応する中国語の表現、学習者の習得状況、日本語教師の意識調査を踏まえ、本研究では日本語教育へ以下のような提言を行った。

- i. 複合動詞の前項動詞または後項動詞の意味変化の度合いが大きければ大きいほど習得困難度が増し、誤用も多様になるため、学習者のレベルに応じて意味変化の度合いが小さいものから大きいものへと提示し指導することが望ましい。
- ii. 意味の変化度合いにより、文脈中で理解可能な複合動詞や文脈中でも理解が困難な複合動詞がある。文脈中でも理解困難な複合動詞については、初級での導入は避け、中上級の段階で注意しながら指導すべきだと考える。
- iii. 前項動詞あるいは後項動詞の片方の意味を捉える傾向が強く、この種の複合動詞は前項動詞と後項動詞ともにそれぞれの意味について確認し、どちらの意味も重要であることを教えることが必要である。
- iv. 同じ前項動詞あるいは後項動詞を含む他の複合動詞との混同が多く、これら混同しやすい複合動詞について、どこがどのように違うのか具体的な説明をする必要がある。
- v. 前項あるいは後項の意味が変化していてもある程度意味の推測が可能な複合動詞については、その動詞を含んだ文脈をできるだけ多く提示し、使い方と意味の定着を図ることが望ましい。一方、意味の推測ができず、複合動詞の漢字のみの組み合わせで理解する誤用も多く、意味の確認をきちんと行うことが大切である。
- vi. 学習項目として授業に組み込まれるケースより、誤用の場面、文中に現れる複合動詞について付随的学習を行うケースが多く、学習項目として複合動詞を体系的に指導する必要がある。また、学習の参考になる資料、辞書、教材の中の提示の仕方などの面で改善を行い、複合動詞の学習を支援する必要がある。

8. 2 今後の課題

以上、本研究では8章にわたり日本語教育の観点から複合動詞の新しい分類を試み、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現についてまとめた。また、学習者の複合動詞の習

得状況について文産出テスト、日中翻訳テスト、意識調査をもとに具体的に分析を行い、習得困難点、習得状況を明らかにし、それらを踏まえ日本語教育においてどのように支援するかについて提言を行った。

しかし、学習者の誤用について考察を行う際、日本語の複合動詞に対応する中国語の表現の対応関係との関わりを十分に示すことができなかった。学習者における複合動詞の習得状況、誤用の実態は明らかになったものの、対応関係の相違が学習者の誤用に及ぼす影響について言及することができず、今後はそれらを視野に入れた更なる分析に取り組みたい。

また、今回のテストにおいて、同じ意味分類の複合動詞を異なる文脈で提示したことで、正答率に影響を及ぼしたことは反省すべきである。同じ複合動詞であっても異なる文脈で異なる意味を表す複合動詞の多義性につながる問題で、今後はテストにそれらの要素を取り入れ、多義性を持っている複合動詞について学習者の意味知識の深さ広さを測定することも目指したい。

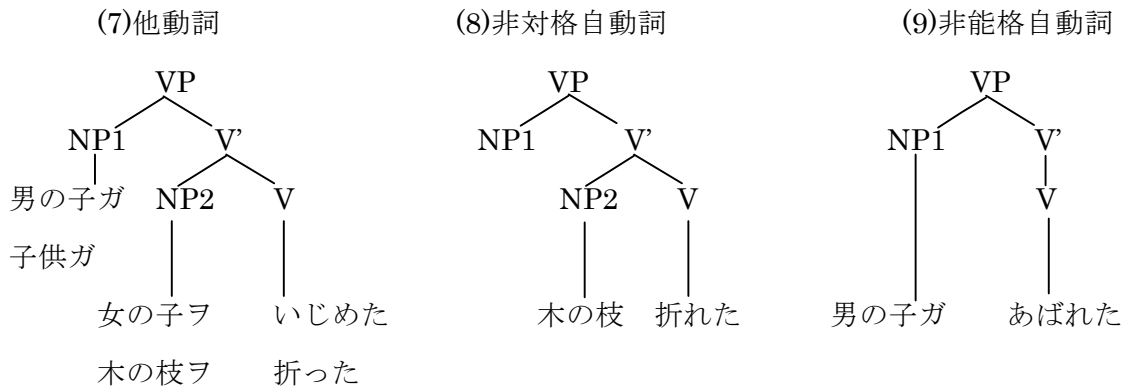
日本語の複合動詞に対応する中国語の表現について、主に小説とその中国語訳版を取り上げ、考察を行ったが、これに関しても今後は小説だけでなく他のジャンルにわたり分析を行いたい。そして、今回は日本語と中国語における複合動詞の体系を具体的に掘り下げて整理するよりもむしろ、日本語教育の立場から、両言語の対応関係と中国人日本語学習者の習得困難点に重点を置いた。今後は、日本語と中国語の複合動詞、更に複合語の構成体系についても構成要素間の特徴を明らかにし、比較分析を行いたい。

学習者の複合動詞の習得状況、学習者および日本語教師の意識調査の結果をもとに日本語教育において指導の際の提言を行っている。しかし、具体的にどのように教えるべきかという具体的な教授法に関して考察は行われていない。

以上を今後の課題としたい。

注

1. 言語の習得及び第二言語における習得に関しては、研究者によりさまざまな定義がされている。本研究における複合動詞の習得は、複合動詞を使って正しく文が作れるかという文産出能力とある文脈の中で正しく理解できるかという理解能力のことである。
2. 山本(1984)では、格成分とその選択制限を含めた幅広い視点から分析すべきとしている。
3. 影山(1993)では、自動詞文「木の枝が折れた」と他動詞文「子供が木の枝を折った」は意味役割付与の一貫性の仮説によると、両者は構造上同じに生成されると指摘している。他動詞文の「木の枝を」が目的語の位置にあるのと同様に「木の枝が」も同じ目的語の位置に生成されるとしている。



(影山 1993 : 46)

(7)、(8)、(9)は統語構造の中でも D 構造と呼ばれるもので、D 構造における文法関係は辞書登録に記載された述語の項構造の情報によって決定されるという。

4. 影山(1993)では、B 類複合動詞は基本的に統語的な補文構造形式に由来するものと想定できると指摘している。例えば「歌手がアリアを歌い終える」というのは「歌手が(自分が)アリアを歌うことを終える」というのとほぼ等しいとしている。
5. 例えば、「押し込む」、「流し込む」などの「込む」は、形態的には自動詞であるが、これら複合動詞全体は他動詞であるため、「込む」は本来の意味を失っている。これらについて影山(1993)は、語彙的複合動詞・統語的複合動詞の判別テストによれば「*お押しになり込む」、「*注入し込む」と主語尊敬語、サ変動詞に言い換えができなく、語彙部門で扱うべきであると指摘している。
6. 「通例」とは受動化などの統語的な文法機能変換規則の操作を受けない場合という意

味である。

7. 松本(1998)では、「(i)Plato, who was a great man, is on the top shelf. (Fauconnier 1985 : 9)」のような例文においても、二つの動詞は同じ主語を取ってはいるが、その表すものはメトニミーの関係にある別のものであるとしている。なお、原則の例外となる現象はこの種の現象と比較検討してみる必要があるかもしれないと指摘している。
8. 二つの動詞の主語に相当する第一項が義務的に同定されることである。
9. 外項を持つものだけが対格を付与するという一般的な原則のことである。
10. 朱(1999)では中国語で「句法結合関係」と記している。本研究ではそれを「構文結合関係」と呼ぶ。
11. 規則を適用していくタイプ。寺田(2001)は Pinker らの英語の動詞過去形の習得は①規則を適用していく **default** タイプ、②頻度と類推による連想記憶タイプ、③そのまま丸ごと覚える、の異なるプロセスで習得するという指摘から仮説を立てた。
12. 認知意味論では、ある語に複数の語義がある場合、それらの語義をイメージ図式によって表現する方法が試みられている。松田(2002)によると、「コア図式」というのは、個々の語義に当てられるイメージ図式を包含するいわばコアとなる図式のことである。
13. 松田(2004)は「語彙能力」とは当該語を適切に使いこなす能力のことであると定義し、ある語を適切に使いこなすには、その語の使用の拠り所となる認知的基盤を内在化することが必要であると指摘している。
14. Shirai(1995)で学習者の意味領域は L1 プロトタイプと L2 プロトタイプの相互作用によるという指摘を踏まえ、白(2007)では、韓国語を母語とする学習者の「～出す」の意味領域は L1 の「～내다」を中心として発達している可能性があると予想した。
15. 森田(1994)では上接動詞、下接動詞と称している。本研究では影山(1993)、姫野(1999)らと同様に前項動詞と後項動詞と呼ぶ。
16. 中国国内では、大学で日本語を専攻として学んでいる場合は、一般的に 3 年次の時に日本語能力試験 1 級を受ける。予備調査ではそのような 3 年生と 4 年生を中上級レベルと見なす。

参考文献

- 阿部一・清水由理子・霜崎實・長嶋善郎・町田喜義・松井敬(1995)『英語教育における語彙習得—発話動詞の分析—』南雲堂
- 天野成昭・近藤公久編(2000)『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』第7巻, 三省堂
- 李暉洙(1997)「中間的複合動詞『きる』の意味用法の記述: 本動詞『切る』と前項動詞『きる』、後項動詞『一切る』と関連づけて」『世界の日本語教育』7, 219-232
- 伊藤たかね・杉岡洋子(2002)『語の仕組みと語形成』研究社
- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 今井忍(1993)「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ—『～出す』の起動の意味を中心に—」『言語学研究』12, 1-24
- 大関浩美(2010)『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版
- 生越直樹編(2002)『対照言語学シリーズ言語科学 4』東京大学出版会
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』日英語比較選書 8, 中右実編, 研究者出版
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎・沈力編(2011)『日中理論言語学の新展望 1 統語構造』くろしお出版
- 影山太郎編(2013)『レキシコンフォーラム No.6』ひつじ書房
- 何志明(2001)「日本語の語彙的複合動詞における『原因』の複合動詞の組み合わせ」『筑波応用言語学研究』8, 1-14
- 何志明(2010)『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の視点から—』笠間書院
- 岸本秀樹編(2010)『ことばの対照』くろしお出版
- 金蘭(2011)「中国人日本語学習者の『～出す』『～切る』の習得状況に関する一考察—文産出テスト・日中翻訳テストのデータをもとに—」神戸大学国際文化学研究科修士論文
- 國廣哲弥編(1982)『ことばの意味 3 辞書に書いてないこと』平凡社
- 国広哲弥(1994)「認知的多義—現象素の提唱」『言語研究』106, 22-45

- 国立国語研究所(1984)『語彙の研究と教育（上）』日本語教育指導参考書 12, 大蔵省印刷局
- 斎藤倫明(1984)「複合動詞構成要素の意味—単独用法との比較を通して—」『国語語彙史の研究 五』, 399-414, 国語語彙史研究会
- 斎藤倫明(1992)『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』ひつじ書房
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁(2010)『詳説第二言語習得研究—理論から研究法まで—』研究社
- 朱徳熙(1999)『朱徳熙文集』商務印書館
- 竹中佐英子(2008)「中国語に対応する日本語表現—中国語の補語を中心に—」日中言語対照研究論集 10 号, 117-130
- 陳曦(2006)「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察：学習者の作文産出に基づいて」『ククロス：国際コミュニケーション論集』3, 1-15
- 寺田裕子(2001)「日本語の二類の複合動詞の習得」『日本語教育』109, 20-29
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 湯廷池(1989)「漢、英、日三種語言複合動詞的對比分析」『漢語詞法句法統集』学生書局, 147-211
- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子(1987)『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 4』荒竹出版
- 野田大志(2011)「現代日本語における複合語の意味形成—構文理論によるアプローチ—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文
- 野村雅昭・石井正彦(1987)『複合動詞資料集』国立国語研究所報告書
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 白以然(2007)「韓国語母語話者の複合動詞『～出す』の習得：日本語母語話者と意味領域の比較を中心に」『日本語教育論集：世界の日本語教育』（国際交流基金）17, 79-91
- 藤田昌志(2007)『日中対照表現論』白帝社
- 松田文子(2000)「日本語学習者による語彙習得」『世界の日本語教育』10, 73-89
- 松田文子(2002)「日本語学習者による複合動詞『～こむ』の習得」『日本語教育論集 世界の日本語教育』12, 43—59
- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』ひつじ書房

- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』119, 37-83
- 松本曜(2003)『認知意味論』大修館書店
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1(3), 61-76
- 村上春樹(2004)『風の歌を聴け』講談社文庫
- 森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14, 早稲田大学語学教育研究所, 69-86
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行(1994)「動詞の複合における意味構成」『動詞の意味論的文法研究』明治書院, 281-297
- 森田良行(2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版
- 山本清隆(1984)「複合動詞の格支配」『都大論究』21, 32-49
- 由本陽子(1996)「語形成と語彙概念構造—日本語の『動詞+動詞』の複合語形成について—」『言語と文化の諸相』奥田博之教授退官記念論文集, 105-118
- 由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房
- 由本陽子(2011)『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』開拓社
- 林少华(2008)『村上春樹文集 且听风吟』上海译文出版社
- 박용일(2010)「일본어 교육을 위한 일본어 복합동사와 이에 대응하는 한국어 패턴의 고찰」『일본연구』46, 367-381
- Matsumoto, Yo(1996)Complex Predicates in Japanese:A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'.Stanford:CSLI Publications,Tokyo:Kurosio Publishers.
- Pinker,S(1991)Rules of Language.Science253:530-535
- Pinker,S.and Prince,A(1991) Regular and Irregular Morphology and the Psychological Status of Rules of Grammar.BLS17:2230-2251
- 『現代漢語詞典』第5版, 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編, 商務印書館, 2005
- 『現代日本語』胡振平主編, 上海外語教育出版社, 2002
- 『広辞苑【第六版】』岩波書店, 2008

- 『新版日本語教育事典』大修館，2005
- 『新日漢辞典【増訂版】』遼寧人民出版社，2002
- 『中国語大辞典』大東文化大学中国語大辞典編纂室編，角川書店，1994
- 『中日辞典【第二版】』相原茂編集，講談社，2002
- 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』国際交流基金・日本国際教育支援協，2006
- 『朝日新聞』デジタル版 2011年9月22日「ライフ」トラベル
- 『朝日新聞』デジタル版 2011年9月29日「ライフ」医療・健康
- 国立国語研究所『複合動詞レキシコン』<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp>

『風の歌を聴け』の複合動詞一覧

順位	複合動詞	タイプ	順位	複合動詞	タイプ	順位	複合動詞	タイプ
1	取り組む	③	82	見つけ出す	①	163	嗅ぎわかる	①
2	受け取る	①	83	包み込む	④	164	もみ消す	①
3	振り返る	①	84	振り向く	③	165	のぞき見る	①
4	落ち込む	④	85	ひっぱり出す	①	166	すりきれる	①
5	売り出す	②	86	敷きつめる	①	167	突き立てる	①
6	追い込む	④	87	握りしめる	①	168	老け込む	④
7	思い出す	②	88	見回す	③	169	しゃべり始める	①
8	結びつく	③	89	流し込む	④	170	塗りたくる	②
9	生み出す	①	90	かきあつめる	①	171	聴き続ける	①
10	取り付ける	③	91	消え去る	①	172	叫び出す	②
11	持ち出す	①	92	滑り込む	④	173	かがみ込む	④
12	取り出す	①	93	投げ捨てる	①	174	泳ぎ続ける	①
13	うちあげる	①	94	放り出す	①	175	待ちくたびれる	①
14	乗り込む	④	95	書き出す	①	176	押し開ける	①
15	成り立つ	③	96	突き破る	①	177	いじくり回す	③
16	盛り上がる	③	97	かき回す	①	178	眺め続ける	①
17	突っ込む	④	98	かかりすぎる	①	179	嘸み下す	①
18	つけ加える	①	99	使い果たす	②	180	勝ち誇る	①
19	取り巻く	③	100	黙り込む	④	181	払い落とす	①
20	立ち上がる	①	101	すり抜ける	①	182	聞き違える	①
21	入り込む	④	102	埋め合わせる	①	183	抱き起こす	①
22	生き残る	①	103	乗り合わせる	①	184	落ちかかる	②
23	言い出す	②	104	燃え尽きる	①	185	言い忘れる	①
24	語りかける	③	105	吹き始める	①	186	食い殺す	①
25	話しかける	③	106	くりぬく	②	187	悟り切る	②
26	辿り着く	①	107	取り直す	③	188	書き通す	②
27	立ち寄る	①	108	めぐりあう	②	189	注ぎかける	①
28	通り過ぎる	①	109	信じ込む	④	190	書きしめす	①
29	取り憑く	③	110	こびりつく	③	191	たまりかねる	②
30	流れ出す	②	111	冷え切る	②	192	撒き散らす	①
31	詰め込む	④	112	送り届ける	①	193	歩き続ける	①
32	思いつく	③	113	放り込む	④	194	言い終る	①
33	取り残す	③	114	生い繁る	①	195	生き続ける	①

34	突き出す	①	115	起き上がる	①	196	いじり回す	③
35	飛び立つ	①	116	よじのぼる	①	197	痛み出す	②
36	選び出す	①	117	隣りあう	②	198	売れ始める	①
37	逃げ出す	①	118	凍りつく	③	199	起こり得る	②
38	見上げる	①	119	拭き続ける	①	200	押し続ける	①
39	付き添う	①	120	拭き取る	①	201	捜し続ける	①
40	買い戻す	①	121	飲み続ける	①	202	終わりかける	②
41	置き換える	①	122	沈み込む	④	203	翳り始める	①
42	思い切る	③	123	追い回す	③	204	数え切れる	②
43	吸い込む	④	124	切り裂く	①	205	語り終える	①
44	見失う	①	125	訊き返す	①	206	語り始める	①
45	持ち続ける	①	126	飲み干す	①	207	変わり始める	①
46	吹き飛ばす	①	127	ねじ込む	④	208	考え出す	①
47	言い聞かせる	①	128	着込む	④	209	考え続ける	①
48	やり直す	①	129	抱き続ける	①	210	消え始める	①
49	踏みにじる	①	130	飲み過ぎる	①	211	繰り返始める	①
50	飛び下りる	①	131	吐き捨てる	①	212	苦しみ抜く	②
51	連れ込む	④	132	学び取る	①	213	しゃべり終える	①
52	通りかかる	③	133	数え上げる	③	214	しゃべりすぎる	①
53	歩き回る	①	134	引き払う	①	215	しゃべりまくる	②
54	押し込む	④	135	撃ち抜く	①	216	調べあげる	③
55	見下ろす	①	136	取り去る	①	217	訪ね続ける	①
56	潜り込む	④	137	立ちすくむ	①	218	訊ね回る	①
57	引き返す	①	138	降り出す	②	219	叩き折る	①
58	持ち直す	①	139	飛び去る	①	220	叩き続ける	①
59	見落す	③	140	すり減らす	①	221	立ち止まる	①
60	向いあう	②	141	ひきずり出す	①	222	立ち始める	①
61	捜し出す	①	142	踊り出す	②	223	食べ切る	②
62	飲み込む	④	143	吹きかける	①	224	突き通う	①
63	吹き荒れる	①	144	やり過ごす	①	225	包み始める	①
64	書き続ける	①	145	蹴飛ばす	①	226	落ち着く	⑤
65	払い込む	④	146	焼け残る	①	227	怒鳴り合う	②
66	吹き飛ばす	①	147	打ち切る	⑤	228	眺め終える	①
67	開け放す	①	148	投げ合う	②	229	眺め始めた	①
68	買い換える	①	149	流れ落ちる	①	230	握り直す	①
69	吐き出す	①	150	放り投げる	①	231	抜けかける	②

70	重なりあう	②	151	曲がりくねる	①	232	飲み終える	①
71	考え込む	④	152	読み漁る	③	233	生え揃う	①
72	泣き出す	②	153	食べ続ける	①	234	測りきる	②
73	抱き合う	②	154	刈り込む	④	235	はじけ飛ぶ	①
74	飛び散る	①	155	死にかける	②	236	話し続ける	①
75	乗り継ぐ	①	156	踏み倒す	①	237	引っ張り上げる	①
76	貼りつく	③	157	しゃべり続ける	①	238	広がり始める	①
77	立ち去る	①	158	押しやる	①	239	降り始める	①
78	覗き込む	④	159	眠り込む	④	240	またたき始める	①
79	見捨てる	③	160	もたれかかる	①	241	磨き続ける	①
80	撃ち殺す	①	161	叩き起こす	①	242	呼び得る	②
81	連れ出す	①	162	寝転ぶ	①			

※文脈によっては異なる意味を表し、複数のタイプに当てはまるものもある。

氏 名 (_____)

中国の日本語学習者における複合動詞習得の実態調査への

ご協力をお願い

神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程に在籍しております 金蘭 と申します。

この度、中国の日本語学習者における複合動詞習得の実態調査を実施することとなりました。

お忙しいところ大変恐縮ですが、本調査の趣旨をご理解いただき、アンケートの回答にご協力くださいますようお願い致します。

なお、皆様の回答していただいたデータは研究および論文執筆以外の目的で利用することは
ございません。また、本調査の結果をまとめる際、皆様の個人情報は一切公開せず、個人が特定
できないよう資料化いたします。

1. あなた自身について教えてください。

氏 名 : _____ 学 年 : _____ 年級 _____ 組

連絡先 : 携帯 _____

E-Mail _____

2. 日本語能力などについてお聞きします。*「有・無」は当てはまるものに○をしてください。

日本語学習歴 : _____ 年 日本語能力試験 : 有 (N _____) ・ 無

(旧試験 _____ 級)

日本短期留学経験 : 有 ・ 無

(滞在期間 20 _____ 年 _____ 月 ~ 20 _____ 年 _____ 月)

3. 複合動詞とは何か、知っていますか。知っている複合動詞をご自由に挙げてく
ださい。*5~10 個程度

テスト 1

次の語を使って短文を作ってください。(辞書は使わないこと。状況が分かるよう具体的に作ってください。)

例：泣き出す

- × 彼は泣き出した。
- 1歳になったばかりの姪子は動物のぬいぐるみを見たたん、わーと泣き出しました。

1. 持ち続ける _____

2. 売り出す _____

3. 受け取る _____

4. 結び付く _____

5. 落ち込む _____

6. 打ち切る _____

7. やり直す _____

8. 思い出す _____

氏 名 (_____)

9. 振り返る _____

10. 取り付ける _____

11. 追い込む _____

12. 落ち着く _____

13. 書き続ける _____

14. 言い出す _____

15. 生み出す _____

16. 成り立つ _____

17. 乗り込む _____

18. 取り成す _____

19. 流れ出す _____

氏名 (_____)

20. 盛り上がる _____

21. 突っ込む _____

22. 出し抜く _____

23. 向い合う _____

24. 取り巻く _____

25. 入り込む _____

26. 当て付ける _____

27. 重なり合う _____

28. 語りかける _____

29. 詰め込む _____

30. 仕付ける _____

テスト 2

次の文の下線の複合動詞を文脈の内容に沿って、中国語に訳して下さい。

1. あらゆるものから何かを学び取ろうとする姿勢を持ち続ける限り、年老いることはそれほどの苦痛ではない。(_____)
2. 彼は戦争の始まる直前に苦勞して化学薬品の工場を手に入れ、虫よけの軟膏を売り出した。(_____)
3. 僕がこの手紙を受け取ったのは昨日の3時過ぎだった。(_____)
4. 街には僕の心にしっかりと根を下ろし、思い出の殆んどはそこに結び付いている。(_____)
5. 秋が近づくと、いつも彼の心は少しずつ落ち込んでいった。(_____)
6. 住民は、水道や暖房などの基本サービスを打ち切るなど組織的作戦の被害を受ける。(_____)
7. それが一番いいと思うよ。どこか知らない街に行つてね、そもそもの始めからやり直すんだ。(_____)
8. 僕は三人の女の子の顔を思い出そうとしてみたが、不思議なことに誰一人としてはっきり思い出すことができなかった。(_____)
9. 六色のボールペン、そんなものを抱えて僕たちは坂道を上り、時折立ち止まって港の方を振り返った。(_____)
10. 屋上には電気冷蔵庫の巨大な広告パネルが取り付けられていた。(_____)
11. でもそういった切羽詰まった状況に追い込まれたら、そうなるかも知れない。(_____)
12. 午後は気分が落ち着くノンカフェインのハーブティーや、ルイボスティーがおすすめ
です。(_____)

氏名 (_____)

13. 彼はまだ小説を書き続けている。 (_____)
14. 彼には僕の方から言い出してみるよ。 (_____)
15. 真の芸術が生み出されるためには奴隷制度が必要不可欠だからだ。 (_____)
16. 世の中が何故こんな風に成り立っているのかわかるかもしれない。 (_____)
17. 彼は黙って本を閉じ、車に乗りこんでからサングラスをかけた。 (_____)
18. 先生が二人の学生の口論を取り成した。 (_____)
19. 船の食堂から缶ビールが流れ出したんだな。 (_____)
20. 自分でカットしたらしい前髪は無造作に広い額に落ちかかり、そこからわずかに盛り上がった頬にかけて微かなニキビの痕跡が残っている。 (_____)
21. ダッシュボードの上の煙草の箱をポケットに突っ込んでから、おもむろに僕の手をつかんで車の屋根によじのぼった。 (_____)
22. 知恵を絞って敵を出し抜く年長のブッチと、早撃ちの名人で度胸のある少年のようなあどけなさを残したサンダンス。 (_____)
23. 僕たちは二人きりで向い合っていた。 (_____)
24. 自分と自分を取り巻く事物との距離を確認することである。 (_____)
25. 南向きの窓から直接入り込んでくる太陽の光が眩しい。 (_____)
26. 彼はドアをわざと乱暴に開けたてして私に当て付けた。 (_____)
27. バウムクーヘンのようにきちんと重なり合って淀んでいる。 (_____)
28. 様々な人間がやってきて僕に語りかけ、まるで橋をわたるように音を立てて僕の上を通り過ぎ、そして二度と戻ってはこなかった。 (_____)
29. 体中をずたずたに切り裂かれ、体の入口と出口にプラスチックのパイプを詰め込まれたまま苦しみ抜いて死んだ。 (_____)
30. その真面目さ、昔親からきちんと仕付けられたのが円谷家であった。 (_____)

氏名：_____ 学年：_____年級_____組

連絡先：携帯_____

E-Mail _____

該当する番号には○をし、_____のある場合や質問には具体的に書いてください。

Q 1 テストが終わりました。複合動詞について、難しいこと、よくわからないこと、もっと知りたいことがあれば自由に書いてください。

Q 2 複合動詞について授業で教えてもらいましたか。1つ選んで○をつけてください。

1. 教えてもらった (→Q 2-1、Q 2-2へ)
2. 教えてもらっていない (→Q 3へ)
3. 覚えていない (→Q 3へ)

Q 2-1 どのような場面で教えてもらいましたか。1つ選んで○をつけてください。

1. 会話の授業の時
2. 作文など文章を書く授業の時
3. 複合動詞の使い方を間違えた時
4. その他_____

Q 2-2 「Q 2-1」で選んだ場面について質問します。その場面で複合動詞の何について、どのように教えてもらいましたか。覚えていることを具体的に書いてください。

Q 3 あなたは日本語で文章を書く時や会話をする時、複合動詞を使いますか。

1. はい

どんな時よく使いますか: _____ 時

2. いいえ

その理由: _____

Q 4 複合動詞について先生に質問したり、辞書など調べたりしましたか。1つ選んで○をつけてください。

1. した (→Q 4-1)

2. しなかった (→Q 5へ)

3. 覚えていない (→Q 5へ)

Q 4-1 「1. した」を選んだ人に質問します。複合動詞について、どのような質問を
したり、調べたりしましたか。覚えていることを具体的に書いてください。

Q 5 日本語学習の中で、複合動詞の習得は必要だと思いますか。1つ選んで○をつけてください。また、その理由を書いてください。

1. 必要

理由: _____

2. 少し必要

理由: _____

3. あまり必要ではない

理由: _____

4. 全然必要ではない

理由: _____

学習者の知っていると挙げた複合動詞

複合動詞	度数	タイプ	複合動詞	度数	タイプ	複合動詞	度数	タイプ
見直す	10	①	踏み出す	2	②	立ち上げる	1	③
立ち並ぶ	8	①	申し込む	2	④	立ち入る	1	①
受け取る	6	①	読みかける	2	③	立ち下げる	1	①
書き直す	5	①	仰ぎ見る	1	①	食べ終わる	1	①
乗り込む	5	④	言い出す	1	②	食べ始める	1	①
話し合う	5	②	入れ込む	1	④	使いこなす	1	①
追いかける	4	③	動き始める	1	②	作り出す	1	①
考え出す	4	②	打ち合う	1	②	突っ込む	1	④
考え直す	4	①	打ち切る	1	⑤	跳び上がる	1	①
付き合う	4	③	生み出す	1	①	飛び上がる	1	①
取り出す	4	①	追い押す	1	①	飛び歩く	1	①
引き受ける	4	③	追い込む	1	④	飛び込む	1	④
読み切る	4	②	追いつける	1	③	飛び散る	1	①
聞き入る	3	③	追い詰める	1	③	取り合う	1	③
差し上げる	3	③	送り出す	1	①	取り扱う*	1	③
使い切る	3	②	押しかける	1	③	とりあわせる	1	③
取り上げる	3	③	押し出す	1	①	取りかかる	1	③
走り出す	3	②	落ち込む	1	④	取り組む	1	③
やり直す	3	①	躍り上がる	1	①	習い始める	1	①
売れ切る	2	②	思い込む	1	④	乗り越える	1	③
躍りかかる	2	②	書き上げる	1	①	跳ね飛ばす	1	①
思い出す	2	②	書き取る	1	①	引き出す	1	①
聞き入れる	2	②	書き始める	1	①	引き取る	1	①
聞き取る	2	①	聞きかえす	1	①	ひっかかる	1	③
仕上がる	2	③	切り倒す	1	①	勉強しはじめる	1	①
座り込む	2	④	組み合わせる	1	①	向い合う	1	②
立ち上がる	2	①	組み込む	1	④	やりつける	1	③
辿り着く	2	①	組み立てる	1	①	呼びかける	1	②
飛び出す	2	①	差し出す	1	③	呼び出す	1	①
取り入れる	2	③	澄み通る	1	②	寄りかかる	1	②
引き上げる	2	①	助け合う	1	②			

*「取り扱う」の間違いである。学習者表記のまま記す。

上記の他にも「問い合わせ」、「引き渡し」、「割り合い」、「間に合う」と複合動詞ではないものも挙げている。

海外日本語教育における複合動詞教育の現状調査への

ご協力をお願い

神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程に在籍しております 金蘭 と申します。

この度、海外日本語教育における複合動詞教育の現状に関する実態調査を実施することとなりました。

お忙しいところ大変恐縮ですが、本調査の趣旨をご理解いただき、アンケートの回答にご協力くださいますようお願い致します。

なお、皆様の回答していただいたデータは研究および論文執筆以外の目的で利用することはございません。また、本調査の結果をまとめる際、皆様の個人情報は一切公開せず、個人が特定できないよう資料化いたします。

1. 教授歴などについてご記入ください。

教授歴： _____ 年 担当学年： _____ 年級

担当科目： _____ 使用教材： _____

2. 該当する番号に○をし、 _____ のある場合は具体的な内容をご記入ください。

Q 1 学習者に複合動詞について教えたことがありますか。 1つ選んで○をつけてください。

1. 教えたことがある (→Q 1-1、Q 1-2へ)
2. 教えたことがない (→Q 2へ)
3. 覚えていない (→Q 2へ)

Q 1-1 どのような場面で教えましたか。

1. 会話の授業の時
2. 作文など文章を書く授業の時
3. 学習者が誤用した時
4. その他 _____

Q 1-2 「Q 1-1」で選んだ場面について質問します。その場面で複合動詞の何について、どのように教えましたか。覚えていることを具体的に書いてください。

Q 2 学習者から複合動詞について質問されたことがありますか。1つ選んで○をつけてください。

1. 質問されたことがある (→Q 2-1)
2. 質問されたことがない (→Q 3へ)
3. 覚えていない (→Q 3へ)

Q 2-1 「1. 質問されたことがある」で○をつけた方に質問します。学習者から どのような質問を受けましたか。覚えていることを具体的に書いてください。

Q 3 複合動詞とはどのようなものだと思いますか。具体的に書いてください。

Q 4 日本語教育において、複合動詞の習得は必要だと思いますか。1つ選んで○をつけてください。また、その理由を書いてください。

1. 必要

理由： _____

2. 少し必要

理由： _____

3. あまり必要ではない

理由： _____

4. 全然必要ではない

理由： _____

Q 5 複合動詞について、日本語教育現場において、問題になっている点、改善すべき点、学習者の習得状況の問題点、教授法の問題点などご意見があれば、自由に書いてください。

謝 辞

本論文は博士前期課程および博士後期課程における研究成果をまとめた博士（学術）の学位申請論文です。

本論文の執筆にあたり、常に暖かい激励をいただき、丁寧に指導して下さった林博司教授に深く御礼申し上げます。また、様々な視点から研究に取り組めるようアドバイスして下さった言語コミュニケーションコースの先生方、論文をまとめるにあたり貴重な助言をくださった田中順子教授、中西泰洋流通科学大学客員研究員、齊藤美穂准教授、そして水野マリ子名誉教授に感謝の意を表します。

交換留学時代、大学院へと導いてくださった川島秀一教授、ことばに興味を持たせてくださった中村明教授にも本当にお世話になりました。そして、研究や学会発表などで助けていただいた劉澤軍先輩、同期の木曾美耶子さん、本論文のデータの処理において助けていただいた情報コミュニケーションコースの蘇彦聡さんに感謝申し上げます。ともに院生生活を送り、楽しい思い出をたくさん作ってくれた言語コミュニケーションコース院生の皆さまにも御礼を申し上げます。

なお、貴重な時間をいただき、調査に協力して下さった対象者の方々にも感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

最後に、学業と留学生活に支障のないよう支援をして下さった文部科学省および2年間お世話になった尼崎南ロータリークラブの皆さまに深く御礼申し上げます。

平成 26 年 1 月

金 蘭